KD372
4
82H48430

0054313000

③

0054313-000

KD372－4

信州安曇踊

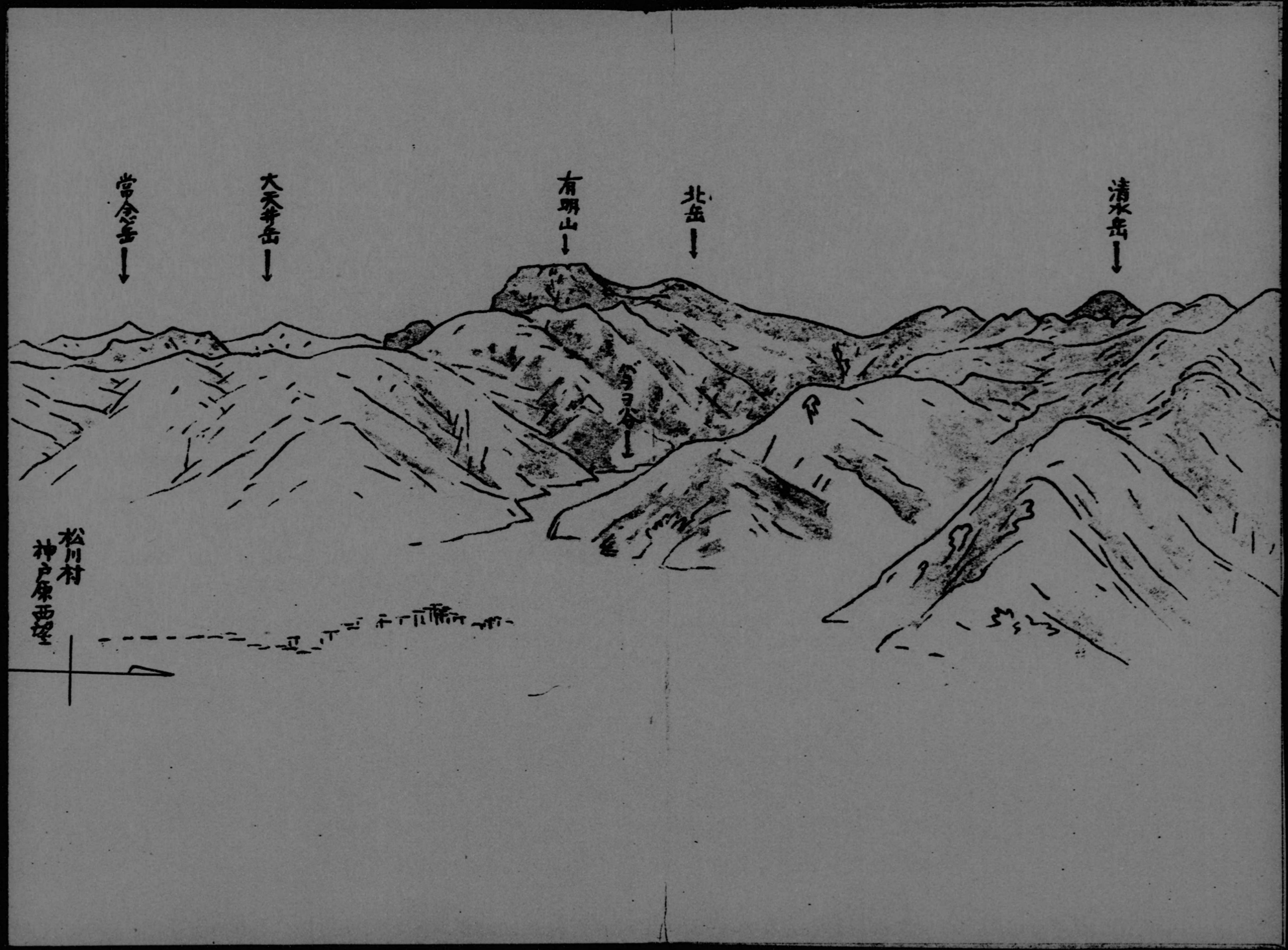
榛葉太生・著

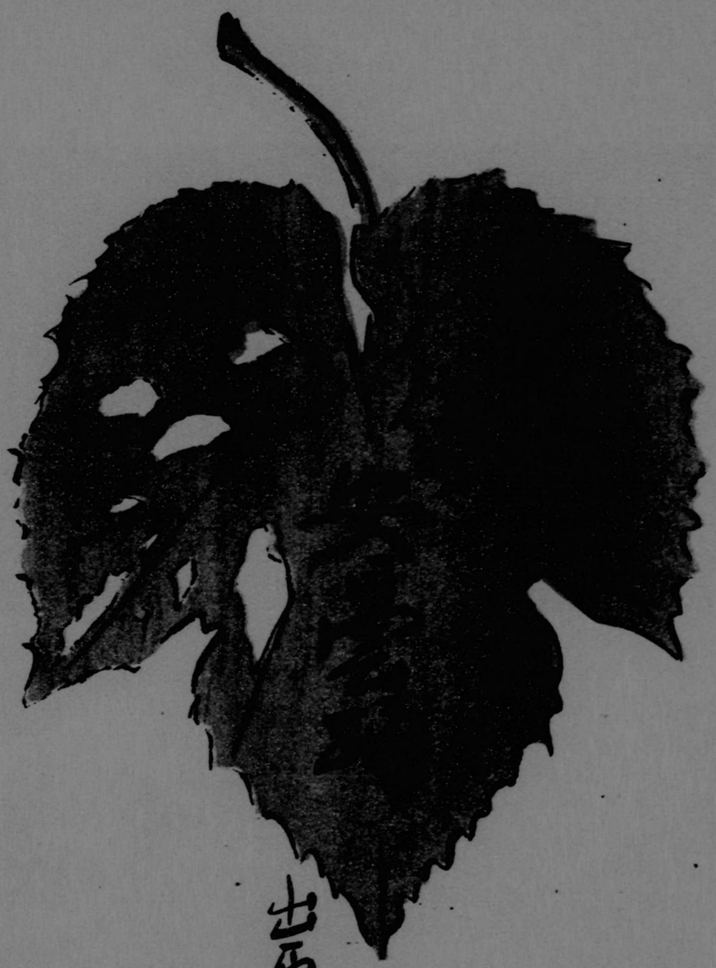
安曇踊会

増訂２版
１９３４．１２

AIC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。


常念岳
大天井岳
有明山
北岳
清水岳
松川村
神戸原西望



出原安士著

安曇踊　第一圖

KD372
4

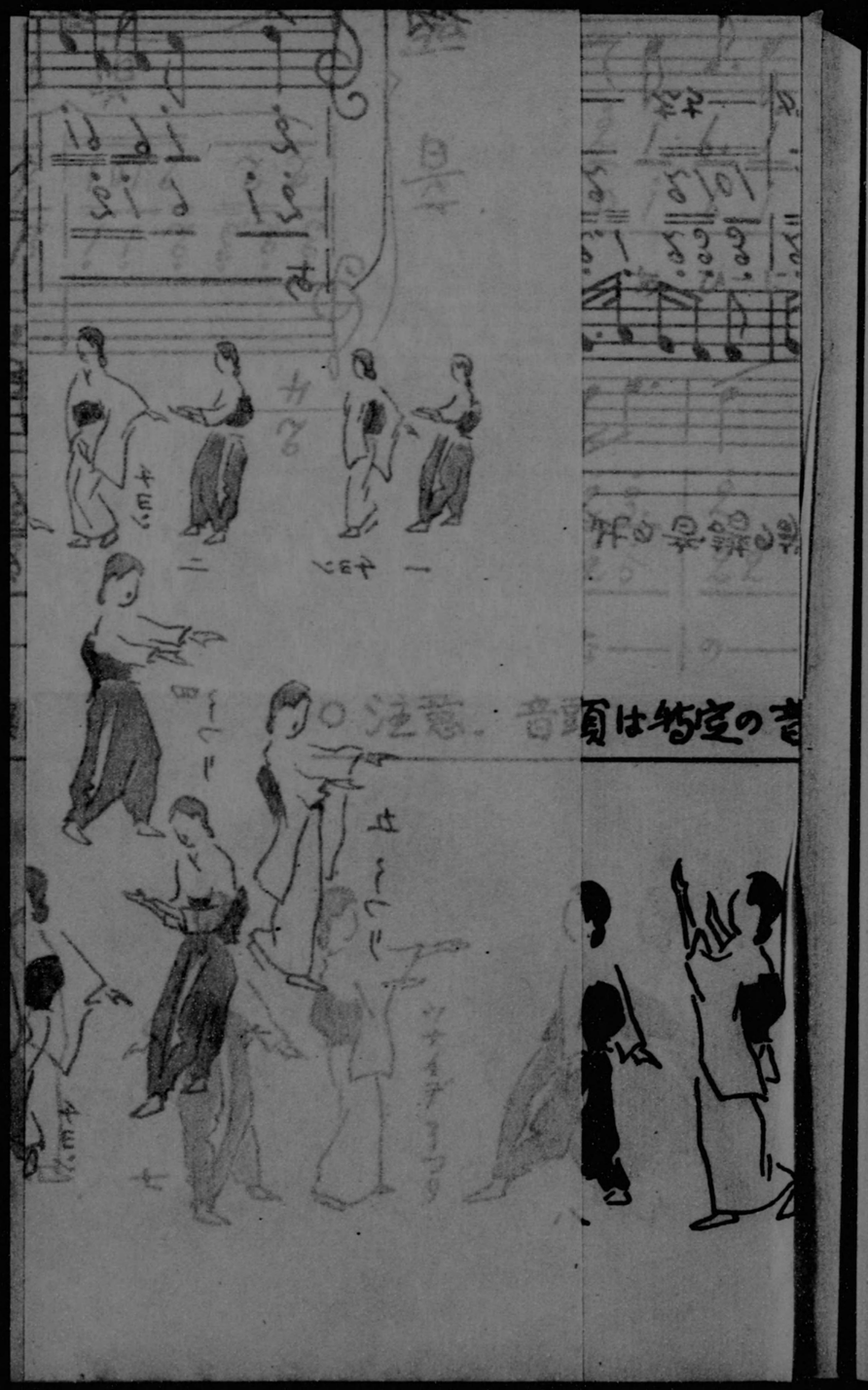
國立國會
57. 9. 14
圖書館藏書

386.8

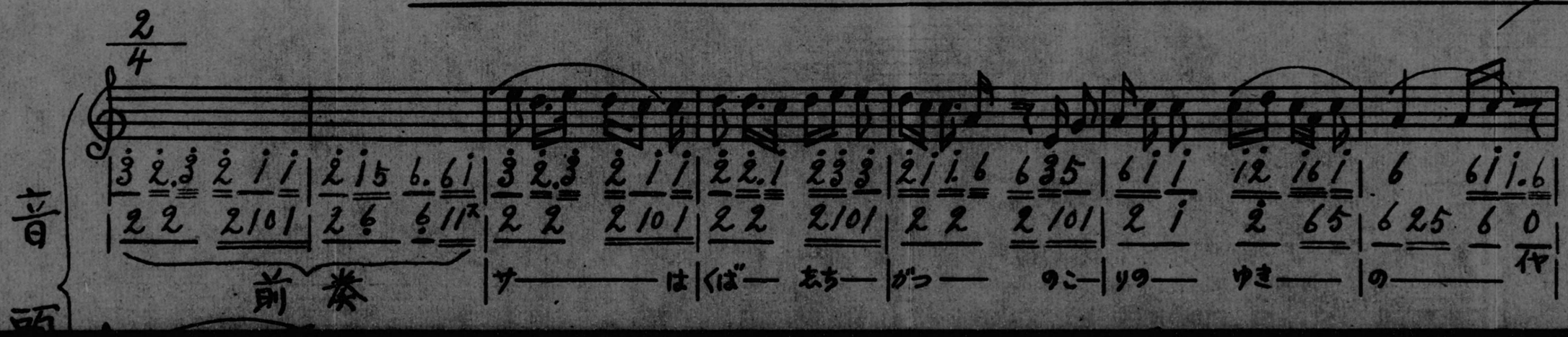
82W48430

安晏踊　第二圖

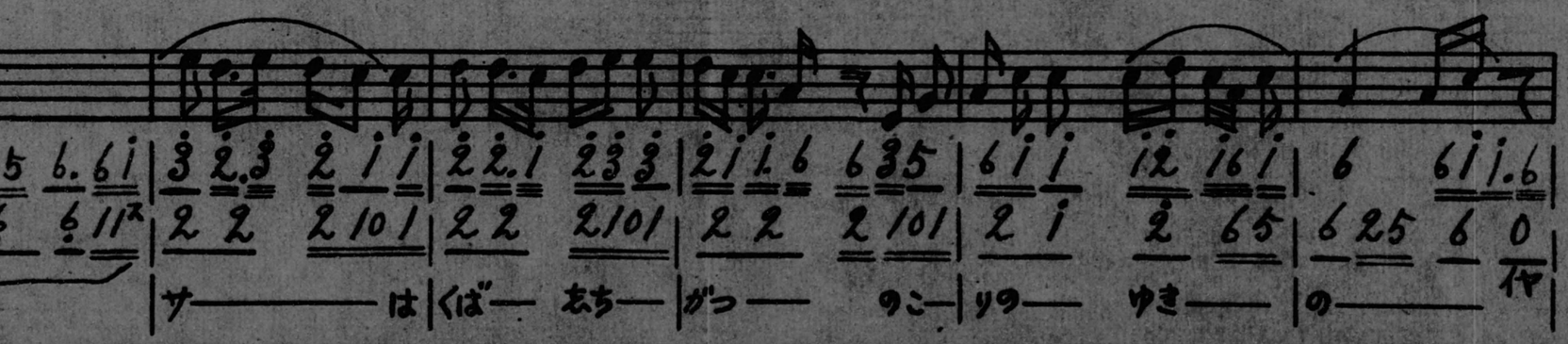
安晏踊　第三圖

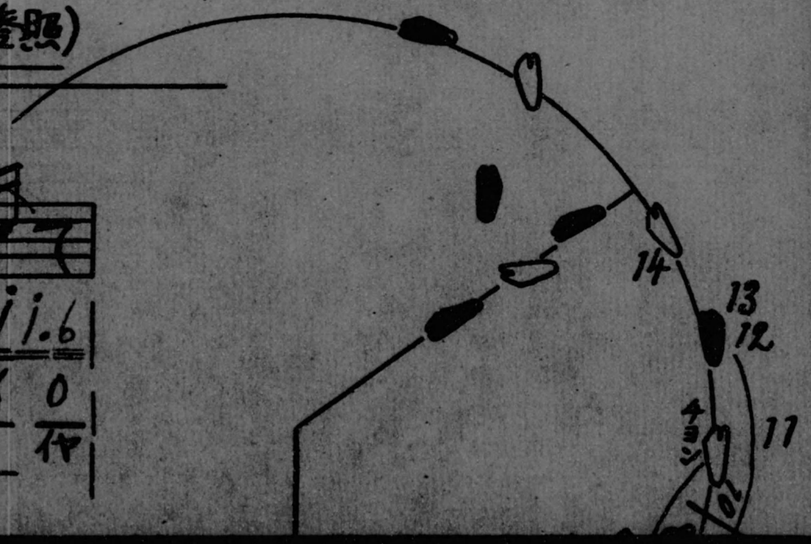


安曇節（ちづみぶし）（此の音譜の説明及び右上方踊の足取り、下方振りの図解才惣て本文参照）



安曇節（あづみぶし）（此の音譜の説明及び右上方踊の足取り、下方振りの図解才惣て本文参照）





音頭

前奏

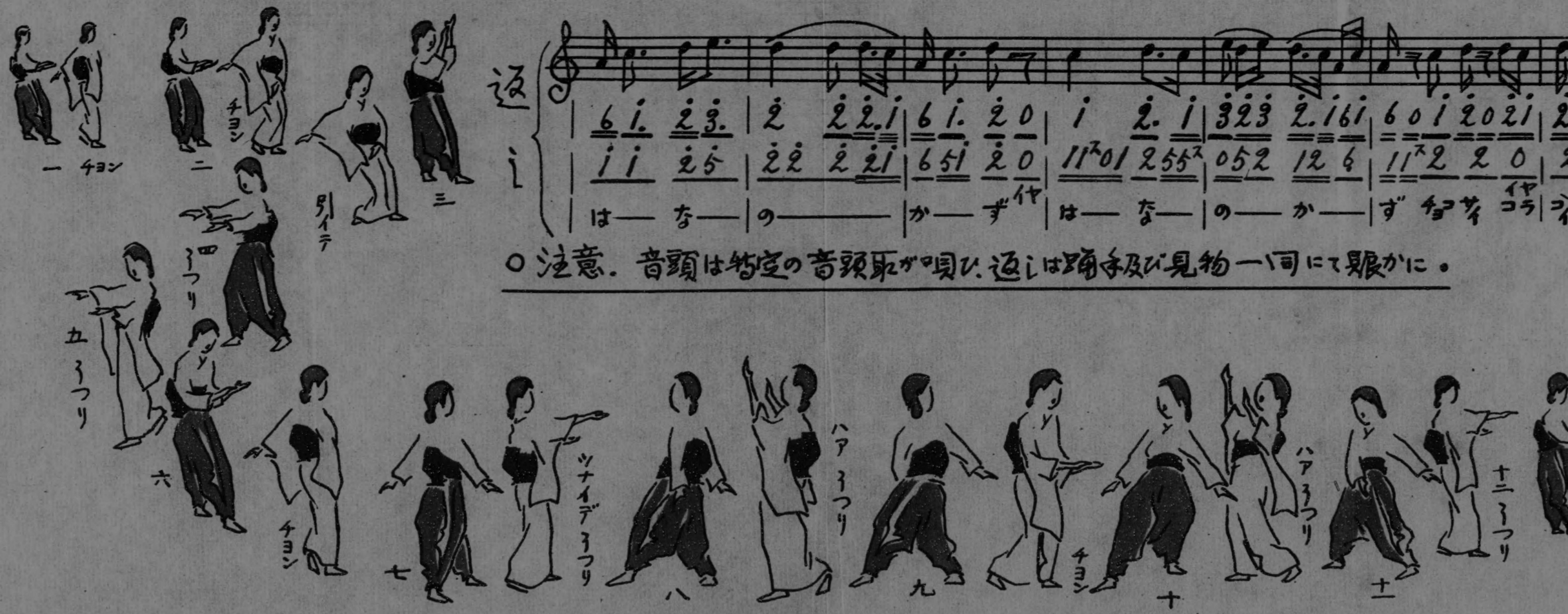
サ——は くば—ぁち— がつ— のこ— りの— ゆき— の——

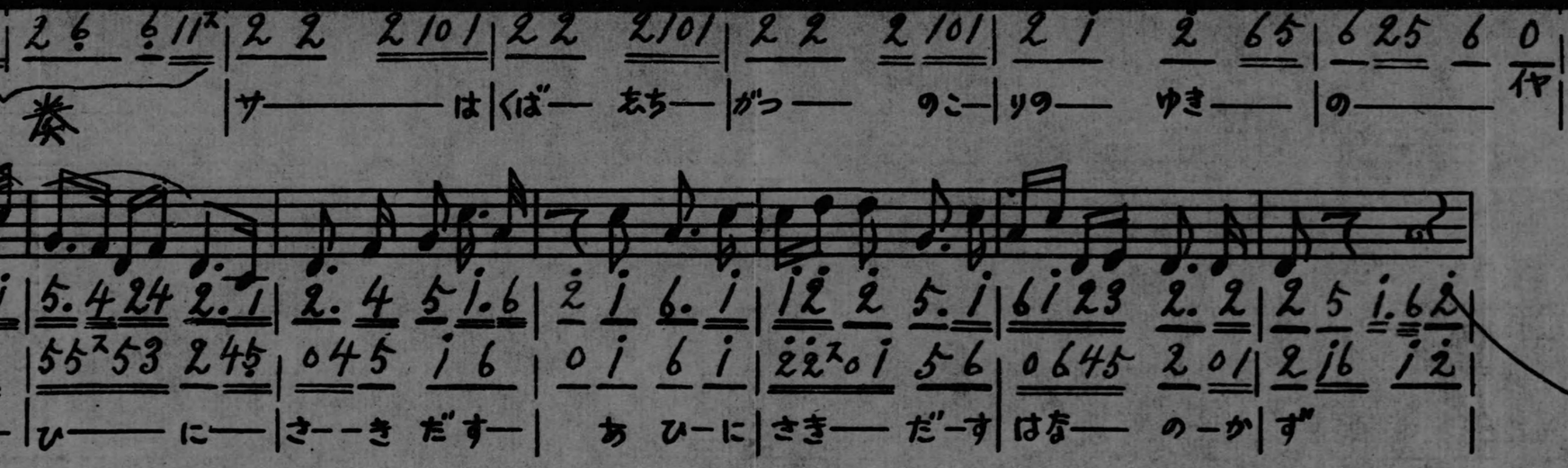
あ—— ひ—に— さ—き だす— あ ひ—に さき— だ—す はな— の—か ず

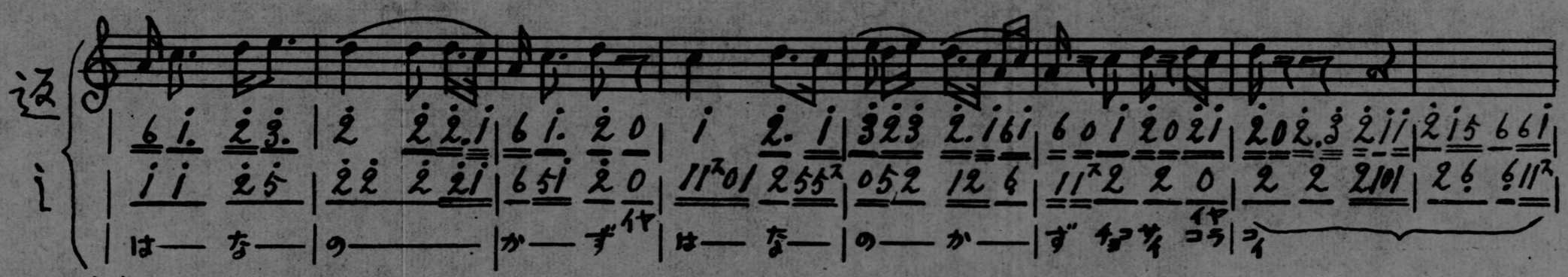
返し

は— な— の—— か— ず イヤ は— な— の— か— ず チョコサイ イヤコラ

○注意. 音頭は特定の音頭取が唄ひ. 返しは踊手及び見物一同にて賑かに。



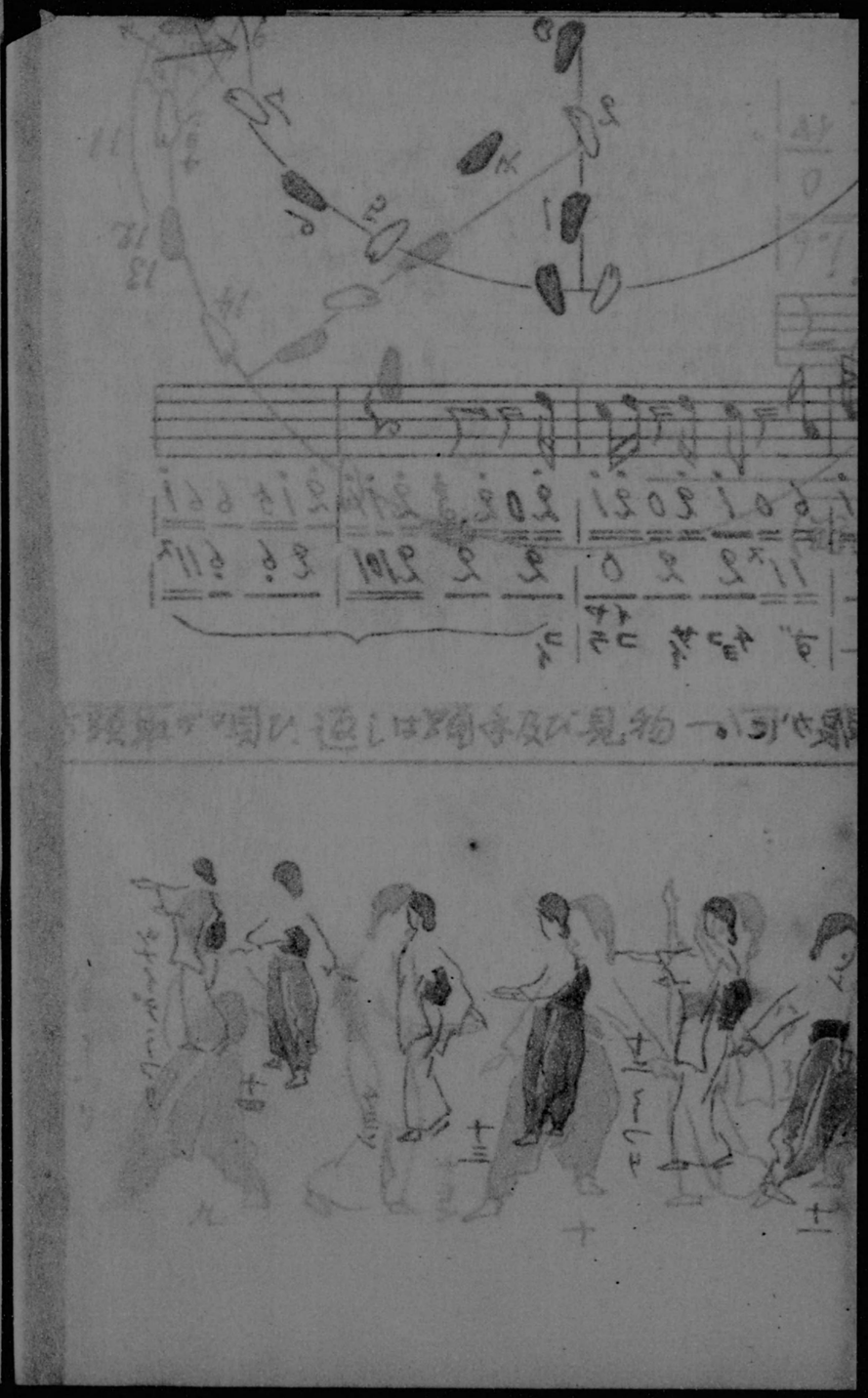




○注意. 音頭は約定の音頭取が唄ひ. 返しは踊手及び見物一同にて賑かに.

目次

○郷土「安曇」及び俚謡「安曇節」の事……（三）
○安曇節の唄ひ方　附、樂器の事……（八八）
○安曇節の踊り方（安曇踊）……（九七）
○安曇踊の始め方（せと合せ）……（一一七）
　共の他注意すべき事ども
○安曇節作詞法……（一二七）
○安曇節歌詞……（一四一）
　△歌詞凡例……（一四一）
　▲特殊の場合に限り用ゆる歌詞……（一四一）



▲踊の場所柄に應じ音頭取が用意すべき歌詞配列の數例……（一四四）
其一、宮城の花見に……（一四四）
其二、白馬山頂にて……（一四六）
其三、白骨温泉にて……（一四七）
其四、同窓會餘興……（一四九）
其五、歌の取合せ……（一五一）
▲安臺節歌詞部門別……（一五三）
一、山岳（山岳、登山、高原、スキー、キャンプ）……（一五五）
二、河川（河川、渓谷、瀧、湖沼、温泉）……（一六六）
三、交通（地理、交通、坂及び峠）……（一七二）
四、名所（名勝、名木、名石、史蹟）……（一七八）
五、名産（水電、有明やまこ、穂高わさび、青木花見の鯉、松川みかげ石、名物いろ〳〵）……（一九八）

六、敬神（神社、寺院、祭禮、信仰）……（二〇五）
七、歴史（民間傳説、史實及び人物）……（二一三）
八、風習（風俗、慣習）……（二三四）
九、老若（禿げ頭、娘、嫁）……（二四二）
十、人情（人情、世態、諷刺、戀愛、別離、厭世、悟道、樂天、祝賀）……（二四九）
十一、生活（貧乏、職業、修身、齊家、興世）……（二五八）
十二、時候（春、夏、秋、冬）……（二六七）
十三、農作（苗代、花田、借馬、馬耕、畜休み、代、田植、農休み、あと山
田の水、田の草、野菜、蠶、烟草、草刈り、土方、柴山子、牧
獲、山仕事、炭燒き、藁細工、雜）……（二七三）
十四、天象（日、月、星、夜）……（二八三）
十五、氣象（雲、霞、霧、虹、雨、露、霜、雪、木花、氷、風）……（二八九）
十六、花（梅、櫻、辛夷、桃、菜の花、蒲公英、躑躅、石南花、藤、芙、
來牛花、種々の花、月見草、桔梗、蕎麥の花、紅葉）……（二九〇）

十七、木石（草木、岩石）……（二九頁）
十八、動物（雉、鷺、雲雀、燕、杜鵑、行々子、水鶏、鷺、梟、日雀、鴉、
獣類、蛙、尺蠖、蟬、蚤、機織り、虫、きりぎりす、鈴虫、魚類）……（二九頁）
十九、野遊び（草摘み、花見、蕨、獨活、筍、岩魚、きのこ、こんまら、鈴
虫捕り）……（三〇一）
二十、踊（踊り場、踊り始め、踊らぬ人、飛び入り、踊の姿、音頭取、唄、
月明、踊半ば、踊さびれる、踊仕舞ひ）……（三〇四）
▲附　言……（三一四）

—（目　次　終）—

圖版目次

○裝　幀……著　者
○口　繪
安曇踊　第一圖（寫眞版）……撮影、東京　高田親義氏
同　第二圖（寫眞版）……同　同
同　第三圖（寫眞版）……同　同
安曇節（音譜、踊の型、足取り）一覽表（オフセット版）……著　者
○挿　圖
大正池に倒影する穗高岳（寫眞版）……撮影、松本　穗苅三壽雄氏
岩登り（同）……同　同

山上のキヤンピング（同）……同
有峯探險（同）……中山喜一氏寄贈寫眞
槍ケ岳に於ける著者の一家（同）……撮影、松本　穗刈三壽雄氏

以　上

再増訂版

信州安曇踊

出原處士著

である、に違ひ無い、など云ふ所は言文の如く、其の間には又べきなり、ざるべからず、なんて書いてもあり、メートル法で云ってるかと思へば次ぎのページでは尺貫法を持出すなど、吾れながら此の書を讀み返して見て其のごた〳〵振りに呆れるのであるが、畢竟現代の世相が其れなので、お上の爲さる鐵道の驛名すら左書きか右書きかに迷ひ抜いて居る有様なれば、吾等田舎者が洋服に下駄はくなどは朝飯前である。されば此の書記載様式のごたごたはさすが通俗の俚諺を扱ったものだけに、現代世相をそっくりだと思召せ。

兎に角、本書によつて日本アルプス山麓「安曇」の里の昔話、其の俚諺及び踊り方、附けたり其處の風土や、また住民の素朴な生活等をも紹介する事が出來れば著者の念願は足りる。

（増訂再版の序に代へて此の物語を讀者に捧ぐ）

増訂再版 信州安曇踊

郷土「安曇」及び俚諺「安曇節」の事

郷土「安曇」

俚諺「安曇節」及び其の踊り「安曇踊」を知らんとする人々に對しては先づ郷土「安曇」の事から語らねばならぬ。「安曇」は古くは「阿都三」又は「阿曇」で和銅以後「安曇」と記され、縣居の大人も「あづみは海てふ事ぞ＝わたつみの約あづみ＝今大町の奥に海なほ殘れり＝此の地草創の水を治めたる神のいさほし仰ぐべきなり」と說かれて居る。元來あづみの語原に關しては異說約十種を數へ得る次第であるが、結局勦かぬ所とされるのが此のわたつみ說である。其處であづみがわたつみの約であると云ふだけの理由で、直ちに郷土安曇が大昔海乃至湖水であつたとする右の斷定は聊か早や過ぎるの觀有りとは云へ、少くとも此の郷土を拓き隨つて其處に「安曇」と云ふ地名を生ぜしめた安曇族、其れが所謂海

洋民族であつたと云ふ事は先づ注目に値ひする。

祖神穗高見命

今安曇の祖神として上つ代より穗高岳の麓上高地に齋きまつる穗高見命の御系譜を按ずるに、古事記に、伊邪那岐大神が日向の橘の小戸の阿波岐原に禊ぎ祓ひ給へる時生れませる三柱の綿津見神は安曇連たちが祖神と以ち齋く神で、即ち安曇連たちは綿津見神の御子なる宇津志日金拆命の後裔なりとあり、又姓氏錄に、安曇宿彌は海神綿積豊國彦神の御子なる穗高見命の後なりとある。此の宇津志日金拆命と穗高見命とは固より同一神に在しますと解せられ、何れより申すも海神綿積命の御子である。さて皇祖神武天皇の御父鵜萱葺不合尊の御母即ち鵜萱葺不合尊の御妃なる玉依毘賣命とは御姉妹であつて同じく海神綿津見神の御子である。隨て穗高見命、豊玉毘賣命、玉依毘賣命御三柱は御同胞に在します。固よりいそのかみ古き昔の神々の御系譜を按ずる次第なれば、御同族の神々を只一つの御名に稱へて居る場合もあるべく、之を甲の場合とする。又乙の場合としては同一の御名を以て數世相襲ぎ、乃至只一つの御名のみ傳はり其の間數世の御名を漏らして居る様な場合も有り得べく想像される。甲の場合の例としては、既に綿津見神と申すも只此の一つの御名で底津、中津、上津の三柱、又大綿津見神をも現しまつり、又彼の大國主命の御同胞は

實に八十神と只一つの御名に現せるが如し。次ぎに乙の場合の例は、古事記には大國主命を須佐之男命六世の御孫と數へ其の間歷世の御名を現して居るのに、日本書紀には最と簡單に直ぐの御子と現しまつる。又皇祖以後御十數代の御在世乃至御治世の年數の長き事に就いても、御名の數を標準として年數を約六百年乃至一千年短縮すべく考ふる人有ると同時に、反對に年數を標準として御名及び史實等の脫漏有るべきこと原始口碑時代として無理ならずと說く人も無きにあらず。のみならず近頃三輪義熙氏は其の所謂富士古文書の研究の結果、日向の國に於けりし地神鵜萱葺不合の世は其の實五十一代二千七百有餘年に亘りしものなるを只御一代の御名の如く誤り傳へたるが爲め、恐れ多くも其の間五十代の天つ日嗣の御事績を脫漏し奉つて居る。是れ即ち今日の所謂神代史であると道破せられ、隨つて其の五十代の神名、寶壽、御陵をまで悉く列擧されて居るのである。果して氏が考證する所の如しとすれば之れぞ實に右乙の場合の最も著しき一例と云はねばなるまい。斯くの如く神々の御名は或ひは横に廣く或ひは縱に長く解せられ得るのであるが、要するに其は御血統の範圍を逃るに止まり其の間自ら過らざる法則有り、隨つて此等の事を念頭に置く限り神々の御系譜を文字通りに解釋して其の爲め不合理に陷るが如き事は更に之れ無き道理である。仍つて吾等は前述の御系譜

に據り、祖神穗高見命が綿津見神の御子なる事に於て豊玉毘賣命、玉依毘賣命と御同胞に在しまし隨て皇祖に對しまつりても亦皇祖の御父鵜萱葺不合尊に對し奉りても共に御母方の小父に渡らせ給ふ事を知る。實に長き極みである。

海原

右の如く豊玉毘賣命、玉依毘賣命、穗高見命御同胞御三柱は共に綿津見神の御子、伊邪那岐大神の御孫に在しまし、固より吾等日本民族の祖先に列し給ふのであるが、只此の國即ち豊葦原の瑞穗國で生れませる神々で無い事には注意せねばならぬ。即ち玉依毘賣命の御子稻氷命（皇祖の御兄）も御妣の國を戀ひて海原に入りませりとあるが如く、此の三柱は海原即ち今日の所謂內地以外に在つた海上王國で生れましたる次第で、取りも直さず此の三柱の御父綿津見神は天照大神や須佐之男命とも御同胞に在し乍ら、當時既に御神名の語るが如く「わたつみ（海之靈）」として遙かなる海の彼方、荒潮の潮の八百路の八潮路の潮の八百間なる其の國々を開拓統治なされて居たのである。祖神の御系譜に據り安曇族が海洋民族であつたと申すは此の所以である。

肇國宏遠

當時日本民族の祖神たちが活動せられたる境域を考ふるに、那岐那美二尊が所謂高天原より天降りまして開き給へる大八島國は云はずもがな、更に其の御子

たちのうちにて天照大神は其の高天原を、須佐之男命は御父伊邪那岐命に乞ひまつりたるが如く御妣の國として慕ひ給へる根堅洲國を、綿津見神は大海原を其れ〳〵統治開拓し給ひ、其の外に國々なほ多かるが中に常世國と申す大國なども吾等が祖神たちの活動せられたる範圍內に在つた事が解かる。即ち彼の高天原で天照大神が岩戸に籠らせ給ひし頃から此の瑞穗國へ天孫の降臨に至るまで、常に最高政治顧問の如く在したる高御產靈神の御子思兼神や、出雲國へ渡り來まして大國主命の國造りに參與し給ひたる少名彥那神や、又皇祖の御兄御毛沼命やの神々の迹を訪めまつるも之を知り得るのである。降つて垂仁天皇の御宇非時香果を採りに多治間守を遣はされた常世國も神代の其れと無論同國であらう。されば天岩戸の常世の長鳴鳥や此の非時香果など、其の國から高天原や此の瑞穗國へ輸入された動植物の類も少なくなかつた事と推測される。以上は何れも所謂神代より此の方日本民族の活躍に委せられたる國々であるが、今試みに人皇の世とならんとする一時代にのみ就いて之を觀るも、皇祖が第一の御兄五瀨命と御二柱して東遷の師を興し給ひたると前後して、第二の御兄稻氷命は海原へ、第三の御兄御毛沼命は常世國へ、御同胞御四柱が三つの方面へ遠征なされて居るでは無いか。斯くの如く神代より人皇の世に及ぶまで、大八島の域內を各地夫〴〵（と）鄕土安曇も此の頃より創まりし事

は追々と說く）開拓せられたる事は申すまでも無く、此等海外に開かせ給へる國々とも常に相往來提携せられつゝ、當時知り得たる限りの大陸島嶼の全世界を舞臺とし、此の所謂漂へる國々を修り理め固め成して一つの安住樂土に築き上ぐべく即ち國生み（國造り、國引き）の大業にいそしみ給へる吾が祖神たちの雄圖は、四海比隣の今日より仰ぎまつりてさへ眞に肇國宏遠樹德深厚と申上ぐるの外は無い。只吾等史を讀む者をして常に遺憾に堪へざらしむるは、高天原、海原、根堅洲國、常世國、其の他國々が今何れの地方に當るか、又其の國々に活動し給ひたる祖神たちの御事蹟及び其の國々其の後の成行き等邈として知るに由無く、只僅に琉球と內地とが人種言語共に全く同根であるとか、對岸大陸の各人種やアイヌや生蕃等と吾等とが相當複雜なる關係を有つて居るとか云ふ樣な事を考へ得るに止まるのであるが、飜つて思へば吾等は幸にして右の如く傳說に聞くのみなる國々の中にも、史傳が特に明かで且つ美はしく其の一貫したる獨立文化を以て無限の將來を期待されて居る此の瑞穗國に生れ合ひ、人間生活の過去を溯ね未來を慮りつゝ、東亞細亞をはじめ今なほ浮脂のごと漂へる天が下の全人類に光と幸とを將來し給ふ國生みの大御業の隨に〳〵民族固有の大使命を果し得ること眞に人として此の上の悅びは無いのである。

海洋民族の首領

さて綿津見神の御子として海原に生れ給ひ、今日の史家が所謂海洋民族の首領に在します宇津志日金拆命即ち穗高見命が、其の御同胞、豐玉毘賣命、玉依毘賣命御二柱とも海を渡りて日向國に入り天つ日嗣の彦火々出見命また鵜萱葺不合尊に婚ひせる時代に於て、更に遠く此の信濃國に入り給ひ後世に所謂「安曇」を開き給へる鴻業の趣きは、彼の出雲より入り給へる建御名方命の諏訪御開拓と全く其の軌を一にしたるのみならず、其の時代もより更に古きものと解せらるべき理由有り、又其の東遷の動機及び經由距離等より觀ても規模特に雄大なるものであつたと云はねばならぬ。彼の建御名方命諏訪御入國の徑路等に觀ても古志より小谷に入り給ひしものが、安曇族を憚りたるが爲めに佐野坂を南には越え給はず、今の北城邊より東方鬼無里に入り北信に出でられたるべしと考證されて居るので、如何に安曇族が古くより此の鄕土に雄視したりしかを察すべきである。其の後、世々の神孫安曇連たちも亦永く祖業を墮さず、內は此の「うまし鄕土」を經營せられつゝ、外は山海の官として全國の海人部族を率ゐ人皇に事へまつりたる事、恰も彼の祭祀の官たる中臣連、齋部首、武官たる大伴連、物部連、久米直などの諸姓と同樣であつたのである。抑も海人部は應神天皇の五年に置かれたと申す事になつては居るが、是れ固より形式上實際の狀勢に順應せられたるま

でにて、此の部族の全國的繁殖は遠く神代からの事であつた。即ち前記建御名方命諏訪御經略に先ち既に安曇に雄視し、且つ命の其の後の御事業に御助力をさへ與へ申せる事、後にも說く如くであるが、更に溯りて八千矛神（大國主命）古志の國、沼川姬命を婚ひに行き給へる時の歌の文句に有る「いしたふや、あまはせつかひ」は、鈴の舍大人の定められたる所謂古訓には「急飛ふや天馳使ひ」とせられたれど、此は寧ろ「海人馳使ひ」とすべく、海人は山海の地理に明かなる部族なるが故に當時既に全國に繁殖し其の部族中に斯かる飛脚の如き職業までをも生じ居たるもので、後の「はゆまつかひ」（早馬使ひ）なども此の一部が從事したのであらうとの說が信ぜられる程である。されば斯くまで古く且つ繁榮した部族に首領たりし安曇連が代々偉大なる功績を建て得たるは當然の事で、景行天皇十二年熊襲の亂には安曇連百足火の國（肥の國）の土蜘蛛を捕へて行宮に獻じ、神功三韓を征し給ふや安曇連磯良（又は阿度目の磯良とも書く、皇后の御求めにより潮乾珠、潮滿珠を海神に乞ひ得て獻るとの傳說あり）舟師のしるべに仕へ奉り、今なほ筑前國志賀島（鹿島）の磯良崎に志賀明神として祀られ、又其の子孫は其處に糟屋郡及び安曇郡を開いたのである。應神の朝には安曇連大濱、詔のまに〳〵諸國の海人の不穩を鎭め（仁德の朝此の大濱鄕土安曇に穗高宮を造營し奉る）又其の女總子は賢名を以て宮

中に入り、其の後大陸との交涉漸く繁きを加ふるや或ひは水師を掌り或ひは異域に使命を全ふしたる比羅夫、頬垂等の活躍は史上著明の事實である。壬申の亂後改めて宿彌の姓を賜ひ、稱德の朝には內膳司として都に召し寄せられ、鄕土安曇との關係は茲に全く絕えたのであつたが、斯く神代より奈良朝に及ぶまで幾多の英雄輩出して國史を飾りつゝあるを觀ても、祖神御遺德の宏大なりし事は仰ぐに餘り有るものである。

安曇湖畔第二の故鄕

扨に提起される問題は、海神の御裔が何故に海洋などゝは凡そ緣も無さ相なる斯かる　深き地方へ有史以前から土着して國土を經營なされたかと云ふ事である。が之は吾等安曇人が先祖代々寐物語に聞かされて來た「安曇の里は昔は漫々たる大湖であつた」と云ふ傳說を參考して初めて解決されるのである。尤も湖水とは云へ沮洳地や森林が中洲や島の形を成して居た所もあつたであらうが、畢竟湖沼が相當に大なる面積を占めて居たものと想像すべく、其の爲めにこそ舟を行り漁獲を事とする海洋民族を俟つて初めて開拓され得べく運命づけられてあつたので、其れは丁度お隣の諏訪湖畔に於ける出雲族の殖民地と相呼應しつゝ水鄕文化の花を競つて居たものであらう。然るに山岳に圍まれた湖沼は、一方には風化水蝕に基く山岳よりの土砂を流入沖積して周圍より漸次遠淺となると共に、一方には排け口

が水蝕に因り益々擴大され茲に全水系に回春作用を起すが故に、湖水は漸く淺せ、注入各河川は嶮に其の勢を恢復して湖岸にも河邊にも幾多の段丘を殘しつゝ、嘗ては漫々として重疊を倒影したりしもの何時しか變じて茫々たる草原と化し去るべき運命に在る。隨つて吾が日本々州を横斷する地溝帶に出來たと云ふ所謂安曇斷屑縱谷に水を湛へ、其の湖畔こそ海洋民族の絶好棲殖地であつた前史時代の安曇湖も（川會神社等に因み川會湖とも呼ばれる）追ひ〳〵涸れて遂に現代の平野と成つてしまつたもので、之に續いては今なほ殘つて居る諏訪湖の如きも、同じ地變の迹を辿りつゝ年々に水淺せ、大昔湖畔に臨んで齋き祀られたる筈の諏訪上社が今は其の名も中洲村なる字神宮寺と申す湖畔を去る一里餘の地となつてしまつた樣な次第であらうと思ふ。

傳說携帶の移住

說を爲すもの曰く、安曇族は海洋民族なるが故に祖先以來の海洋傳說を携帶して此の地に來り知らず識らずの間に第二の故鄉たる安曇へ其の傳說を附會したるのみ、隨つて湖水乃至海洋など云ふは單に彼等が原住地の其れを意味するに止まるものであると。此の說一應は道理有り。彼の支那古傳說の如きも有巢氏、燧人氏等所謂年代國都考ふべからざる分は、彼等が原住地たる西域方面に居た當時の事を語つて居るので、所謂漠土に於けり し事にあらずと一般に解せられ居るのみならず、近頃物故された照山佐々木安五郎氏の如きは

更に進んで穆天子傳等の研究に據り、支那の殆と總べての帝系の遠祖と仰がれる黃帝軒轅氏の國土をさへ天山南路の塔里木盆地なりと斷じて居る。又顧みて我が古傳說高天原の所在等に就ても、民族的信仰と考へる所謂天上說を別とし、國內說、國外說相對立し、其の各說又考證紛々として歸する所を知らざる有樣である。此の故に安曇湖水の傳說も海洋民族移住時代の手土産に過ぎずてふ議論も一顧の價値無きにはあらず。されば吾等は神話や傳說や又は其等を再現したるに過ぎざる記錄をのみ辿る事の故に、自ら確實性の疑はれ易き狹義の史的考證を暫く措き、專ら鄉土安曇の古來の地形及び考古學的實證資料等に就いて研究せねばならぬ。

古墳纍々たり段丘の上

讀者、乞ふ安曇筑摩の地圖を机上に展べよ。先づ中央に沖積された平野があり、南鹽尻峠より北佐野坂に至る間、南北約十五里、東西二里乃至三里、南半は廣くして今は松本平と呼ばれ、北半は長くして今なほ安曇野の名を存する。其の彼所此所に沮洳として葭蒹繁る所の少なからざるは上代の沼澤の俤を殘すものと見るべく、ジク（じく〳〵水の湧く所の意）、葦原、葭原、矢地又は谷地原の地名が所々方々に在る。特にヤチは元來アイヌ語沼澤の意味で、鎌倉地方の扇ヶ谷、松葉ヶ谷の谷、程ヶ谷、熊ヶ谷の谷と同語で、谷の宛字は成功である。其の外に又松本市附近だけを見ても松本の舊名深志（深瀦）を初め、渚、小

島、島内、島立（島隔？）青島、犬飼島、和田など、湖沼に關係ある地名として見逃がすべからず。なほ此の平野の周緣は何れの所も段丘を成して臺地に移行し、其して彼の層々出土する所のアイヌ式、彌生式、韓式土器等、吾が國前史及び原史時代を物語るに十分なる諸遺物及び總ての古墳等は、四周の山々の峽を初めとし其等より走り出づる水流が作つた各扇狀地及び其の終りとして段丘を以て中央の平野に臨む各臺地の上にまで分布される。先づ南方にては所謂筑摩アルプスの山麓なる中山村字埴原の如き、地名其のものゝ暗示するが如く著しき土器片の散列地帶であり。同じく鍬形原の如きは一望壘々たる古墳の群落を見る。北して松本市の如きも嘗て深瀨と云はれたる湖畔の地で、其處より蟻ケ崎、城山に連る一帶は南面の臺地を成し絶好の前史時代居住地であつた。即ち城山はアイヌのチヤシで後世また辛犬甘氏の壘趾たり。前大町中學校長春日賢一先生も其の頂上附近に於て巨大なる打製石斧を發見せられて居る。其の又東斜面より蟻ケ崎臺地は精巧なる彌生式及び祝部土器を出土し、著者發見の土器片に就いて觀るも其の沈紋が瀟洒なるジクザク型より纖麗極まる曲水紋樣への推移が窺はれ、曲線より直線への通則を逆に行つてゐるのが面白い。續いて木澤正鱗寺附屬墓地の如きは實に一大古墳として見るべき地貌を有つて居り、更に降つて彼の天主閣を以て有名なる松本城趾即ち舊松本中學構

內に於て、同校在學中なりし著者が凹石、石斧等數點を採集し其の一部を同校標本室に納めたりしは既に三十餘年の昔となつた。松本より北に續く山間部即ち東筑、北安に跨り安曇野の東界を成す第三紀層の岡丘が抱く所の各村落の總ても亦先住民遺跡の連續であるのみならず、更に安曇平の西側なる山々の裾より裾へ眼を轉ずる時、吾等は其處に殆ど現代人の居住面積と廣袤敢て讓らざる大遺跡の果てし無く連亘するを見て驚嘆せざるを得ぬのである。先づ南は梓川大扇狀地より其の溪谷の奥に溯り上高地なる三十塚古墳群や（五千尺旅館の北なる氷河の端堆石と覩るべきものは別とす）梓川溪谷を出で山麓を傳ひて北すれば梓村及び小倉村に分布する無石槨古墳、殊に小倉村室山周圍の廣大なる厚手式遺物散列地乃至包含層、西穗高村離山チヤシ、及び其處より烏川と共に下り文字通りなる字塚原を經て東方穗高臺地に至る壘々たる古墳列、就中其の列の東端に占居し最近發見せられたる上原古墳の、形式、副葬品や特に其の位地が穗高神社神苑立內に入れる事等は幾多の問題を提起する所以であるが、兎に角此等烏川古墳列は安曇族文化の進展と重大なる關係有る事を豫想せしめる。續いて其の北方有明村天魔澤より宮城（此の地名は宮料即ち宮の御料の地を意味するか又は御屋代＝御社即ち齋場乃至御榊立などの意か、諸說何れゝ穗高神社に關係ありと解するものゝ如きも確かならず）地方に連る是れ亦雄

大なる古墳の群列等、以上は山間又は山麓に於ける遺跡のうち最も著明のものであり、次ぎに北安に於ける常盤村佛崎、大崎、親澤の各臺地、其の南松川村馬羅尾溪谷及び其れを圓心として弧を畫く高原即ち川西、神戸、鼠穴の諸臺地、續いて再び南安に入り、穗高川、萬水川に臨む穗高臺地等の如きは何れも其の湖畔に於けりし遺跡として數へらるべき重もなるものである。就中梓川扇狀地に續く梓村、小倉村の各古墳が規模比較的小にして概ね無石槨なる事と、西穗高村より烏川沿岸及び有明村の古墳列が其の方向恰も磁針の鐵に向ふが如く東方穗高臺地を指し且つ其の方向へ下ると共に其の規模を大にし形式を複雜にして居る事等は大いに考ふべき所、蓋し甲に散在する無石槨古墳は乙の大古墳列に先ちて存したりしもの、又乙の後は穗高地方一帶の文化を產んで現代に到り、反對に甲の先きは更に彼の上高地三十塚にまで溯り得るものと觀察される。然るに玆に一群の人々有り、三十塚を單なる氷河の堤防狀堆土の殘片との み聞きかぢり其の一二を掘り散らしたる結果、石槨石棺等の直ちに見當らざりし一事を以て古墳又は封土の類にあらずと斷定せるなど寧ろあさはかなる考へではあるまいか。凡そ石槨其の他の內部構造は進步したる後世の古墳に見らるゝものであつて、太古の其れは總て木槨木棺乃至無棺槨、のみならず又土質其の他の事情により ては往々地上構造は單なる封土に止め、專ら

地下に橫穴式乃至竪穴式玄室を設けたる例さへも少なからざること論を俟たず。殊に況んや三十塚は個々が完全なる古墳の形狀を具ふる事、其の配列が或ひは二列或ひは三列等一定せず列と云はんより寧ろ集團と云ふべきものなる事、若し强ひて之を列と觀るも其の切れ間は各列必ず喰ひ違ひ居りて貫通せず、是れ元來列の切れ間にあらず圓墳相互の間隔たる證と見るべき等、要するに單なる堤防狀堆土列の理學的斷裂などにより生じたるものにあらざる事明白にして、斯くの如きは各地に見る密集古墳群と全く同一轍のものである。尤も其のうち一二個に於て頂上の稍や東西に長き感有るもの無きにあらざるも、其は南側と北側と積雪融解狀態を異にしたるが爲めに生じたる比較的大なる圓墳頂上の二次的變形に過ぎずと思はる。少くとも全鄉土の遺跡分布狀態を通觀する時、所謂三十塚を直ちに單なる氷河堆積物とのみ斷じ去る事は吾等の肯肯し能はざる所である。

青草靡々たり湖沼の趾

閑話休題、山間や山麓の臺地に斯くも夥しき先住遺跡を發見するに反して、脚一度び中央の平野に下れば、其處は現在村落人家最も稠密なるに係らず地表にも地下にも遺物の類を見る事が出來ない。其處に見得るものは十間十五間の奈落の底まで も只砂礫と丸石とのみ。是れ各地の耕地整理や山葵畑開設乃至井戸掘り等にて知られたる事實

である。斯く觀察し來る時此等の臺地や段丘に圍まれたる平野が嘗て漫々たる湖水を湛へ居たりし事、及び山々の裾から其の湖畔にかけたる高原に先づ人文の花の咲き初めたり…跡等、一々指呼の間に在りと云はざるべからず。斯かる事實は安曇の分水嶺たる佐野坂の南、所謂安曇野、松本平のみならず、佐野坂の北も亦同樣で、其處にも一面の湖水が湛へられてあつたと云ふ事は一層興味がある。彼の東佐野古墳群や堀の內遺跡地の如きは實に其の湖畔を飾つて居た先住民文化の形見なのである。只佐野坂の南なる湖水は高瀨川、穗高川（乳川、中房川、烏川が穗高臺地の北にて順次合流して穗高川となる）梓川、奈良井川悉皆合流して犀川となつて東方に去り、後に青木、中綱、木崎の所謂仁科三湖を殘したが、北なるは姬川となつて古志に出で後に何物も殘さなかつた其れだけの差である。のみならずなほ幾多の小湖沼は東部の山間なる美麻、八坂の如き地方にさへも其處彼處に散在したりし事研究者の等しく認むる所、即ち美麻村に於ける靑具（前記靑木と姉妹語で湖色等に基く地名か）二重、大鹽（大潮）は當時相聯繫したる湖沼として、今日の仁科三湖の聯繫線と並行したるべく、更に此等と並行の聯繫線を西に求めて鹿島、源汲の溪谷を得る。斯く聯繫湖沼乃至湖沼跡の並行して存在するは學的興味をそゝる地貌と云はねばならぬ。此の外八坂の三原峯、相川、廣津の足沼、鄕志久保等看過す

べからざる地名で、中にも今の足沼が、昔は恐らく葦沼（！）を眼下に臨んだらしい山の頂上の地名となつて居るなどは感慨無量であり、なほ此等湖沼關係の地名の間を縫つて鹽の貝（潮の峽即ち湖沼と湖沼との間を通過する地峽）なる地名が美麻にも八坂にも廣津にもある。凡そ湖沼には緣も無さ相なる此等山間都に於いてさへ斯くの如しとすれば、彼の佐野坂以南即ち北安南部より南安、東筑の大部分を含み鹽尻峠の北に及ぶ所謂安曇野、松本平に湖水を湛へて居た事の如きは今や疑ふの餘地無きものとして、さて其の年代は抑も何時頃であつたかと云ふ事に就いては、既に其の周圍に整然たる湖岸線を畫きつゝ發見されて居る遺跡、遺物、就中其の民族性と時代とを的確に物語りつゝある古墳の形式、副葬品、其の他出土々器の燒き方や紋樣等に鑑み、疑ひも無く原始日本民族の黎明期に係つて居た事が知られるのであるから、海洋民族たる安曇族が絕好の發展地を此の湖畔に見出し、漸次其の水を治めつゝ國土を經營したのであると云ふ吾等祖先以來の傳說は茲に裏書されたものであらう。若し夫れ安曇族が初めて安曇に入りたる徑路に就いては固より知るべくも無し。只上代安曇が飛彈と重大なる關係有りたる事は後段にも之を說く。なほ綿積族が今日の所謂內地へ最初の足跡を印せる地點の一としては現今の筑前國糟屋郡即ち博多灣に臨み前述せる安曇磯良の傳說有る志賀島に對した地方等

を想像する人士有り。惟ふに北九州一帯は後漢書東夷傳に所謂倭奴國乃至魏志倭人傳に載する女王卑彌呼の耶馬臺國の地らしく、隨て獨り安曇族のみならず、日本民族其のもの、原始文化を考察する場合、色々のヒントを提供して居るものである。終りに安曇族が全國的繁殖の跡を忍ぶ資料としては地名安曇のみにても信州の其れに止まらず、就中江州琵琶湖の西岸なる安曇の里、安曇川等昔の吾等が郷土と同じく現に大湖の畔りである事も須く參考とすべきである。

北信濃に於ける安曇族

斯くして安曇湖畔に輝き初めた吾等祖先の文化は、湖畔のうち先づ廣袤の最も大なる其の西岸即ち日本アルプスの谷間々々から走り出づる沖積扇の連續に成る高原一帶に展開されたりし事は順次之を說かんとする色々の理由を以て推定され得るので、其處より北に向つては佐野坂を越え小谷を過ぎ姫川と共に古志の國に出で、日本海に浮び、南は今も其の名に殘る鹽尻（安曇湖の尻の意）の峠を以て諏訪族文化と相交涉したりしものと考へられ、隨て安曇と、古志、諏訪二族の間には複雜な關係が結ばれたらしく、たとへば諏訪神建御名方命の御母は古志の沼川姫命であり、又御妃八坂刀賣命は綿津見神の御女即ち日金拆命の御同胞と傳へられる事の如し（八坂刀賣命を綿津見神の御女とすること川會神社々傳なり。別に伊勢の國つ神八坂彦命の御女なりとの傳もある）。なほ當時安曇族繁殖の境域を考ふる

に、其れが西の方飛彈に聯絡したりし事は後に考證すべく、更に東に向つては、安曇湖の排け口たる犀川を辿つて當時同じ水鄉であつたと推測され得る川中島にまで進出し、其處を又一の新策源地として更級、埴科、水內（水鄉の意！）等一帶即ち後世に所謂善光寺平より、延いて小縣、佐久に及びたるものと察せらる。今之を各地に奉齋する神々に就いて觀るも、安曇の域內なる穗高神社、川會神社（景行天皇十二年安曇連百足の創建、延喜式內社、綿津見命と八坂刀賣命とを祀る。一說に穗高神社は穗高見命が底津、中津、上津の綿津見三座を祀り給ひし所、此の川會神社こそ安曇連が穗高見命を祀れるなりとあり。因みに中世より此の社の所在漸く明かならず、近く元祿十年幕命により正保二年以來の國繪圖改訂に就き安曇郡村々役人への御達しなるものにも「川會神社と申す宮安曇郡の內に有之哉吟味可有之事」など見えて居る。今は北安曇郡會染村字十日市場小字宮西に同名の村社を祀る。記して參考とす）及び住吉神社（履中天皇未だ東宮に在せし時安曇連濱子、淡路の海人を率ゐて墨江仲王の御謀叛に味方し奉り、事敗れたるも死を免ぜられしを以て、本貫安曇に退き農に歸して住吉の里を起す。此の住吉神社は其の後安曇連、海人犬養等が墨江大神即ち三柱の綿津見命と同時に生れ給ふた三柱の筒之男命を祀り奉る所なりと）等の祭神に就いては固よりの事、遠く川中島なる稻里村字下氷鉋な

る郷社氷鉋斗賣神社祭神は宇津志日金拆命と八坂斗賣命であり、氷鉋の里と斗賣の里（今の御厨村字戸部）とは今なほ相隣して存する。其の八坂斗賣命は諏訪神の御妃であるが元來海神の御女に在すのであるから、此の社は吾等の祖神日金拆命と八坂刀賣命と御同胞の安曇の神を祀つて居るのである。又長野市外妻科（古くはツマナシ）なる郷社妻科神社祭神も八坂刀賣命であり、同市城山に今は鎭り座す建御名方命の彦神社に對する此れは姫神社として併せて水内神と仰ぎまつる事、彼の上社下社を併せて諏訪神と仰ぎまつるが如し。更に埴科郡にては松代町の東なる東條村に郷社玉依毘賣神社がある。此の祭神は前にも申す如く皇祖の御母にして海神の御女即ち安曇祖神の御同胞に在します。又彼の目無堅間の小舟＝竹を編んで造つたと云ふので、古史に所謂うまの國（琉球？）乃至たかさご島（臺灣）に昔乍らなる彼の竹筏を想起せざるを得ず。今なほ臺灣で竹筏の土語はカタマランである＝其のカタマの小舟を造つて山幸彦を當時海濱の首都たりし綿津見の鱗の宮へ御迎り申したと云はれる鹽椎神を祀るのが、小縣郡西鹽田村前山の鹽野神社で、此の社だけは社格は村社でこそあれ歷たる式內社である。此の又小縣郡には安曇氏の一つの部曲が住んだと覩るべき海部と云ふ地名も昔は有つた。今の丸子以北、依田川の千曲川へ合流するあたり一帶で、是れ亦水郷に關係有る地名として海野、飯沼、長瀨

鹽川など今も見えるのである。以上により綿積族即ち安曇族の勢力は、原史時代に於いては信州最大の平原たる善光寺平の隅々にまで及んで居た事が想像されるのみならず、其の隣郡佐久も亦安曇の祖神に偶然ならざる御緣故の存する地方と思はれると云ふ所以は、御神名日金拆の上半に當る氷鉋の郷名有ると相對し、其の下半に當る郷名が此の佐久であると見られて居るからである。更に眼を轉じて隣國なる上野國利根郡に入れば、諏訪神を祀る社有る事肯き得るとするも、穗高神を祀りたる社亦少なからずと聞く。是れ安曇族の勢力が北信よりなほ上州にまで延長され居たる證と見ねばならぬ事勿論である。斯くして北信の安曇族は南信の諏訪族と相對し原史時代の信濃に於ける他に比類無き二大舊族であつたのである。然るに彼の出雲の大國主命は申すまでも無く、古志の沼川姫命や諏訪の建御名方命の御事どもは相關聯して諸史にも傳へられ相當明かなるに反し、安曇を開き給へる神々に就ては穗高見命、八坂刀賣命を初め奉り傳へられたる所甚だ少なく、却つて神佛混淆時代の迷信を物語るに十分なる犀龍、白龍、泉小太郎など云ふ譯の解らぬ名前の英雄（？）に關する治水傳說を殘せるに過ぎざるは、恐らく此等神々の代が古きが上にも古きに因るべく、又一面には崇神朝に置かれたる屯倉、建五百建命御子孫の代となりたる後など、安曇氏は勢ひ時の權力者に壓倒されたるに加へて、仁德、履中

及び弘文、天武の際屢々向背を過り其の後頓に衰へたるが爲め、數々の口碑傳說をさへ失ひ果たしたにも因るであらう。例へば現存國史の最古のものとして推され來りし古事記や日本書紀の(記紀等編纂上の疑問、後に出た齋部廣成が古語拾遺などとの價値比較等は此處には論ぜず)資料蒐集が、安曇連等が最後まで忠誠を捧げまつりたる弘文天皇の朝にせられずして、取つて代り給へる天武天皇の朝に專ら行はれたりし事などを考へても、安曇氏關係の史傳など史官等の爲めに好意を以て取り扱はれたりしとも思はれず、其の後の事知るべきのみ。

宗廟の地「上高地」

さて遠く前史及び原史時代に亘り全國的に繁榮を見たる海人部族の統制勢力として、北信濃一帶に蟠踞したる安曇族が、鄕土開闢以來其の祖神穗高見命を齋き祀り來れる聖域こそは、今日國立公園の中樞地區とされて居る上高地であつて、其處は安曇最大の河川たる梓川の入りに當り、乘鞍、燒、穗高、槍、常念等一萬尺內外の峻嶺を環らしつゝ南面したる一大仙境たる事、今も昔も變りは無い。しかも其處に聳ゆる連峯の峽間、野麥峠や阿房峠、中尾峠等を辿つて更に西に進めば、豁然として飛彈の別天地が開け、所謂守るに易く攻むるに難き要衝の地たるのみならず、東西南北進退何れも格構なる安曇野と、特に綿津見族に取つては其の生業交通戰備等に總べて注文通りなる安曇湖とを控へ、當時に於ては眞に理

想的な占據地であつたであらう。神代より此處に祖神を齋き祀り、其の神域を神垣內と稱へ(今土地の人はカミグチと約め云ふ)御幣岳(又明神岳)宮の川、宮川池(又明神池)少し下りて田代池(田料池)などあり、誠に草創の世、穗高見命降臨の奮蹟と傳へられる所以である。鼓に申し置くべきは、既に御神名の解釋にも述べたる通り、吾等は穗高見命をあながち御一代の御名とのみ仰くわけでは無い。換言すれば綿津見の御裔として此の鄕土を拓き給ひたる歷代の神々を並べて此の御名によりて仰ぎまつるのであるから、其の先は神にして崇敬信仰の境域に住し給ひ、其の後は人にして安曇連たちを生み給ふのである。なほ又穗高見命其の昔上高地に降臨し給ひたりと申す事も、上高地が原始安曇に於ける農耕漁獵等物資供給の主要地であつたと云ふやうな單なる形而下的な意味で無く、其う云ふ事は寧ろ安曇野や飛彈に對つて期待さるべきである。卽ち上高地としては、凡そ此の天險形勝の地點に穗高見代々の首都を定め、隨つて其の最も神聖とする所の宗廟を其處に鎭めまつりたる事と解すべく、斯くして內は氏族間の思想的大中心を確立し、外は萬一の敵襲に對し絕對死守すべきの聖域として、鄕土開發の頭初より驚異的熱誠を以て經營せられたるものと信ぜらる。されば田代池附近の如き泥原帶に於て完全の農作が望み得べからざるは勿論なるも、稻が瑞穗とまで云はれず、單に水穗として

水邊に頻搖きせられ、其の實を噛んで養分を吸ひ殻を吐き捨てられたる程度の原始時代に於ては、所謂齋田として神に捧ぐべき數莖の稻穗を生ずるには敢て事を缺かなかつたであらう。是れ田料の池の名有る所以、加ふるに雄大莊嚴天下に比無き山河の固めを以てし、宗廟鎭座絶對死守の首都としては之に勝れる所有りしとは思はれぬのである。但し又玆に首都と云ひ宗廟と申す事も、決して後世の如く輪奐の美を誇る都城や今の穗高町なる御里宮の如き莊麗なる宮居の有つた事を意味するのでは無い。上代に於ては人皇以後の皇居さへも頗る簡素にして隨つて代々に改め營み給へるに見ても、又社が屋代で單に地を淨めて齋場とするに過ぎざるの意を示して居るに見ても、此等の事は了解されるであらう。(尤も今日としては上高地の穗高奥社は安曇族の宗廟たるのみならず又國立公園鎭護の地主の神とも崇め奉らねばならぬのであるから、倘ほ如何にかして崇嚴を加へ奉るべきであると思ふ。差向き園らすに瑞籬玉垣を以てし、且つ其の廣前を勝手に通り抜け得るやうな現在の小道を他に轉ぜしめ、又參道入口の華表も今少し立派なものを奉獻するやうにもしたならば、吾等は固よりであるが、陸續此處へやつて來る純情なる彼等異邦人より觀ても、峨々たる前穗高の麓、千古の靜寂を湛ふる明神池を背景として立ち給ふ日本固有の神社景觀に接したる時、如何に滿足を以てほゝ笑むであらうかと思はれる。要するに今後は公園など設置の場合も、須らく一鄕土の開闢に準じ、其の中心に神社を奉齋して其の威德を仰ぐべきである)。何れにせよ未開の世に於て專ら防備に重きを置き、好んで山谷の間に據れる事は、現代の文化が產業を主として常に肥沃の曠野に展開すると全く其の趣を異にするのであつて、其の內にも吾が古俗は祖宗を祀る事即ち此の社會を平安幸福ならしむる所以、所謂祭政一致であつた(今なほ然りと觀るべきであるが)其の爲め宗廟等は殊に最も險要の地を撰んで奉齋するを常としたのである。隨て彼のジエルサレムを異教徒に蹂躙せられ、幾回か十字軍を起して同胞の骨を空しく異域の野に曝したと云ふやうな悲慘事は、吾が國史には絶無である事など、是れ亦吾等が感謝すべき國恩の一と云はねばなるまい。

上高地の原始時代

かみかうちの諏原及び其の開け初めたる年代に就いては相當複雜な詮索を必要とする。先づ昔の豪族等の居住に近く垣內、くねの內、垣外、堀、堀の內、館の內、內堀などの地名有る如く、其處は神の在します聖域なるが故に古來之を神垣內と申したのである。後には神耕地、神合地、上河地、上口などの宛字が行はれ今は專ら上高地と記される。近頃「コーチ」はアイヌ語足迹の義なれば穗高見命垂迹の事は同感なれど、地名の解釋としては此の報告には贊同しの報告も見えたが、穗高見命垂迹を意味するか」といふやうな某氏

棄ねる。凡そ安曇族として、外ならぬ吾が宗廟の地を呼ぶにアイヌ語を用ゐて來たものとするは大いに研究の餘地あり、又若し一歩を讓つて「神足迹（カムコータ）」の意とするも、斯かる際アイヌ語を連結名詞（國語と蒋語との連結）の下に据える事は國語の原則として容易に爲さゞる所、換言すれば斯かる際、下にアイヌ語を据えれば其の連結名詞は日本語で無くアイヌ語と化（な）つてしまふ（此等の事なは後に說く）。だから安曇族がアイヌ系で無い限りは斯かる連結名詞の成立ちやうは無いのである。若し又上、下ともにアイヌ語で Kamui-kochi（カムイコーチ）即ち神迹であるとすれば其れは全然アイヌの命名した純アイヌ風の地名となるから、或ひは穗高見以前にアイヌが其の民族の神（カムイ）に關した地名でも此の邊へ附してあつて、穗高見の世になつて其れを襲用したのだと云ふやうな素晴らしい考證でも成立つと云ふのでも有らうか。其れもまさかと思はれる。要するに安曇祖神關係の地名たる限りは、アイヌ語の命名など甘受した筈の有り得べくも無く、畢竟某氏の「足迹（コータ）」說は餘程愼重を缺くものでは無いかと思はれる。さて人或ひは史上に散見する所などによりて推測すらく、上高地の開かれたるは精々戰國時代を溯ること遠かるまじく、其れ以前は獵師などが時有つて入り込みたる程度に過ぎざるべし、斯かる深山幽谷に上古より安曇族宗廟の鎭座など信じ得べからずと。此等の人は彼の上高地河童橋の畔りなる五千尺旅館の主人公

丸山尙氏が二十餘年來苦心慘憺、登山乃至遊覽地としての上高地溪谷紹介に努力せられ居りし事を聞いて「上高地は其んな時分から存在したのか」と云つて驚いたと云ふ人など〻雜（ざ）つと兄弟分で誠に張合の無いこと此の上無しであるが、抑も吾等日本人の祖先は現代人の多數よりは遙かに剛健なる身心の持主で、深山幽谷や萬里の絕域をさして問題とはせず頗る進取的で、且つ雄大な氣魄を具へて居た事は、たとへば文祿慶長に秀吉が失敗し、明治になつてもなほ紛議百出、內亂騷ぎまでして容易に埒の明かなかつた朝鮮問題が、遙かの昔なる原史時代には只一回の皇后樣の御親征でてきはき解決されて居た事などを見ても思ひ半ばに過ぎる次第、或ひは一寸（ちよつ）した事で申しても大國主命が出雲から古志へ婚（よば）ひ（呼ばひである。呼ばひ女又は呼び女は嫁である。現代の夜這ひと云ふやうな字は語原を忘れたる爲めの宛字とは云へ餘りに野卑なり須く廢止すべし）に行かれたと云ふ位、出雲から古志へ諏訪へ、日向から常世國へ海原へ又大和へと申す樣な其れは實に有爲活潑な時代であつた。況して上高地は飛彈、古志、諏訪の要衝に當り、且つ到る所溫泉の湧出するあり、論より證據、此の山間山麓に幾多の古墳を殘した所を見れば、吾等の記錄や口碑の語り得べからざる古代に於て既に一度びは大いに開かれて居た事があつたと考へるの外は無く、後世佐々成政の針の木越えや飛彈松倉城主姉小路秀綱の阿房

峠越えなど、剛健其のものであつた上古の人々より見れば寧ろ兒戯に類したであらう。又彼の上古の安曇縦貫路線たる所謂千國古道が安曇野の西側なる山から山を辿つて居る事、及び之に伴れて海抜四千尺餘の常盤村親澤臺地や松川村馬羅尾溪谷、又は上高地續きの金山平などから土器石器の出土する事實など果して何を語るとすべきか。上高地の開闢を戰國時代へ引下げるなどは不詮索も甚だしい。抑も現代の交通幹線たる木曾路の鳥居峠が開鑿されたのは遙かの近世、後花園天皇永享三年と云ふ兄利時代で、其れ以前は官道はずつと西に偏つて居た事なども考へて貰ひたい。即ち文武天皇大寶元年十二月岐曾山道を開き、後十二年元明天皇和銅六年七月岐曾より安曇への通路を開鑿したと云ふ其の通路なるものは木曾藪原の西北鉢盛山の尾根續きにして當時安曇木曾の境であつた所謂境峠を越え、今の奈川村（此の地方は其の頃もなほ安曇に屬した。因みに木曾は當時美濃に屬し、平安朝の末から或ひは安曇に入り、或ひは木曾郡又は惠那郡など私稱し、元祿十年より十一年の正保國繪圖改訂の時より筑摩郡の内と定まる）即ち奈川流域を過ぎ梓川に出でゝ之を下り安曇の千國古道に接合したので、奈良朝文化は此の道によつて木曾安曇を經て遠く北海に出たものである。凡そ斯く木曾安曇縦貫路線が奈良朝に於て現代人の豫想を裏切り遙かなる西の山に偏して開かれたと云ふ事は、先づ豫め横に飛彈と安曇

との聯絡線があつて（曾て加賀侯が參勤交代道を上高地に取らんとした事は此の聯絡線の再興と目すべきである）其れに丁字形に接合すべく前述の知きが最適の道筋であつたのだと解せらるゝと共に、當時の安曇文化が其の昔安曇湖畔に據り來りし原史時代を繼承したるまゝ、なほ專ら西側の山より山に執着して居た事を意味するものである。其處で試みに右の古道を辿り奈川を北に下つて梓川の畔りに出で其處で、東すれば安曇に出づる事前述の通りなるが、反對に西すれば野麥峠を越えて飛彈に入るべく所謂飛彈街道であり、又東せず西せず其のまゝ北して梓川を溯れば其處が直ちに上高地では無いか。況して信飛兩國の交通は野麥峠越えの所謂飛彈街道は寧ろ新しく、古き時代は直接上高地の線上を東西したものと云ふ史家の說が肯かれるのである。だから此の上高地が單に現代の交通幹線と緣遠き深山幽谷の間に在ると云ふだけの理由を以て、上代文化史上重大なる役割を演じたりし事を否定されるべき筈は無い。其れを否定すると云ふことは少くとも奈良朝の官道が上高地の表參道とも云ふべき奈川流域を北上した明白な事實を否定すると同じく、重大なる認識不足である。況して諏訪族が古志より入りたるに對し安曇族は飛彈より入りたるならんと云ふ說も有るなど大いに考へ合すべきである。又著者は昨秋上高地白澤渡より島々へ出づべく德本峠を越えたる時、其の古生層の山肌より剝落し來

つて峠路にがら〳〵堆積して居る粘板岩の碎屑片に着眼せしめられたのである。其れは極めて緻密堅質で板狀剝離を爲し其の色青黑く、特に其の板狀碎屑片のうち往々打製石斧として全く間に合ひ、殆ど人工を加ふるの必要無きもの少なからざるを發見して思はず驚嘆の聲を發したのであつた。行脚終るの後、携へ歸れる其の碎屑片と鄉土各地より出土の打製磨製各型の石斧とを比較して、後者の殆ど全部が德本一帶の粘板岩と全く同質のものを原料として其のまゝ、或ひは多少の工作を加へたるに過ぎざるものである事を知るに至つた。即ち石鏃、石錐の原料たる黑燿石を諏訪の和田峠に得たるが如く、石斧の類の原料として品質最も優良なりし粘板岩の碎屑を德本一帶に仰いだ事があつたらうと考へられる。斯くの如きは上高地盆地より梓川溪谷一帶が石器時代乃至金石併用時代の安曇に於いて重大なる地位を占めて居た傍證と見ねばならず、安曇族が其の宗廟を鄉土開闢以來此の幽谷に祀りたりし事、隨て又其の地の開かれたる年代が極めて古き事等、何れの點から見ても首肯さるべきである。

御里宮と穗高豪地

なほ又穗高町に鎭り座す穗高見命御里宮に就いては、仁德天皇の御宇、安曇連大濱の創建し奉る所とされて居るが、此れも社殿等莊嚴に造營し奉れるの謂なるべく、少なくとも社（やしろ）屋代（やしろ）即ち御神立の地などは更に遙かの上代より在しませるものと推測せらるゝ幾多の理由が有る。況して信濃中將物草太郎の宮など云ふは何等か多少の史實に附會せる作爲に過ぎざるべく、畢竟彼の奥社に對する御里宮として遠い大昔から鄉土の崇敬淺からざりしものである。さてつら〳〵其の宮柱ふとしり立ち給ふ神域を考察するに、其處は上高地を出で來れる梓川扇狀地の終り、安曇平の眞中で、特に見落すべからざるは彼の穗高川、高瀨川、萬水川（よろづ）、梓川、奈良井川、以上鄉土全河川の合流點即ち安曇湖最終の渚溜地と見るべき沮洳地を眼下に臨んで居るの一事と云ふべく、吾等は其處に神代以來繼續して來た偶然ならざる理由の有る事を見出すのである。今其の類推の資料として、彼の仁科御厨の庤に在しまし創立年代が奈良朝以前に溯る北安曇村縣社宮本神明宮の前身が、上古には（御厨の庤と爲されたるより更に以前ならん）安曇平の遙か西側、今の東側と反對なる、常盤村鍬の峯の裏、字ゼンコヂ平高原に在り、其處は千國古道に當つて居た、後、親澤に沿つて下り、或る期間松川村大洞山の裏なる所謂神明澤に在しましたる事有りとの傳說、又南安曇村縣社住吉神社が、大同以前は烏川の奥岩原山なる住吉平に在しませりとの傳說などと共に、穗高御里宮が大昔は今の鎭座地よりもなほ西の方に在しまし、上高地の奥社とも恐らく現在以上緊密に其の地理的聯絡を保ち給へる事を想像せねばならぬ。只之に關する口碑等の徵すべきもの無きは畢竟年代の餘りに

古きが爲めと考へるの外は無い。要するに此等の神社は何れも昔在りしてふ安曇湖の減水と共に湖岸線の低下を追つて漸次東遷し給へるもの、斯く考へ來る時傳說一々其の證有り、治水卓創の祖神の御遺德愈々高くも讃仰し奉る次第である。若し夫れ縣社穗高神社御昇格の儀に就いては、數十年來氏子信徒を初め幾多の方面より異常の赤誠を以て願望せられ居るのであるが、原史時代以來神德斯くも廣大に在します安曇族宗廟の御事とて少くとも諏訪、生島足島、戸隱に相並び給ふべく念じ奉ること誰しも同樣、兎にも角にも祖神に事へ奉る道として、吾等は一日も速く御昇格實現を祈つて止まぬものである。

「ほたかみ」と「ひたかみ」

前述「かみかうち」の語原以上に穿鑿を必要とするのが祖神の御名としての「ほたかみ」の語原である。此れは元來「含高み」乃至「秀高み」である。ほは形の含みて豊かなる、又精神的には秀で鋭く、或ひは勝れ正しきを意味する接頭語で、又其れ自體同じ意味の體言とも成り得る。含所(懐)、密含所(女陰)、秀木(矛)、尖牙(山腹の嶮所を云ふ古語なり。地名となつて歩危の字を宛てゝゐる所もある)、正事(俗語ほんこと約してほんと、本當などの宛字あり、眞事即ち眞、誠など、同じ意味の語)、或ひは又倭建尊の御歌に「倭は國の眞含間(眞秀眞)」等のほ皆觀るべく、又體言にて頬、舟の帆、

國の富、稻の穗、槍の秀など何れも然り。次ぎにみは青み、赤み、甘み、辛み、高み、凹み、深みのみと同じき接尾語で、上の語に附いて色、味、形など何によらず其の意味を强調しつゝ之を名詞に固め成す。されば「ほたかみ」はなほ「含み秀でたる高き所」と申すが如く、之ぞ實に此の安曇、飛彈、古志の國境に連亙する大山岳地帶を讃美した原始國語の固有名であつたと云ふ事は著者出原が多年考證力說し來れる所である。さて又大祓などにも「大倭日高見國を安國と定めまつりて」云々、此れは吾が祖國を指して居るのであるが、別に倭建尊御東征の折も日高見國に過り給ひしとも傳へられ(現代の北上川流域かと云ふ、詳ならず)、斯かる地名が方々に見受けられる。所で此の日高見の日は奇靈の靈で太陽、火焰等皆靈異なるが故に日、火の名が有る。高御產靈、神御產靈、產靈子(產彦=息)、產靈女(產姫=娘)の靈皆同じ。所で此の靈と前述の含、秀とは意味相通ずるのみならず音も亦相通ずることは火照、火須勢理、火遠理の御神名にて火を火と訓み、火の穗を焰と呼び、又ほをひとする例には北安陸鄕村と東筑生坂村とに亘り古來日岐の鄕あり、是れ古語ほき(尖ザ=歩危)をひきとしたろものである。斯るが故に「ほたかみ」「ひたかみ」は元來同一の語である。其處で此の「ほたかみ」の略が今日に殘つたものが穗高であり、「ひたかみ」の其れが飛彈である。換言すれば飛彈地方も亦有史

以前には日高見國と云はれて居たに違ひ無い。斯くして穗高と飛彈とは他人で無く大昔から同一鄕土の延長であつたと云ふ事は容易に肯かれるであらう。此の又一帶の地名たる穗高見ひたかみを其のまゝ宇津志日金拆命のなほ一つの御神名として穗高見命と崇め奉りたる事は、倭の英雄小碓尊をば倭建尊と申し上げたると同樣、依つて以て宏大なる御神德を讃へ奉りたる所以なるべく、此の際ほたかみのみは又單なる接尾語たる以上に海靈、山靈の例の如く奇靈の靈と通ずる靈の意をも併せ寓し得べく考へられる。因みに穗高見（此の漢字は勿論宛字であるが字面穩當であるが爲め其のまゝ神名として古史にも載せられ慣用久しき次第である）、此の固有名は現代に於てもなほ色々の方面に殘つて居る。山岳に就いて見ても、前穗高、奥穗高、北穗高、西穗高等の岳の名に殘り、其の連山を總稱して今なほ穗高岳とは云ふ。是れ即ち上代には安曇族が其の西の空に仰ぐ限りの連山を呼ぶに總べてほたかみの岳を以てしたるもの、其れが世の進むと共に、各峯頭に其れ〳〵の特徵を發見しつゝ乘鞍とか槍とか、鍋冠り、有明、又は爺、代馬等追ひ〳〵に個々の名が生れて來たもので、其れ故にこそ今では只槍ケ岳より南、燒岳より北、即ち聖域「神垣內」を取り卷く一群の山々だけに穗高岳と云ふ總稱が殘つて居る所以である。又人の住むべき里としては此の固有名は飛彈の國名と穗高の鄕名とに殘る事前述の通り、しか

も穗高鄕は現代の最も狹き意味を以て云ふも、御里宮奉齋地なる穗高町を中心として東穗高、西穗高、南穗高、北穗高の各村に亘り何れも相當の大村で、安曇平の中央、且つ安曇湖最後の渚溜地沿岸一帶を占めて居る事は既に述べた。是れ又此の鄕土の開け始め、安曇湖がなほ廣大なりし頃、其の沿岸の高原全部がほたかみを以て總稱されたる名殘りなるべく考へられる。乃ち知る先づ穗高見の地名あり、祖神之を開き給ひて穗高見命の尊稱を得給ひ、續いて神孫安曇族の發展と共に鄕土穗高見が何時しか安曇と呼ばるゝに至つたのであらう。換言すれば神は地の名を得給ひ地は神の氏族名を以て呼ばれる事となつたのである。

國園の名稱

聞くならく「中部山岳」國立公園、是れ今回所謂日本アルプスの國立公園指定に就き新定されるであらう正式名稱であるとか。成る程別に弊害は無い、其して英語などに譯して宣傳しやうなど年が年中、彼の佛尊しの考へだからウダツが上がらぬ）文字であるが、譯して宣傳すべくすつかり間に合つてるやうな（元來固有名詞は譯すべきもので無い。是れ即ち我が國土の一部に命名された日本名であると爲ればナンセンスも甚し。當路の考へは此の新名稱を單に國立公園の呼び出し符牒たるに止むるか、又は當然の成行きとして山岳其のものゝ名稱をも「中部山岳」即ち「中部山」とか「中部ケ岳」とか呼ばしめ、隨て和歌などにま

で「足引きの中部山岳に湧く雲の」とか「信濃なる中部の峯の白雪を」とか詠み込ませ得べき確信を有つて居るや否は知る限りでは無いが、兎に角吾等は發表された此の名稱を一見したる時、たとへば此の日本帝國が東方の君子國とか東海の小島國とか形容された事こそあれ、未だ嘗て國名として「東方群島」帝國など〻呼ばれたる事は無く、又「安曇」郡が「邊鄙山麓」郡など〻改稱せしめられるの機會も無かりし事を類推して見ねばならなかつた。抑も「中部」とか「中部山岳」とか云ふやうな事は「富士」や「阿蘇」『十和田」など〻比較して明かなるが如く、一固有名詞としての態を成して居らず、其れは所在と地形との案内に過ぎぬものである。當路としてはまさか「名稱などは假りのものであるから差向き所在や地形が解かるやうにして置けば登山者が迷ひもすまじく、其のうち呼び習はして來れば其れが其の公園の名として直觀されるやうにもなると云ふやうな、不親切な熱の無い態度で此んな事になつたのではあるまいが、假りに所在や地形の說明としても中部山岳國立公園とある以上は、東部にも西部にも又は國の末端などにも何等か其れに比類した何々部山岳國立公園乃至は南部湖沼國立公園とか北部海岸國立公園と云ふやうなものも有るべき筈の如くにも感じられる。事實に於て其んな風の呼び出し符牒（旅館の客室符牒に曰く、お二階の六疊、三階の突當り）式の名稱で國立公園が次ぎ〳〵

と指定されて行くのかも知らぬが、其うなると愈々變なものでは無いか。おまけに中部とは本州中部か日本中部か又は幾多ある山岳を見渡しての中央部か或ひは外輪山の如きものに圍繞された中心部か、藪から棒に只「中部山岳」では徹底を缺いた片言（かたこと）である。要するに彼の「富士」とか「十和田」とか云ふと相並び乍ら、只獨りだけ滿足な固有名も與へられず、單に所在と地形との指道標を出してお茶を濁して居る形、又如何にも申譯け的の暫定名稱然たるもの、其處に何等の誇りも無ければ憧憬も認められず、誠に遺憾な事である。今吾等野人をして腹藏無く云はしむれば、斯る場合に中部だの山岳だのと漢字や漢語に囚れて考へ込んでしまふのが抑も間違ひの第一歩である。たとへば松本市では市會の決議を以て「中部山岳」に反對したは好いが、其の代案としては「日本秀岳」とかに致し度いと。愈々以て困つたものである。此んな調子で漢字の拔き差しをやつて行くならば際限が有るまい。其して又徹底的な名稱として和歌などにまでも詠込ませ得る見込みの立つのは何時の事やら、殊に秀岳なんて文字は變妙の極、抑も日本アルプスを改稱すると云ふ事は決して漢語で無ければならぬと云ふ事では有るまい。元來漢語なるものも外來品なのだから、此んな時に其等を用ゐて落着きの有る立派な名稱の出來やう筈は無く、此所は是非固有國語に據らねばならぬ所である。其れには此の地帶に關した代表

的地名を採るも宜し、新たに創造するとしても國語に立脚する限りは必ずや滿足が與へられるであらう。凡そ吾等日常の語は飽くまで固有國語に立脚し、漢字は國語を寫すの具として採用、止むを得ざる場合はじめて漢語でも洋語でも使用すると云ふ事に致したいので、山や川の名などは勿論國語に立脚すべき最も著明の部類に屬する。さて兎に角斯う云ふ落ち着きの無い、指導標見たよな新名稱と睨み合つて居るのでは何等の感興も期待され能はぬのであるから、更に或ひは臺灣の新高山（にひたかやま）の例の如く（之は實に立派な日本名であつた。之によつて、臺灣が日本國の一部となつた實感が初めて湧き出でたのであつた。其れに比較すると、神代此の方安曇の西境に連る山々が、今以て日本アルプスだの中部山岳だのと、西洋流か支那流以外に我が國土の一部らしい名が考へられ能はぬとは何たる悲慘な事であらう）結局は恐れ多くも特に高貴より御命名の光榮を賜るとか、又は其の他何かと好名稱の出現を待ちつゝ當分はなほ「日本アルプス」を別名としてでも用ゐて行くの外有るまい。名稱が幾つも有ると云ふ事は、大名持命（おほなもちのみこと）此の方其のものゝ誇りである。況して「日本アルプス」は宣傳上、また感じの上からも、一別名としては保存さるべき面白味が十分に有る。其れは一つには日本に於けるアルプスの如きものとして之を世界に紹介したるガウランド氏やウエストン氏に國際的謝意を表する所以ともな

り、又眞に世界的なる彼の歐洲のアルプスを聯想せしむる所にも大なる興味が認められるからである。隨つて吾が安曇節歌詞にも「日本アルプス」又は「アルプス山」など澤山に歌ひ込まれてもある。が然かし吾等は之を本名とする事を欲するものでは決して無い。何となれば「日本に於けるアルプスの如きもの」と云ふやうな言葉の內には「本場のアルプスには勿論匹敵し能はぬ」と云ふ語氣を含んで居る。よし匹敵し能はぬは事實であるにしても其れを改めて本名としてまでも表出せねばならぬ理由は毫頭無いのみならず、日本は日本獨自の立場から然るべき好名稱有るべき筈のもので、何もアルプスに負はねばならぬ義理などは無いからである。又前にもなほ後にも說くが如く「アルプス」なる蕃語を下に据えた「日本アルプス」は原則として日本語で無く外國語であると云ひ得る。否事實外國人が命名した、或ひは假りに形容した外國語に相違無いので、其れを吾等が頭の部分を聊か飜譯しかけたやうな事をして假りに用ゐて居るに過ぎぬので、此の事實を目して外國語が日本化したなど云ふのは大間違ひ、反對に日本語が外國語化しつゝあるものである。が今一步を讓つて、吾が國土の一部の名稱として外國語襲用を認めるとしても、其の「アルプス」が普通名詞であれば未だしも、恨むべし現に固有名詞（語原の如何に係らず）なのであるから、「日本アルプス」「日本ライン」など云ふのは恰も「和製ル

ーズベルト」や「和製ムツソリーニ」など云ふと同様、向ふに在るのを勿論本物とし此方のを模造品として居るのである。生絲やマッチ、自轉車、靴下の Made in Japan は名譽であらうがアルプスやムツソリーニの和製は全く何うかと思はれる。だから吾等は日本アルプス以外に正式の名稱を求めた當路の英斷は感謝に堪へず、が只新名稱が固有名詞として殆ど其の觀を成して居らぬ事に甚だ不滿を感ずるのである。差向き現實問題としても「中部山岳國立公園」では外國人のみならず吾等日本人同士でも彼の富士箱根の事と合點すること請合ひであるから「一名日本アルプス」とでも添書せねば埒が明くまいと云ふ心配が有る。要するに日本アルプスと云ふ別名も絶對使用罷り成らぬでも有るまじく、又「上高地」や「白馬岳」「黒部」「立山」等、局部的乍らも殆ど代表的な地名も備つて居る事なれば、新名稱の出來榮えが何うあらうと急に困るやうな事は無いのであるから、多少悠暢に考へて、其のうち更に好名稱を求めて貰ひたい。(次手に「國立公園」の略語が新聞紙上等にて近頃「國公」とせられて居る事を往々見受ける。國立の頭と公園の頭とを採つたのであらうが左りとは餘りに機械的で醜怪極まる。新る際には須く意味に顧みて「國園」とせられたいのである。此の類例は他にも頗る多く、略語を作る事なども國語發展上假染めの業で無いから注意して欲し)。終りに吾等としては此の山岳地

帶に人爲を以て新名稱を作り上げるなど云ふ困難を敢てするまでも無く、須く先史時代から出來て居た又と無き好名稱「穗高見」を復活致したく、是れ多年の主張である(因に、奥穗高岳は其の標高、アルプス中第一に位し、彼の槍よりも高きこと最近發見せられたり)。少くとも和歌などを初めとして專ら此の古代名稱を採用する事如何にや。識者の一考を煩はしたいものである。

歴史時代の安曇人

降つて歴史時代の安曇に就いて注目すべき點は、吾が鄉土人が其の傳統精神を以て終始一貫し敢て時の權勢等に迎合することを爲さず、承久の際また建武中興より南北朝にかけても、常に勤王の志士を輩出して居た一事である。承久に於ける仁科盛遠及び大妻兼澄、建武中興に於ける仁科氏重、南北朝に於ける仁科貞重及び其の子行重、義高等の子々孫々を擧げて皇國の大義に殉じたる、千歳の後なほ史を讀むものをして感奮興起せしむるに足る。但し其等詳細の史實に到つては歌詞解説に讓り茲には之を略す。

「いそのかみ世々の手ぶりを訪め行けば言の葉ぐさぞしなりなりける」

さて鄉土安曇の文化は其の淵源既に述べたるが如く古く且つ貴重なる特色を有つたもので、其れが直ちに現代にまで發展して來て居る。今日此の地域が人情惇朴、物産豐富、加ふるに山河の形勝を以て

内外觀光客の雜沓を見るに至れるに就いても、幾千年の昔初めて此の鄕土を開拓し給ひたる神々の遺業は、吾等子孫が念々顯彰し奉り且つ更に之を向上擴充して萬世に繼承せしめねばならぬものである。其處で吾等安曇人として如何なる方法にもせよ神代乍らの安曇を再現せしめねばならたならば、其は誠に愉快でもあり且つ現代の文化に對し色々の意味に於て偉大なる效果をも期待し得るであらう。が何分にも幾千年を經過せる今日、幽遠なる上代の姿を再現すると云ふ事は精々穗高祭の飾り物「天の岩戸」や「海幸山幸」「ギシキ八面大王」(後に說く)などより外には到底不可能の事の如くにも見える。只其處に古き手振りを推定し考證すべく辛うじて多少の資料が殘されてあること、傳統文化顯彰上、吾等をして多大の希望を繫がしむる所以である。資料の第一は言葉である。即ち如何に時代が變遷しても國語の構成法＝語格は變化すること無く永久に殘される。日本語がウラルアルタイ語系乃至アリアン語系の何れかであるとの諸說も未だ重きを置かれず、結局所屬不明即ち特殊のものと觀察し置くの外無く、姉妹語とすべきものも只一つの琉球語を除いては世界の何處にも見出され能はぬと云ふやうな現狀より見るも、如何に吾が國語が古き過去に於て既に一語格を成して獨立し居たりしかを語るもので、其の未來も亦過去の如く、其れ〳〵の單語は如何に新生され輸入され變化に變化を重ぬるとも、此の特殊の

語格に至つては永久變る事なく、恐らく皇國と共に天壤無窮の將來を有ち益々進展して行くものである。隨つて吾等が原始時代の瑞穗國へも乃至高天原へも今日只今、又は將來いつ何時でも溯り得る希望を架けた唯一の天の浮橋は此の國語の語格で無ければならぬのである。右等の事は全國的に云へるのであるが、吾が安曇の如き、古い文化を傳へた僻地に於ては別に神代以來の單語其のものも亦原始に近き形のまゝ保存されてあるものが少なく無い。先づ地名に就いて見てもアヅミ（ワダツミ）、ホタカ（ホタカミ又はヒタカミ）は云はずもがな、南にシホジリ（潮尻＝鹽尻）セバ（狹間＝狹區、後世洗馬と書き木曾義仲馬洗ひの傳說が生れた）フカシ（深瀨＝深志）ツカマ（塚間＝筑摩）の類、北にニゴノミ（和海＝丹生子）サノ（狹野＝佐野）ヲタリ（小谷）等鄕土の山川、原野、村落に附着せる原始的固有地名擧げて數ふべからず。其處には又先住民より引繼がれたるアイヌ語の地名も夥しく發見される。先づ南部より擧げると東筑奈良井川のナラヰはアイヌ語のナライ又はナイで川、溝、又は濠などのこと、即ちナは水、ライは下るである。又奈良井川の水源たる楢川村の隣村奈川の地名も奈良井川、楢川、奈川と段々に略された各段階に該當すると云へる。（朝鮮語ナイも亦川であるが蓋し偶合か）。次ぎに東筑鹽尻の峠續きなるウトウ、北安美麻村字大鹽のウトウ、今は越後國西頸城の分で姫川の一支

流大所川の上流にあるウトウ川、此等の地名は大低津輕外ヶ濱に産すると云ふ水鳥と同じく善知鳥の字などを宛てゝ居るが、元來ウトウは肋骨の如く彎曲したるを意味し、山の尾根續きや特に或る河口などに出來た長い曲りくねつた砂洲などに好んで命ぜれるアイヌ語の地名である。恐らく右に列擧した地名も、鹽尻や大鹽が既記の如く嘗て湖邊であつて、其處へ流れ込んだ川の排け口附近に出來た砂洲の形より命名せられ今日に傳へられたものであらう。次ぎに南安室山はアイヌ語と日本語の連結名詞でムロは穴居のアイヌ語、隨て竪穴に屋根を設けたアイヌ風の住居をムロヤ（室屋）と云つたことは古史にも見える。だから室山は穴居山の意味、宜なるかな其の山麓一帶はアイヌ式土器破片の大散布地である。別に此の室山をモリ山（森山の字を宛てた地名が各所に多い）と見るも一理有り、モリはアイヌ語小山の義であるから「小山」と云つてアイヌ語と日本語と全く同意味の語を連結して出來た名詞である。因みに「穴居山」の如き普通の連結名詞に對し此の「小山山」の如き、同じ意味の語の連結した名詞を特に同語連結名詞とでも命名すべきか。何れにしても蕃語と日本語と連結した名詞は、特別の例を除き上が蕃語で下が日本語である。是れ國語の原則として主語を下に据え形容語を上に冠することに因るので、上なる形容語は輕く取扱ふにより國語たると蕃語たるとを問はざれども、

下なる主語は重要なるものなるにより必ず日本語を用ゆるからである。換言すれば下の主語が日本語であれば、上に何んな蕃語があらうとも結成したものは日本語たり得るのである。反對にまた蕃語が下にある日本アルプスなどが結局日本的地名となる能はざる理由もわかるであらう。さて實際の所室山は「小山山」と云はるべく飛び離れた小山で、古生層の斷塊が堆積層に埋め殘されたものである。（朝鮮語ムルは水なれど此處には關係無かるべし）。續いて隣村なる田多井はサタイなるべく、サは野原、タイは其の複數を表すによりサタイは野原續きと云ふ意味、後世此處に田多利の牧が置かれたるは宜なるかなである。次手に此のタイで面白い方言は物事一向に取りとまらず無方針なる事などをタークラターであるとかタークラであるとか云ふ、此れはターカラ即ち夢にタイが附いてターカラタイ、夢また夢、一切夢中、出鱈目と云ふやうな意味のアイヌ語から來て居る。原始國語なる戯く、淫く、呆くなどは此のターカラの語尾を生かして動詞としたものと見得べき事、近頃彼の英語の高樣や漢語の牛耳などの語尾を生かしてハイカる、牛耳るなどの動詞を新生したと同じく、要するにアイヌ語と日本語とは今なほ多くの緣組みの記念を遺してゐるのである。筆路いさゝかタークラターに傾いたが、さて田多井の其の又隣に在る御殿場はコタンバ、コタンは村（又は國）、パは其の東方又は上方の義で、斯

かる地名は所々方々に在り。昔頼朝公が富士の巻狩りをした邊ばかりに在るのでは無く、又其の時御殿の建てられた所だなど考へる事こそ全くタークラターである。次ぎは北安に移り平村なる稲尾はイナオ又はイナウでアイヌの創りかけ御幣の事、木崎湖東岸に此の地名有ること何等か理由有るべし。地志原、地捨の田など之も各地に見える連結名詞であるがチシは峻路の意味、八坂村は山間部落多き故に此の地名が二ケ所も有るとは面白い。又前に原始日本語としてあげたヲタリ（小谷）も或ひは寧ろアイヌ語のオタルナイ＝砂の流れる川では無いかと思はれる。即ち今の姫川などをオタルナイと云ひ其れが沿岸一帯の地名となつたのであらう。此れに小谷の宛字は成功と云ふべく、尤も假字使ひにてヲとオと異る事などは此んな場合であるから問題とはならず、ナライと奈良井、イナオと稲尾皆然り。別に姫川は原史時代に入りてはヌナ川とも云つたらしい。此の流域に據つたのが古志の沼川族で、諏訪神の御母沼川姫命や、崇神朝の四道將軍大彦命の御妃即ち建沼川別命の御母等を出して居る。姫川河口たる越後國糸魚川の努那加波神社に沼川姫命を祀り、又安曇の最北端なる北小谷村大網の諏訪社は沼川姫命が諏訪神を生ませ給へる靈地とせられ、大網の地名も其の時御産屋の四方に北海の漁具大網を張り廻し給へるに基くと云ふ傳說が有る。其處で今の姫川の名は沼川の名が沼川姫命と申す御神名

となりたる爲め、特に還處申上げて單に姫の一字を拜借いたし姫川と云ひ慣はしたものであらう。畢竟古志は蝦夷、然らされば肅愼であるべく考へられて居るが、少なくとも此の沼川のヌナはアイヌ語で、前述せるヌ川のヌの延に相當し、即ち水と云ふ事であると思はれる。なほ姫川の水源なる佐野は狹野と解し得る外に、アイヌ語サ（野）と日本語ぬ（野）との同語連結で無いかと考へられ、又其の北に續く澤渡、サハは平野でトは沼、平野に湛へた沼の義で、是れ即ち佐野坂の北に在つた湖水の名殘りを語る地名ではあるまいか。直ぐ其の東に谷地と云ふ地名も有るなど參考すべきである。興味有る事には彼の南安梓川の上流にも澤渡が有る。此處は現在では平野と云ふ程の地形とは思はれぬが、沼は今なほ其の西北に二つ程殘つて居るのである。なほ其處より溯つて上高地にも白澤渡がある。其の邊は昔は沼であつたこと一目にして知り得べく、今なほ一の池、二の池、三の池（即ち明神池）も有れば、少し下つて濕原に取卷かれた田代池も有るのである。なほ前記澤渡から梓川を下れば前川渡、奈川渡があり、支流奈川を溯れば黒川渡、寄合渡がある。昔は此のあたりまで全部安曇に屬いて居たので、飛彈と安曇及び木曾との交通の要衝たること今なほ昔の如しであるが、以上列擧の何々渡と呼ばれる地點を見ると、何れも其の名の川の合流する所であつて、其の地形が其等河川の回春以前は相當の沼で

あつたと思はれる。但し此等何々渡は日本語の河川名が上にあつてアイヌ語トが下に据えられて居る特別の場合であるが、此れはトなる語が恰も単國語乃至は此の郷土の方言と化し終りたる後に、國語の河川名が冠せられて此等連結名詞が出來たのであらう。隨て右梓川上流の澤渡も、佐野坂の北の澤渡がアイヌ語の平野の沼と云ふ意味なると異り、日本語の「澤」即ち其處なる霞澤の合流點に在る沼と云ふ意味に解するのが寧ろ正當であらうか。終りに彼の烏川の上流なる鼈蹈の名所須砂土もアイヌ語スツト即ち山麓に在る沼の意か、今其の邊に沼などは見當らざれど、烏川が岩原城山と離山の間を未だ穿通し得ざりし時代の地形を吾等は想像して見たいのである（近頃附近に貯水池の出來た事などは考證上の一暗示として興味がある）。畢竟アイヌは吾等の祖先に先んじて此の地に住みたる人種なるが故に、其の遺留し去りたる地名は、吾等の祖先に於て其の自尊心を傷けられざる限り其のまゝ襲用したるもの頗る多く、其處に吾等祖先と彼等先住民との交渉を覗ふ事が出來、史的資料としても貴重なるものであるが、其の間には又既に述べたやうなアイヌ語と日本語との連結乃至同語連語名詞、のみならずなほ色々と奇妙奇天烈なる混血語まで出來て居ること聊かぼゝ笑ませられる。たとへば安曇方言テードコサと云ふ變な副詞などが其れである。アイヌ語の副詞テーダ（夙とに、以前に、いち早く）へ日本

語の天爾波こそが附いてテーダこそ即ちてえどこさ（早くこその意）となつたので、てえどこさ寢てしまつた。てえどこさ逃げたなど云ふ。矢張り地名の事で日韓交通後は又其の關係の新地名が續々出來た。豐丘、田阿、安坂、薄町（須々岐、鈴木）犬飼（また犬養にして古くは犬甘と書し、犬甘、馬甘、牛甘、猪甘など甘字皆かひと訓じた、此の犬甘に二種別有り、安曇に在るものは安曇犬甘＝犬海人＝海人犬甘＝甘犬甘＝甘犬にして、筑摩に在るのは韓犬甘＝辛犬甘＝辛犬である。甘字を單にあまと訓ずる如く考へ、犬甘を犬あま＝犬海人＝甘犬とのみ解すべからず。抑も犬甘は職業の總稱で、甘犬と辛犬とは其の人種別なればなり）、執田光（後部高）、錦部（錦織）等歸化人に賜はれる姓などに關係有りと見るべき地名が、國府の在つた松本附近から東筑一帶に少なからず。其の他各地の城山、曾山、女山等も朝鮮語ジョラバ又はジョヤバ（都城の意）なるべく、地形の關係上昔はアイヌのチャシでありしもの多く、且つ又後世の城砦たりしものも少なからず。隨て城山の宛字は最もうまく適合して居る次第。一好例として松本市の公園たる城山の如きも辛犬甘氏の城砦があつたのでジョヤバであつた事は確實であり、溯つて前史時代にはアイヌのチャシであり、降つて深志に城の出來て後も附屬の一要害であつた事云ふまでも無し。要するに此等多數の例も亦上古より中世へかけた日鮮融和が鄕土文化に與へ

た影響を物語る資料と云はねばならぬ。次ぎに地名に續いて更に重要なるは其の鄉土に固有の方言である。方言の中には非常に多數の古語が埋藏されて居る事、恰も彼の先住民遺跡に多數の考古學的遺物が包含されて居るが如くである。凡そ社會の複雜化と共に其の語法を確保し之を十分進展せしむる一方に於て、語彙の增加をも圖らねばならぬのであるが、其の手段としては新語を作るよりも外國語を輸入するよりも須く先づ適當なる古語の復活を圖るを以て先決問題とすること地名「ホタカミ」のみには止まらぬ。此の意味に於て古語を埋藏することの多き方言は極めて貴重のものであるから、出來得れば全國的の機關を設けて調査もしたり、其の結果を齎らし各新聞雜誌等に於て其の紙面に適宜に其等を活用したりするならば、現今の如く無茶苦茶に洋語を採用したり生硬な漢語を新製したりすると異り、幾年ならずして國語に一大躍進を來し得るのみならず、其の社會的效果は更に思想的方面にまで及び得ること明かである。今安曇の方言に關する例證に至つては枚擧に遑無く、且つ歌詞の部に於ても多數解說せるものあるを以て玆には之を略す。言葉に續いて貴重なる遺物は色々の土俗的資料、即ち各地祭禮の御神事とか其の他の年中行事の類、又は特殊なる風俗、慣習、製作品、なほ鄉土の歷史としての傳說口碑や、文學としての實話俚諺等である。最後に此等古來の地名や言語を用ゐ、此等土俗的

資料や、口から耳への鄉土の歷史文學等、即ち鄉土文化の總べてを內容として傳統的なる型に盛られた所の律語、即ち俚謠であり、之が又慣習的なる振りを附して踊らるゝもの、即ち鄉土舞踊の類である。吾等は千早振る世の佛を辛うじて此等の中にのみ發見し得る。隨つて吾等が顯彰せざるべからざる安曇古來の文化、其れは祖國日本の傳統文化の一礎石として最も代表的なるものであるが、其れを如何やうにも表現して更に天下後世にまで向上擴充し行かんとする方法は、要するに此等の資料に立脚するより外に無い。たとへば古い大木が新しく芽を出し花を開く、よし如何に新しく妙へなる花を開かうとも、其れは必ずや古木其のもの〻有つ同じ生命の延長であらねばならぬ事と同樣である。

文化顯彰の各種の形式

其處で一つの社會に內在する文化が顯彰される（表現せられ且つ其れが天下後世に廣く永く繼承されて行く）色々の形式に就いて比較して見る。先づ法律制度の如きものも文化の重要なる表現であり且つ繼承さるべく作らるゝ一つの形式である。が此等に比較すれば風俗慣習のやうな形式を採つて來るものは其の表現も繼承も一層自由で且つ徹底的である。何となれば風俗慣習は、法制の如くしかく作爲的他動的なもので無いから、殆ど强制を用ゐずして人心自然の歸趨を具現し、且つ其れ自身に廣く永く行く所まで行く能動

性＝徹底力を有つて居るからである。所謂無爲にして化するに近いものである。さり乍ら此の風俗慣習の類も、なほ客觀的の事情に囚はれ且つ環境の支配下に行動せねばならぬものであるから、眞に自由且つ徹底的なる文化の表現且つ繼承の形式とは云ひ難い。乃ち先づ表現の事より考へる。抑も文化の最も自由なる表現は、其の第一次形式としては、何より彼より先づ言語に據る事で無くてはならぬ。言語の組織的に配列されたものが說話である。所が此の言語、說話は元來空間的には流動性、時間的には揮發性であつて、傳聞の間には變形し易く、記憶からは逸し去り易いものであるから、表現せられたる後の繼承の可能性を考ふる場合、其處に徹底力を缺いて居るの恨みを生ずるのである。然るに此等流動性揮發性のものが一度び結晶して律語即ち詩歌の形式を採るに至れば、文字と云ふ器に盛られたると否とを問はず、其の形式の有つ特殊性として、一層能く人の情意に訴へ表現特に鮮明を加ふるが上に、殆ど絶對不變の正確さを以て廣く社會へ又永く後世へ其れ自身無限に繼承されて行く徹底力を有つて來る。例へば彼の古事記風土記の如きも、其の作爲の年代や其の作者等に關する疑問は兎に角とし、彼の中に記されて居る神話乃至傳說が、吾が上代の或る期間に於ける文化の表現たりし事に間違ひは無いので、其れが文字を以て錄せらるゝ以前は專ら彼れに含まれて居る多くの詩歌及び律語を中

心として比較的容易に口誦傳承され、後には其の專任の語部も置かれたのでは無かつたかと思はれる。現在書契以前なる未開種族間の史傳等も多くは律語化した口傳に負ふもので。手近な所吾等の昔咄「桃太郎」の例に見るも「昔々あつたそうな、爺と媼とがあつたそな、爺は山へ萱刈りに行つたそうな」と云ふ總べて此の調子で、十分律語化して居なければ子供さへ承知せぬでは無いか。されば此の詩歌こそは、第一義的なる言語に立脚する意味に於て、先づは社會が有つ文化其のもの〻全く自由なる表現であるのみならず、其の又律語的結晶たる事に於て、廣く永く繼承さるべき可能性即ち社會的徹底力の大なること、色々の形式のうち最高位に在るものである。但し或る個人の、就中題詠等に成る漢詩や和歌の類とか、詩歌作爲を專門とする人々の種々の技巧歌等は、社會的意義自ら異るを以て暫く問題外とし、吾等は彼の有名無名の一般庶民より其の實生活の反映として、たとへば律動的勞作に伴ひ發せらるゝ咏嘆の如く、卒直且つ無意識的に、即ち囚はれず强ひられず且つ巧まず全く自由に其の心境が歌ひ出され、其れが偶々江湖の同感に値ひしたる結果、期せずして天下後世に傳唱せらるゝ所謂俗謠の類に、社會文化の完全なる顯彰形式を發見し得るので（因みに俗謠と元來殆ど同意義なるべき民謠と云ふ語は、近頃專門家によつて俗謠風又は俚謠風に作爲せらる

ゝ技巧歌の事として盛んに用ゐられ居るにより、混同を避けて玆には採らず）就中其の母體として特殊の鄕土を有つ俗謠こそ玆に問題とする俚謠なのである。斯くの如く俗謠と俚謠とは固と同根と見られ、俗謠が一定の土地に根附いて俚謠を生ずる場合もあり、俚謠が流れて俗謠と化し去る場合もある。が要するに其れが單なる俗謠なる場合はなほ遊牧の民の如く、西に東に流離して一定の故鄕を有せず、隨て何等の理想も無く次ぎ〳〵と滅び行くものなるに反し、俚謠は一定の鄕土に土着のものとして其の鄕土に對するの愛着と誇りとを有つが故に、常により善き鄕土を建設せんとする理想と希望とに燃ゆるものなる事は何人も熟知する所、隨て彼の俗謠は社會文化の表現機承の形式であり乍ら、文化其のものを向上擴充せしむべき性能に於ては遥く此の俚謠に及ばない。のみならず社會文化が墮落の過程を辿りつゝある場合の如きは、其を表現しつゝ其の墮落に加速度の傾向を附加する性質をさへ有つて居る事は無理も無いので、是れ即ち俗謠が往々君子の間に擯斥せらるゝ所以である。されば苟も文化向上の效果は之を俚謠に對つて求むるの外は無く、斯くして俚謠は祖國文化の礎石たる鄕土文化の顯彰上、絶對的の地位を有つて居るものと云はざるを得ない。乞ふ見よ、昔乍らの方言、拘束されざる俗語を以てする庶民の口はれず巧まざる實生活の物語り、其の表現たるや全く自由で無理の點が無い

のであるから直ちに總べての人の共鳴に値ひする。是れ即ち其れが一人によつて唄ひ出さるゝ時は、名僧智識の說法教訓や學者先生の高論卓說に勝る感動を大衆に與へ得る所以では無いか。又見よ其れは民族と生命を一にする所の永遠の國語の上に築かれたる、否國語其のものに咲き出でたる韻律の花として、國語の生命の有る限り廣く永く繼承せられ、隨て其の鄕土の歷史、土俗、生活あらゆる題材を歌ひつゝ、其の中に彼等が祖先への限り無き憧憬、子孫への燃ゆるが如き純情を告白して居る。是れ又俚謠が傳統文化の向上擴充を目的とする所の、祖先より吾等へ、吾等より子孫への愛の遺言と見做され得る所以では無いか。要するに文化顯彰の最高形式として法制や風習などをも超越しつゝ遙かに重大なる意味を有する事に於て特に嚴肅に取扱はれねばならぬものは此の俚謠である。

所謂「文明開化」の大破綻

顧るに維新後、吾が國の指導階級に居た人々の多數は、燦爛たる泰西文化に眩惑されたる爲め、其の文化の移植に際し大なる失敗を演じたと云ふのは、泰西諸大國の文化の背後には其れ〳〵傳統的なる國民精神及び又之を培ふべき宗教や哲學等確乎とした思想的根底の有つた事を解せず、形而下文明をのみ專ら輸入する事を以て、我が國を所謂文明開化に導くの全部であると速斷したる事であつた。凡そ當時の歐洲に於て國民教育の

最も完備されて居たのは獨逸聯邦であつたと云はれ、我が國として獨逸に學んだ事は少なく無かつたのであるが、今日獨墺の天地を席捲して大活動を爲しつゝある彼の獨逸民族主義の如きも實に彼等獨逸人が幾世紀を重ねて培養して來た民族精神の發露に外ならず。十九世紀初頭の哲學者フイヒテの如きは冷靜其のものと云ふべき哲學を講ずる人であり乍らなほ其の大演說「獨逸國民に告ぐ」の題下に於て盛んに所謂ナチヨナーレ・エルチフングを高唱しつゝ極力國民教育に情熱を注入したのであつた。獨逸が其の武力を街ひ遂に國策を過つたのは惜むべきであるが、兎に角全世界を敵として戰つた彼等の武者振り、不幸一敗地に塗れた後の其の又目覺ましき復興振り、共等の背後には斯く長きに亘り培養されて來た確乎たる思想的根底の有つた事を吾等は看取せねばならぬ。固より斯かる國民的思想の類は何れの邦國に於ても一朝にして築き上げらるべきでは無い。其の民族々々に固有の由來を辿りつゝ幾回かの內憂外患に試鍊せられ、永い世紀の間に歷史的に結成されて來たもの、政體や國法の如きは一朝にして仕上げられたと見られ得る場合も有れど、一邦國の存立原理とも云ふべき斯かる思想の類は全然同日には談じられぬ。其れ程にも假染ならざるものであるから、苟も開國進取の國策を執ると云ふやうな場合は何よりも先づ此の方面に豫め深甚の用意が無くてはならなかつたのである。其處で

云ふまでも無く我が國には開闢以來天つ日嗣の御法のまに〳〵全世界を修理固成して一大家族たらしむると云ふ、眞に萬國に超越したる立國の大精神と、之を裏書する所の偉大深遠なる宗教や思想も儼存して居り、其して更に此の方面に貢獻すべく世々其の人にも乏しく無かつた。即ち例へば光國は諸侯として宣長は學者として共の他幾多の人々が國民思想の培養に力め、遂に王政復古をも仰ぐ事が出來たのである。然るに愈々開國進取の國是を定めて後は何うであつたか。所謂猿眞似外交の考へから六鄰館で舞踏に夢中になつたなどの官員は掃く程あつたなれど其處に一人の光國も無く、また物質價値などを敎へた福澤諭吉は居たなれど、國民精神を論じた宣長やフイヒテの樣な人物は遂に見當らなかつたでは無いか。斯く思想方面に對つて殆ど考慮を拂はれなかつたと云ふ事は彼の如き變革の際として實に重大なる手拔かりであつた。顧れば彼の歐化主義に夜も日も足らなかつた明治二十三年、長くも「肇祖先の遺風を顯彰」すべしてふ聖旨を拜したる際の如き、官界敎育界を擧げて恐懼し率り、吾が民族固有の文化に就き大急ぎ調査を始めたやうな有樣、以後漸く大和魂とか武士道とか近頃はまた日本精神とか叫ばれるに到り、さすがに數千年來一貫して鍊へ上げて來た獨立文化の有難さ、兎にも角にも世界强國の班に列したのであつたが、其の今日すらなほ且つ祖先の遺風や日本精神の何たるかは凡

そ直觀の範圍に止り明確の認識には達せぬらしく、其して日本アルプスだ中部山岳だなど好い加減うろたへ廻り、絲の黒髪には燒鏝を當てゝ紅毛人らしがり子供にまでパ、マ、など飛んでも無い口眞似をさせて得々として居る。況して維新當時と在つては、一も二も無く法治萬能、物質絶對禮讃主義など云ふ低級極まる形而下文明の設置に沒頭し、凡そ精神文化に關する施設として見るに足るべきものは一も無かつたと云つて可い。たとへば廢佛毀釋など云ふ暴擧を斷行して折角の信仰界に不安の大嵐を捲き起し、其の代償としては神道の興隆などを企圖するやにも見えたれど矢張り徹底したる事も無く、畢竟たゞ和尚たちを「還俗させてこけらの鮨でも賣らせ」たる以外何等の事も仕出かし得ず、揚げ句の遁辭が「信仰自由」で御座る。其れなれば何も和尚たちを路頭に迷はせ堂寺を破却するには及ばなかつたでは無いか。凡そ正當なる文化の助成を念頭に置かずしてなされたる此等の形而下的施設、具體的に謂へば法治強制を以てする物質崇拜の滅茶苦茶なる鼓吹などが如何に成功して見た所、其處に持ち上がつて來る社會は推して知るべきである。さればこそ賄賂稼ぎに終始する大政治家、勳章や博士號の廉賣市場を開店する高官や學者、あらゆる怪物が社會の上流に泳ぎ廻り、其のうちには一唯物觀マルキシズムなどを全人生の根本原理でゞもあるかの如く妄信し、親、家、鄕土、祖國をさへ失

念して居る畸形兒などがぞろ〳〵孵けて出て來るなど、今や所謂文明開化の夢全く破れて、祖國は正に最も忌まはしき思想上の大暗礁に乘上げて仕舞つたのである。斯かる思想國難を救ふべき唯一の根本法は、又候お手の物の法治強制や間に合せのお題目で無く、須く國を建つる所以の歷史を明かならしむること其れ一つである。所謂建國の歷史と申すやうな事は每々高唱せらるゝ文句で有るが、其れも今時の中學教科書の多數に書いてあるやうな「出來事の無意味な配列」であつてはならぬ。其んなケチな事は年代記一冊懷中して居れば澤山用が足りる。玆に云ふ國を建つる所以の歷史を明かにするとは、其の民族固有文化の發祥の意義、及び其の展開の過程に關する正しき會得其の事である。凡そ時の古今、洋の東西を問はず、渾圓球上苟も邦國を成すもの、此等民族文化に關する施設を等閑にして大を成し得た例は一つも無いので、祖國今日の國難も全く此の邊の骨意を等閑にして居た結果に外ならず。隨つて右述ぶるが如く、先づ第一に國民教育に於ける歷史教授の面目を一新すると同時に此れと並行して、民族固有文化其のもの、結晶であり且つ之を機承しては其の文化の過程に對つて向上擴充を齎すべき重大の役割を有つ各鄕土の俚諺等に對つても極力助成を講じ、之を總べての點に於て立派なる存在たらしめつゝ完全に其の性能を發揮せしむる事の如きは、現在國民の思想的崩潰を救ふべき急務

中の急務であり、又效果的に觀て最高の秘策でも有り得る。吾等は此の意味に於て少なくとも彼の小學教育の正課には血脈の通はぬ翻譯唱歌（！）などよりも、是非其の鄕土々々が生んだ純眞優秀なる俚謠を選定して編入し置くべき事を多年主張して來た。又此の主張は近き將來を期して一具體的運動にまで進展せしむべく考慮して居る。然るに何ぞや形而下文明禮讚の夢なほ覺めやらぬ指導階級者の多數は今以て民族文化顯彰の事に關しては、殆ど無關心に近き爲め、俚謠、俗謠、民謠の類の識別をさへ試みんとせず、總べて此等を桑間濮上の音とのみ看做し、隨て其の頽廢を救ひ向上を企圖すべく何等の對策をも講ぜんとせざること誠に長大息の外無き次第である

昔の安臺踊

安臺には昔から維新前後まで數種の盆踊が行はれて居たので、其れには又他より輸入と見るべき「ヨジマ」「サンコロリンサ」等も加はりつゝ色取り〳〵に持てはやされたのであつた。右のうち昔からの數種は、具さに其の旋律を觀察したる時、何れも共に系統相連るものである事を知つたのであるが、假りに此等を類別して「野手唄」（又は代唄）、「チョコサイ」（及び三つたいき）、「十五夜踊」の三部門とする事が出來る。抑も此の系統の唄こそは實に此の鄕土に固有のものであつて、南は鹽尻より松本、穗高、池田、大町、北は

四ケ庄、小谷、越後國糸魚川の濱邊まで之を尋ね出し得るものであつた。就中北安臺の野手唄と糸魚川の盆唄とは其の唄ひ方特に酷似し、只安臺に用ゐられた拍板（びんざゝらの略、又拍子）は糸魚川では見られなかつたと云ふことである。さて野手唄、チョコサイ、十五夜の各種は系統相連るものであり乍ら、其の名稱の異るが如く、曲節の內容に非常なる相違があつたのみならず、同じ野手唄、同じチョコサイにしても此の村と隣村とでは既に相當の變化を見せて居た。しかし其等を比較研究する時に、其の變化は節奏に關するものであつたり、又は音其のものゝ變化にしても和音より和音を辿るものであつたり、又は此等の變化が並び行はれたりした事が色々異つた旋律を生む由來となつた事を知るのであつた。たとへば鄕土の北部に行はれた野手唄の唄ひ出しは頗る低く初まりたるに反し、南部に行はれたチョコサイの其れは頗る高く且つ拍子が短促されたものであつたけれど、試みに甲のテンポを詰めて乙と唱和せしむれば其處に相當の伴奏曲を聞き得ると云ふやうな驚嘆であつた。又先年杵屋佐吉師に乞ひて得たる安臺節の有旋律伴奏に於て、音頭の終り二小節ほどは偶然にも昔のチョコサイの終り二小節ほどの或る顚輕なる人々の唄ひ方と一致して居た。是れ奇に似て奇にあらず、何となれば顚輕な唄ひ方と標準的な唄ひ方と、又各地各樣の唄ひ方と、其等の間には相互に旋律に對する伴奏の

如き近親關係が辿られ、和聲學的變化が盛んに行はれたと解すべき場合が頗る多かつたからである。要するに隣村から隣村へ、又子の代から孫の代へと繼承され、大勢の人によつて絶えず唄はれ踊られて居る間に、自ら其の曲節が洗練され、其の又伴奏も色々と面白いものが出來て行く、斯かる鄕土的な進化の過程が貴くも亦懷しいでは無いか。が一つ惜むべし其處に何等の統制も試みられなかつたと云ふ事は、又禍の伏在する所であつたので、若し當時人有り、此等一群の俚謠を整理して曲節や振りの據るべき栞を設けて置いて呉れたならば、今日の安臺節を待つまでも無く、今頃は彼の淺間山麓から興つた追分節の如く、全國に傳唱久しきを得たかも知れなかつたが、兎角其んな不生産的（！）な仕事に汲頭するやうな茶人も遂に飛び出さず、里から里へ傳はり幾轉化を重ねるうち、漸く支離滅裂の狀態に陷り、何れを法とすべきやうも無く、遂には外界よりの一二の壓迫に堪へ切れず、各地に於ける各種を擧げて全く息の根を絶たれ終りしこと茲に約半世紀、今日吾等同志をして洋樂全盛の時代風潮の只中に、斯かる安臺節なるものを新興すべく苦勞せしめたる事は、恰も彼の光彩陸離たる支那陶磁器や西洋硝子道具の店の一隅へ石器時代趣味の素燒藝術を出陳すべく、あらゆる先住民遺跡を驅けずり廻つて土器破片を拾ひ寄せ、彼れでも無い此れでも無いと土だらけの絞樣をひねくり廻し、構想思

索に日を暮らさせるやうなものであつた。此の意味に於て吾等は此の事業を吾等に遺したるまゝ手を拱いて傳統文化の終焉を眺め、何等の工作をも試みざりし先人の呑氣を恨まざるを得ず。

「野手唄」と歌垣

吾等は安臺古來の各種の盆唄を比較研究して施律、節奏、樂章や樂句の變化の跡を辿り、大體に於て野手唄（乃至代唄）の種類よりチヨコサイの種類が、三つたいきや又十五夜の種類が、已のがまに〳〵生れ出たものと考へざるを得ぬのであつた。即ち血族關係にある此等の唄のうち特に野手唄と云はれた一群は其の最も原始的の形式に在つたもので、其の唄ひ方からして既に頗る悠暢、且つ一人一歌詞の上の句を唄へば全員其の下の句を繰返すこと二度ならず三度に及ぶと云ふ頗る古風なもの、又其の歌詞に顯はされたる種々の世相より觀察するも、之こそ上代の歌垣（うたがき）の遺風たること明かなるものであつた。所謂歌垣は、男女多數が垣の如く並んで互に唄ひ交はしつゝ踊つた、東國にはかゞひ（嬥歌）と云はれたもので、未開の世の求婚舞踊に外ならず。自然其の特色として、踊場は四方から寄り來るべく交通の便を有し、しかも多數が自由跳躍の爲めには廣濶なる野外で無くてはならず、又歌詞、歌曲、振りなども最初は恐らく區々で、或ひは寧ろ勝手な文句を並べて亂舞したと云ひ得るであ

らう。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損ちやい」の阿波徳島氣狂ひ踊など今なほ此の傾きを遺したものではあるまいか。曲節や振りに多少とも型の出來たのは餘程後の事と思はれる。其して嬰歌に特に重要なる點は男女同列に跳躍しつゝ互に情熱の文句を唄ひ掛け又唄ひ返し、其の間に神の許した良緣を求める事であつた。カゞヒは掛け合ひの約、此の情熱的な文句の掛け合ひであると普通に解せられて居るが、著者は別に又此のカゞヒを、口先きばかりの文句の掛け合ひに止まらず踊り乍ら手の掛け合ひにまで進む意味を有つて居たものと考へるのである。即ち抱き擁くの抱くと云ふ古語がある。是れ手を掛くの意で（漢字抱字も手偏に包である）現代でも手掛け目掛けは愛妾の事である。抱くは後に抱ふ、俗語で抱へるともなつた。抱へられる人は即ち掛り人である。其處で此の抱くの連結語たる抱き合ひ（抱擁）がかゞひとなつたと云ひ得るでは無いか。又抱くの延は抱ぐで其の連結語抱ぎ合ひが即ち婚ひで何れも古語である。抱合ひを許した特定の場所をうしはき給ふのが抱所の神＝岐の神＝ふなどの神で、又此の神の象徴が例のお石神（要石や立石即ちメンヒルに關係有るべし）又しやぐじ宮など云ふて祀られて居る所のリンガとヨニ即ち雄子雌子の石、陰陽石であらう。其れが道の辻を閉ぎ塞ぎつて居て通行者をして否でも應でも其の身振りを踊りつゝ一と廻りさせたのがさへの神

（塞神）即ち道祖神である。今日緣結びの神として盛信篤き幸神、道祖神、道祿神、の石像は男女兩神文字通り單に手を掛合ふだけの穩便な姿に現はれ給ひ、通行者に對しても別に無理な御注文も爲さらぬのみならず、特別祈願者にさへも手を合せて拜み奉るだけで意中を叶へ下さるとは誠に有り難いでは無いか。以上唄の掛合ひであらうとも手の掛合ひ即ち抱へ合ひであらうとも掛合ひたる事は同じで、此れをカゞヒと云つたのである。要するに此の形式を以てする求婚は、上代に於いては所謂神業として見られ、眞劍の態度を以て取扱はれ、其れ故にこそ其處に責任を以て立たせ給ふ神樣まで在しましたる次第、今時のダンスホールなど全然無責任なる抱擁歌舞の場所とは天地の差があつたのである。さて遠祖那岐那美二尊が、其れは後世のお石神即ちくなどの神に當ると推しまつり得る所の天の御柱を廻り合ひ乍ら「あなにやしえをとこを」「あなにやしえをとめを」と宣り交はし給ひたる、之ぞ嬰歌の國史に見えたる最古のものと申し得るであらう。神武天皇が高佐士野に遊べる七人の少女のうちより、歌もて大后たるべき伊須氣余理姫を選び給へる、是れ亦歌垣の一例と見るべきは勿論、降て記に袁祁命（後の顯宗天皇）が歌垣に立たせ給ひ、鮪臣と美人大魚を爭はれたる條には、双方熱烈に唄ひ掛け唄ひ返され、其の夜を闘ひ明したりと闘の字が用ゐられてある。抑も闘ひ、戰ひは叩き合ひの約であ

ると古來の學者は決めて居るが、其れなれば打ち合ひの約がうたひ（歌ひ）で突き合ひの約がつかひ（使ひ）で張り合ひの約がはらひ（拂ひ）で斬り合ひの約がきらひ（嫌ひ）か、實に好い加減の話である。思ふに鬪ひは元來たゝかひにて、たゝかは急迫の意味の接頭語、かゝふは前述の掛け合ふ、掛り合ふ（係り合ふ）、俗語のかゝらふ、からかふでもある。故にかゝふは親睦にも鬪爭にも和戰兩樣の係り合ひを意味した言葉である。さればこそ嬥歌も一面には男女間の平和なる唄や手の掛け合ひあると同時に、他面には延いて同性間の鬪爭、係爭にも及ぶ場合が有つたので、既に袁祁命も其の夜の明け方鮪臣を襲つて之を斬殺せられて居る。記に鬪の字を用ゐて係爭の意味を表はし、且つ鈴の舍大人も之を平凡にたゝかひと訓せず一氣呵成にかよひと訓じたる所、さすがに國學中興の祖であつた。但し此の逸話は書紀には小長谷若雀命（後の武烈天皇）と影媛との事に作り、影媛は哀傷の餘り鮪臣の葬列に立つて「玉笥には飯さへ盛り玉盌に水さへ盛り泣きそぼち行く影媛あはれ」と自ら歌つたとある。畢竟嬥ひの熱が高過ぎて鬪ひにまで及んだ爲め此んな悲劇を惹起したのであつたが、其處に上代人が上下を通じて如何に此等の事に眞劍であつたかを觀察し得るであらう。なほ昔歌垣の行はれた場所としては常陸の筑波山、大和の海石榴市、攝津の歌垣山、肥前の杵島ケ岳等が傳へられる。此等は勿論

有名な大場所であつたには違ひ無からうが、實際は全國到る所に行はれたりし事、岐の神や塞の神の分布から見ても明白であらう。

野手唄の進化と退化

今、安曇の昔の盆踊に就いて見るに、先づ名稱野手唄の野手は古語で原野の事、今日原野山林と云ふ所を古文書には野手山手と記して居る。近代安曇の方言に粗野放漫なる生活を爲し居る人間を野手な奴と云ふも此の語の轉化である。乃ち知る、野手唄とは野外舞踊の歌の意味で、歌垣、嬥ひなど謂はれた時代に安曇では之を野手唄と云つたのである。其の又踊り振りは豫想さるゝが如く頗る自由奔放なりしもので、其の自然の結果として、後には代田の面を鍬などを以て擦する所謂代掻きの如き鄕土色滿々たる律動的勞作の型などまでが何時の間にか取入れられ、一名代唄と呼ばれ、且つ實際代掻きの時唄はれる事にもなつたのである。續いて男女入り交じりたる事は是れ亦申すまでも無く、最後に所謂掛合ひ咄の如く情熱的の文句が頻りに交換されたる痕跡を永く近代まで殘して居た事は最も注目すべき點である。即ち一人が音頭（上の句）を唄ひかければ其の下の句は一同にて受取り幾回も繰返し〳〵唄ひたる事、其れこそは大昔の掛合ひ唄の俤であつたので、今日の安曇節の返しと稱して珍重してある部分は實に其れに由來する。凡そ此の掛合ひの最原始の型としては

一方が一の即興的の文句を以て挑めば、對手側より又之に相當の文句を以て應酬したもの、其れが歌詞の字數、曲節等漸く固定して愈々文學的とも演奏的とも爲り、同時に文句としても傑作の既成品即ち歌詞なるものに富むやうになりては例へば「唄もたいくつ踊もさんざ誰か行かぬか豆畑」と唄ひ掛ければ「お月や照る〳〵あの豆畑豆に葉が無きやをかしかろ」と返歌したのであらう。此等既成歌詞は踊が酣となる度び定り文句の如く唄ひ出されたものなるべく、所謂常識化されたものである。又土地の優劣などに就いても盛んに闘はれ、吾が松川村方面の盆唄の中にも「松川松だけ板取やしめじ花の神戸は馬糞だけ」とからかへば「馬糞だけかよ神戸は名所來好し住み好し女好し」と返すのがあつた。總べて此等の應酬には何れも完全なる歌詞一首づゝが用ゐられて居るが、之が短促されて一歌詞の上の句で挑み、下の句での返しを對手に要求する形と爲つたものが「此宵此處に寢て明日の晩は何處に＝明日は田の中畦枕』『此の子能う泣く雲雀か雛か＝雛でごんせぬ子でごんす』『きりやうで一番姿で二番＝髪の結ひよで二十五番」などである。勿論上の句を出すものは踊り輪を牛耳得るだけの自信有る連中、後には之が專任の音頭取となつたので、之に對し下の句を返すものは踊手や見物一同であつた。然るに曲節や振りが愈々洗錬されて行くと共に、民衆は共處に藝術的の雛我の境地を發見し、求婚

と云ふ原始的な目的は漸く閑却されるに至り、隨て此等掛合ひ主義は何時とは無しに不用とならんとする、此の過渡期型の歌詞としては「お月やちよろり出て山の腰を照らす」又は「紗綾や綾子で腰を照らす」など下をやお十七を』『情かくれば石の戸もあかる＝此處は板戸でなぜあかぬ」等、なほ何處にか掛合ひの俤を殘しては居るが、上の句と下の句との對立傾向は漸く稀薄となつて來た。さて此の囃歌がいよ〳〵求婚舞踊の域を脫し、專ら享樂の爲めの群衆舞踊となつては、斯かる掛合ひ文句は原則上全く必要が無くなり、單に音頭取が「お月やちよろり出て山の腰を照らす」と上の句を唄へば一同聲を揃へて「娘繻子の帶や腰を照らす」など下を繰返して唄ひ返した。又或ひは音頭「忍び夫様おら鶏やチヤボだ」返し「チヤボが二度鳴きや夜が明ける」など單に下の句を一同にて唄ひ返す所に掛合ひの俤を止めるだけとなつたのである。（注意、此等の歌詞は豆畑の其れなどに比較すれば遙かに野性を減じて居るとは云ふものゝ、社會秩序の緊密を加へたる現代に於ては、何れも絶對に用ゐらるべきで無い。隨て此處には只考證資料として出したるに止まる）。共處で此の野手唄が、氣早やの市街地に於ては自然其の悠暢さを失つて唄ひ方が益々短促せられ、續いて下の句を繰返すと云ふ成立以來の特兎を捨て去り、其の代りとして生れたチヨコサイコラコイの囃しを附けて最と輕快に結んでし

まつた。其れが穂高以南松本城下の維新前の唄ひ方即ちチヨコサイだの十五夜踊だの、數種の唄ひ方の由來であつたので、試みに此等數種を原始の野手唄に比較すれば、遙かに調子の好かつた代りには、野趣（文字通り野外の趣味）及び大衆的な面白味を失つてしまつたものであつた。換言すれば、回數の定まらざる下の句の合唱（コーラス）を捨て、樂章を整理し、隨て、より容易に藝者衆の三味線に乘りつゝお座敷藝術としての進境を示したること、進化と云へば云ひ得べく、一面には全然此の合唱を捨て去りたるが爲め、野外舞踊としての固有の面白味を無くしてしまつた。即ち群衆心理を魅了しつゝある或るものに依つて、自由奔放なる踊り輪の中に自ら微妙なる統制が次ぎ〳〵と生れて行く、其の法悦（！）の境地は到底お座敷藝術の夢想だも爲し能はざる所である。其れを無くしたと云ふ事は一つの退化とも云はれ得べきものであつた。

「岩にこもりしギシキてさへも踊を見せれば出てござる」

此處に記し置きたきは、安曇節の母體たる安曇古來の各種の盆踊に就ては、田村將軍が南北安曇の境上に立つ有明山の麓なる宮城の岩窟に籠つた鬼賊ギシキ八面大王を退治した時から始まつたと云ふ傳說が一部に行はれて居た事である。（因みに此の田村將軍を桓武朝の坂上田村麿とするは誤りで、降つて醍醐朝の鎭守府將軍加賀守なる藤原利仁なのである。利仁は山城國葛野郡田村に住し世に田村將軍と稱

せられ當時武名隱れ無し。其の子孫齋藤氏を稱し源平時代には有名なる齋藤別當實盛が出て居る。別に又北安平村源汲（げんきう）にも田村將軍ギシキヨ八面大王退治の傳說及びギシキの岩屋と云はれるものもあるが、之は又々降て一條朝に安曇へやつて來た信濃鎭撫使藤原保昌に關する事と見ねばなるまい。宮城及び源汲に於ける鬼賊退治傳說やギシキの岩屋、鬼賊の投げた大岩等歌詞の條に註す）。即ち此の宮城の鬼賊ギシキが岩窟に籠り岩戸を固く鎖したので攻め飽ぐみたる田村將軍は一計を案じ、此の里の美しい娘たちを撰り集め節（ふし）面白く踊を始めさせた、其の調子が云ふに云はれず好かつたので、さすがの鬼賊も浮かれ出し、我れ知らず岩戸を細目に押し開けて覗き見をした。其の一瞬の隙に乘じ、豫ねて神の告げにより十三節の山鳥の尾羽を以て矧いだ征矢を强弓に番へて射て捕られたと云ふ、所謂岩戸神樂式傳說である。安曇平の鄕土舞踊が突然其の時から始まつたとは到底首肯すべからざる事であるが、斯かる傳說有るを見ても此等安曇盆踊の各種が如何に古い時代に溯り得るものであつたかを窺ひ知るべきであらう。

俚謠安曇節生みの惱み

安曇古來の各種の盆踊は、既に記すが如く進化又は退化の各段階に在りと思はるゝ樣々のものが徒らに混雜を重ね、七花八裂の狀態に陷りたるが爲此の半世紀間は遂に全く廢絕してしまつた。今吾等安曇人として鄕土文化繼承の立脚地より之を遺

慥とし、廣く漁り得たる右等各種の古資料に就き、改めて郷土大衆屋次の試演に訴へ、專ら自然進化の過程を跿ましめつゝ、其の長を採り、短を捨て集大成して創作し得たるものを「安曇節」と名け、玆に初めて此の全郷土を母體とし、過去將來を一貫した傳統文化を語るに足るべき代表的俚謠の出現を見得たる事、少なくとも郷土文化發達史上の一業績として欣快に堪へざる。曾に吾等創業同志のみには限らぬ事と信ずる。抑も俚謠安曇節は右の如く、昔行はれた安曇盆踊の其の何れとも全然異つたものであると同時に、一面には其等總べての粹を抜いて集大成されたものである點聊か誇るに足るであらう。今其の唄ひ方を極めて大まかに說明すれば、郷土各地のチヨコサイを比較して其の精髄を採り、其れの歌詞と囃しの間へ野手唄の返しの終りの部分を或る程度の變更を加へて挿入し、以て群衆舞踊らしさ即ち鰕歌の遺風を存置したるものと云ひ得る。なほ鰕歌の遺風即ち掛合ひ式唄ひ方を保存する事のみに絶對價値を置けば、囃しは寧ろ附けざる筈であつたが、此れをも附けて置いたのは、歌詞の終りを明快に結ばしめんとする現代趣味と、此の囃し其のものも亦重要なる郷土色として特に愛着を感じたる結果である。さて又振りに就いては、前半は十五夜踊、後半は代唄に由來して居る。其して十五夜や代唄に比し、其の腰を反らし其の手を高くし且つ各委態の續き柄を滑かにすべく其の間に多くの修

正が加へられて居る事勿論である。曲節や振りに比し、一層大なる新天地を開拓したるものは其の歌詞である。昔の歌詞にして新興安曇節に採用されて居るものは僅々一割餘に滿たず、今日傳唱されつゝある千餘首は殆ど全部が郷土各地に於ける無名詩人たちの吟懐に負ふもの、著者自身の腹折れも亦其の中に在り。さて斯く述べ來れば安曇節安曇踊創業の事一見頗る簡單なるに似たるも、何がさて專門家が獨自の天才に任せつゝ一朝にして作り上げると異り、先づ恐る〳〵(!)同志を語らひ、其れから郷土の若い衆や娘達、追ひ〳〵頭の禿げて居る中老から文句たら〳〵勝ちなる爺さん媼さんまでの幾年かの試演研究に訴へたので、其れが愈々完成せるものとして自信されたるまでにはさん〳〵なる生みの惱みを滿喫せしめられたるは勿論、莫迦と嘲られ、狂人と笑はれ、眞劍に涙を流して忠告して呉れた多年來の友人も有れば、何等か野心有るべしとして警戒を加へられたる事も有るらしく感じられ、種々雜多の喜劇悲劇で感慨無量のものがある。試みに其の間に生み出されたる幾多の歌詞に見ても想像し得るが如く「踊師匠樣紅白粉よ安曇踊ちや髪だらけ」「頭禿げても踊にかけちや光り輝く音頭取」、家元や同志中老の當時の大活躍は見て居て噴き出さぬものは無かつたのである。また「踊り過ぎたか早や鶏や鳴いた見れば夜露に濡れた袖」之は北安松川村有明山社（通稱神戸の權現樣）の芝原で月の落ちたも

知らず專ら振りを創作した當時出來た文句であるが、同社祭神は岩戸開きの踊り神樣、即ち八百萬神をゑらぎ笑はしめ悲觀のどん底に於てなほ偉大なる勇氣を奮ひ起さしむる事によりて國家非常時を打開された天鈿女命に在しまし、其の氏子中より斯く安曇踊の發祥したる事偏へに御神慮の然らしめ給ひし所ならんとは同志が今以て信心肝に銘じつゝある次第である。次ぎに「すぐれ提灯さげても暗いお月を賴りに越す山路」山間部への宣傳の歸途幾度唄はれたる此の歌であらう。「踊れ此處等は好い芝原だ芝が眞ん丸るく切れる程＝芝の切れるは其りやよいけれど借りた着物の裾切れる」若い衆が女裝して他村へ行つた時の述懷「踊る輪の中がまロを落し拾ふつもりで目を廻す」佛崎觀音樣の緣日へ踊りに行つた時の漫畫的なる一場景、何れも此の踊の創作に參與した鄕土（此處にては主として北安曇郡松川村）の人だちが其の折々の實感を語つたものならざるは無い。要するに現代に生活する吾等安曇人としては斯くの如き方法と努力とに成つた、斯くの如き形式のものこそは、古來此の鄕土に繼承されたる固有の文化を表現し、且つ之を未來永遠に向上擴充せしむべく、最も望ましきもの〳〵一つであると考へざるを得ぬのである。

「寄れや寄つて來い安曇の踊」

吾等が同志多年の協力を得て完成したる、安曇節及び其の踊を社會に發表し初めたのは大正十二年夏で、信州新作民謠流行の尖端を切つた須坂小唄の大正十二年十二月東都に於ける花々しき發表に先つ事約半ケ年、續いて幾組かのパンフレットや繪はがきの類が發行されたのであつた。其等の折々に就けても名稱を或ひは「白馬踊」と或ひは「アルプス節」と、其の他色々に改稱すべく其の立場〳〵から好意（！）勸說し呉れる人々も二三には止まらなかつたが、吾等同志豫ねて語り合せたる事も有れば聊かも動搖せず「安曇節」「安曇踊」を以て押通しつゝ越えて十四年八月には本書初版を出したのであつた。不思議な力を有つて居るは時代趣味其のものと云ふべく、其の後數年、昭和二年より三年に入りては全信州は新作民謠と云ふもの〵洪水に襲はれたるの觀有り、昭和四年信濃毎日新聞社の所謂全信州小唄人氣投票は、此の時代趣味に最後の實を結ばしめたもの〵如くにも見えた。斯くして創業以來十有餘年の歲月は眞に夢の如く流れ去り、吾等の頭は一層禿げ、紅お白粉と對抗した此の虎髭も漸く胡麻鹽とならんとし、所謂「西の山まで響くほど」張上げたる其の聲さへも減切り細くなつた事を感ずる。でも其の間、鄕土安曇は云はずもがな、遠く水內、東筑其の他各地より熱心なる人々の訪問を受け、又當方よりも求めらるゝが儘に、家元自身、又は

代理として古畑準山氏たちが出張、斯道の標語たる愛鄉即愛國の主張と共に專ら普及に渡頭しつゝ何時しか、知命の歳を超えてしまつた。が其の安曇節は鄉土の情調を語つて餘り有るのみならず、曲節、振り、共に素朴閑雅にして、言ふべからざる古曲の面白味に陶醉し得る所甚く現代流行の諸民謠と異るものとせられ、幾年ならずして江湖の憧憬を得たるに加へて、特に鄉土の各地に於ては有志家により相續いで幾つもの安曇踊會が設立せられ、隨つて家元は右等會合の發起たる有力家各位に斯道一切の相談役を嘱託致すと云ふ例となつたが、其の各會は完全に相聯繫して、斯道が又々支離滅裂に陷るを警むべく家元の著作權を中心とし、且つ毎年一回概ね夏季に於て全鄉土聯合安曇踊大會を松川、豐科、大町、穗高など、主催地持ち廻りにて開催、最も愉快なる鄉土的年中行事の一として數へらるゝに至り（但し滿洲事變以來此の大會は遠慮中）、家元より素人、玄人へ對する踊手、背頭取、業手其れ〳〵の免狀授與等も多くは其の大會踊場等に於て輝やかしく行はるゝ例となりたるなど、又各地に大小の踊の會、安曇節の開卷等年々數知れず、先づは昔此の鄉土の各地に色々の盆踊が盛行せられたる當時を再現したるの觀あるのみならず、其の歌詞等に到ても優秀なるものが次ぎ〳〵と詠み出でられ、鄉土の隅々、山の奥、野の末までも唄ひ盡されんず勢なると同時に、之が千古の絶唱を子孫末代への置土産と

すべく鄉土雅客の間に所謂安曇節文藝なるもの〳〵勃興を見るに至り、各地宗匠亦之に應じて獻身的努力を賜はりつゝある事など、聊かなりとも鄉土文化に貢獻せんとする吾等が素志の一部も追ひ〳〵實現の緒に就きつゝあるものと考へらる。特に近年は登山客諸氏により之が全國的傳唱の機運に際會し、隨て本書再版の要望亦甚だ急なるものであつたが、如何せん著者はアルプス山下の村々を喘ぎ廻らねばならぬ藪醫者の身の上、取り別け近年は色々の俗務(!)も漸く身邊に蝟集し來り、爲めに筆硯に親むの機會を得る能はず、心を焦らちつゝも空しく年月を送るうち、多年の過勞に禍ひされ、去る昭和五年春に至り遂に健康を損じ、門を鎖して靜養の止むを得ざりし事約半歳、彼の初版の序に「睡眠不足を常習としつゝ神經衰弱にも成らず自ら馬鹿まめなるに呆れる」と物したるなど、所謂醫者の不養生、紺屋の白袴、自ら病床に顧みて微苦笑禁ぜざる次第であつた。が男子死すれば即ち止む、苟も命有る限りは畢生の餘力を斯道に捧げる。何となれば吾等如きの莫迦者にあらざれば誰も頼みもせぬ斯かる仕事、殊には名勝地や温泉場などの宣傳效果百パーセントを見込む場合と異り、資金などの出場所無きは固よりの事、單に鄉土愛と云ふだけの爲に時と金と又精力とを消費すること匹の知れざる斯かる仕事に液頭して、凡そ功名利達に去り狀を喰はせ、我れから一生を棒に振らうと云ふ變人が左樣にザ

ラには有り得ないからである。乃ち思ふに今多少の健康を恢復し、又候禿び筆を執り上げつゝ（初版後丁度一と昔）重ねて江湖に見ゆること、蓋し神々が現在程度の安曇節宣傳を以て未だ足れりとし給はざる所以であらう。

感謝に餘り有る協力と指導

茲に再版を出すに就き斯道に特別の興味と同情とを寄せられつゝある全國の愛好者諸君に謹んで敬意を捧げると共に、愛鄉即愛國の趣旨に立脚して終始限り無き協力を吾等に與へられつゝある鄉土あらゆる方面の人々、殊には各地なる安曇踊會相談役、安曇節宗匠をはじめ、踊會員や歌會同人各位に對し、本書を通じて深甚の謝意を表する。就中斯道發祥地たる北安松川村安曇踊會（家元出原處士之が會長を兼ぬ。大正十二年斯道完成と共に設立、是れ即ち各地安曇踊會の嚆矢なり）をはじめ、安曇節作詞の源泉たりし同村板取をとり吟社、同じく鼠穴安曇節研究會等、又今日安曇踊の最大道場として知られ、其の那內一圓に支部を設置し、各町村長各位や有力者諸賢が卒先して最高幹部に任ぜられつゝある南安曇科町南安曇踊會（名譽會長家元出原處士、會長前町長岡村政雄大人を以て昭和三年十一月十九日豐科踊會より改組）、續いて熱心なる青年有力者諸君の大同團結に成れる北安大町北安曇踊會（會長故戸谷今朝一大人を以て昭和四年春、安曇踊會大町支部より昇格）、彼の俳壇の重鎭た

る雲外居石村宗匠を中心とする同郡陸鄉村安曇踊會陸鄉支部及び同村犀西吟社、また安曇踊會支部中にて創立最も早かりし南安穗高町踊會（前記豐科踊會の南安曇踊會へ改組と共に此の支部は安曇踊會より南安曇踊會へ移管された。此の會の甕吉次氏が本書初版の發行に奔走せられたるは今なほ感謝する所である。）若し夫れ遠隔の地に於けるものとしては、終始相往來して肝銘に餘り有る支援を吾等に與へられつゝある東筑坂井村安曇踊會松場支部の如き、其の他鄉土到る所に散在する前記三本部（安曇踊會、南安曇踊會、北安曇踊會）よりの各支部、又專ら安曇節作詞の方面に於ては、多年月次開卷を繼續しつゝ既に千古に傳唱せらるべき名吟二百餘首を出し、天才歌人の漏叢として斷然斯界に覇を成せる南安烏川村下堀紅葉會を初め、其の他各地なる安曇節文藝同好者より成れる幾多會合の人々が、何等私心の故にあらず、偏へに鄉土愛に立脚せられつゝ、安曇節安曇踊の名を以て成されたる文化運動の業績は之を江湖に傳へ子孫に遺すべく眞に誇るに足るものと信ずる。なほ又斯の道に就き貴重なる指導を賜ひたる諸大家、就中俚謠安曇節の構成に就いては文學博士高野辰之先生、其の三絃伴奏に就いては杵屋佐吉先生、同じく編曲に就いて大村能章先生、原曲の批判に就いて中山晋平先生、振りの批判に就いて藤間靜枝先生（當今の藤蔭靜枝先生）、學童舞踊との比較に就いて土川五郎先生、レコー

ドの考案に就いて和田龍雄先生と市村幸一先生に對し滿腔の敬意と謝意とを捧げるものである。なほ右斯界の泰斗杵屋佐吉師を煩はし三絃伴奏曲を得べく上京の際など、北安曇郡町村長會より家元へ莫大なる後援を賜はりたる事や、又南安曇科町「信濃不二」社長會田血涙先生がその貴重なる誌上に於て、鄕土藝術の花として終始斯道の紹介に力められ居る事等、誠に感激の外無き次第である。

苦心慘憺レコードの吹込み

さて又レコードの吹込みに就いては、線香花火の如き目先きの花やかさを企圖するものと異り、過去未來に亙るべき鄕土文化の一產物として相當出來榮えのものを欲するが故に、人知らぬ辛慘を嘗め盡したのであつた。其の表面的事實のみを述べても、昭和三年の初夏、北安池田町杵屋吉壽女史(三絃)を初め北安松川村古畑準山(琴)同村平林定夫(提琴)兩氏、池田町田中うきゑ(唄)北原愛子(唄)赤羽あさ子(唄)古久清嵩龍(三絃)諸孃を煩はしたゝ事を深謝する。只右日蓄商會吹込は、家元身邊の都合上止むを得ざりしとは云ひ乍ら、原版製作技術の寧ろ不可能なる雨季に入り、商會側の忠告にも耳を假さず遮二無二强行したるが爲め、人力と時と金とを併せ蕩盡したるに止まり遂に成功を收むるに到らなかつた事は是非も無き次第。殊に其の上京前後は豪雨山崩れの爲め列車不通の個所も出

來、横川松井田間であつたか、徒歩聯絡と云ふ大難に當面し、折柄山の中にて其處等に乘物が一つも無く、か弱き女性連をして坂路に喘がしむるの止むを得ざりしなど一行に飛んだ心勞と迷惑とを懸けたること、是れ偏に家元が剛情我慢の然らしめたる所と今なほ忘れられないのである。續いて昭和六年三月ヴイクター會社より淺草市丸女史吹込みを發賣の件、承諾を求められたるも、家元は最初のレコードは是非鄕土人を以て吹込むべく、其の決意は我乍ら絶對に飜すこと能はざるを以て、遺憾乍ら其社に對し直ちに御斷り致し、其の外色々の方面よりの申込み全部拒絶、當時家元の心中を解せざる人々よりは、事理の解らざる唐變木として齒痒ゆがられたる事と思はる。越えて昭和七年十二月再び日蓄商會に於けるコロンビアレコードの吹込みとなりたる次第なるが、此の際は南安曇科町にて日吉家金時(唄)一もとお半(尺八)塚茂登美代子(三絃)武井薫(笛)四氏、松本市にて杵屋五三好女史事築家やす氏(唄、三絃)北安大町にて立花家壽三代氏(唄)等、廣く一市二郡に亙り各々異る立場に置かれた人々が只一つの鄕土愛の爲めに、所謂日本アルプスを宣傳し且つ鄕土の風土民情產業を紹介すべく、完全に一致結束して家元と同道上京の上、何れ劣らぬアルプスの名花、各々畢生の妙技を傾倒しつゝ遂に一大成功を收め得たりしは安曇節發達史上特筆すべき事であつた。右メンバーは大體

豊科町に重心を置いて物色したる關係も有り旁々、南安曇踊會長たる豊科町長三原儀十郎大人を初め同會幹部諸氏の一方ならざる盡力に預りたるは申すまでも無く、又此の事に就いては約二年前より、各方面屢次の申込みに係らず家元に於て其の都度延引熟達主義を採つて動かざるに憂慮せられ、同町酒井南柳宗匠が、吹込み促進の一助として選手の具體的物色にまで自ら進んで吾等の勞苦を分擔せられ、不治の病床に臥してもなほレコード作成の事のみ口にし給へる事や、又經濟界の重鎭として劇職に在らるる藤森下居大人が、鄕土ファンの總名代として進んで吹込み後援會を組織せられたるのみならず、其の際は吹込の一行を追つて上京せられ、在京有力家松尾晴見、田多井四郎治、伊藤信愛諸氏と共に一行を犒はれ、到れり盡せる歡待を與へ給へる事など、以上各位より多大なる貢獻を得たるは江湖に顯著の事實であると同時に、玆に隱れたる安曇節の大黒柱として同町踊會同好者間に親の如く仰慕せらるゝ遊龜廼主人山崎龜市氏及び同夫人、日吉屋主人丸山元三郎氏、續いて花柳界有力者各位の終始渝らざる支援を賜ひつゝあること亦實に肝銘の至りである。なほ又右吹込みに就き家元の方針に贊意を與へられ且つ滿腔の同情と聲援とを寄せられたる南安梓村下角影踊會と、同じく明盛村中萱踊會との選手各位に對しては玆に厚く感謝の意を表するものである。さて回顧すれば南安の首都豊科町へ初めて此

の安曇踊を移植したる開闢の神樣とも申すべきは實に山口鐵幹、曾山環翠、酒井南柳の三宗匠であつた。山口、曾山兩宗匠共に愈々清謳、引續き同好者の指導に盡力せられつゝある事は吾等一同の感謝措く能はざる所である。然るに獨り酒井宗匠のみ不幸物故せられ、前南安曇踊會長岡村政雄大人、前北安曇踊會長戸谷今朝一大人と併せて三英靈が、今日の盛況を目睹し給はざること誠に殘念の次第、筆執る間にも並み〳〵ならず斯道に高配を傾けられたる各位の生前が思ひ出でられ哀悼の情に堪へないのである。

日本アルプス山下名援有り

右昭和七年冬吹込みに於ける立花家壽三代氏の正調安曇節は、安曇節音譜を最も忠實正格に唄へるもの、其の天稟の美聲を以て莊重素朴しかも華麗典雅なる安曇節の節廻しを所謂玉を轉ろばすが如く唄ひ納めたる熟味、口言ふべからず筆記すべからず、凡そ安曇節唄ひ方は之を以て標準とする。又日吉屋金時氏は、安曇踊の最大道場豊科町花柳の王座を占め、安曇節の唄ひ手として多年あらゆる檜舞臺に同士をリードし來れる斯道の元勳で、安曇節の金時か金時の安曇節かと推稱せられ、隨て其の吹込みには個性の表現等眞に津々盡きざるの妙味が織り込まれて居るのである。なほ杵屋五三好女史に到つては固より斯界の名手、特に此の吹込に於ては自身唄ひ手として、のみならず又東都新橋に其の人有りと

知られたる名手小倉美氏と共に正調盤の三絃伴奏と云ふ大役をも引受け、双方とも入神の技を發揮して居る事遖がと首肯されるのである。斯くして南北安曇兩郡より東筑松本市に亘る全郷土の代表名手により吹込まれたる正調及び外、計二種のレコードを江湖の愛好者各位に薦め依つて以て吾が安曇節の唄ひ方を紹介し得る事は家元及び同志の欣快とする所である。

宗匠たちと有志の人々

終りに本書記載事項に就き特に記して萬謝の意を捧げんとするは、南安穂高町上條清文、同町降旗素月、北安陸郷村久保田石村、南安烏川村、黒岩灰六同村青柳三千里各宗匠たちより終始懇篤の助言を賜はりたる事、及び郷土行脚の際各地の有志諸賢より或ひは史蹟に關し或ひは土俗に就き、幾多採訪上の便宜を與へられたる事である。又本書再版に際し、東京澁谷、高田寫眞館主が製版、印刷、製本すべてに熱情的奔走を賜れる事は初版以來の好意でもあり、永久忘れる事は出來ない。

安曇文化の結晶

此の郷土を拓いた吾等祖先の神々が、朝に夕に仰いで以て共の聖業の象徴とも見給ひたるらん穂高見の連峰は、今や國立公園として内外に紹介せられつゝあり。幾千年來此の特殊なる情景のうちに育まれ來りし安曇族文化の結晶たる安曇節、安曇踊も亦將さに天下に傳唱せられんとす。されば神の知ろし召す縁のまに〳〵本書を繙かるゝ吾が儕

しの人々は、共處に山高く水清き郷土「安曇」が産したる朽つる事無き寶玉の多くを心のまゝに採集せられ得るであらう。

皇紀二千五百九十四年
昭和九年晩夏

信州、安曇、有明山の麓、虎杖生ひ茂れる里にて

安曇節同踊家元　**出原處士**

安曇節の唄ひ方

附、樂器の事

本書卷頭に出せる音譜は、安曇節の標準的なる唄ひ方、囃し方を示すものである。乃ち唄は墨書せる所の如く唄ふものとし、藍書せる所は如何なる場合にも通じて用ゐられ得べき間奏で、又朱書せるは杵屋佐吉師の二上リ三絃伴奏符（出原處士洋譜譯、其のズ字を附せるは撥をスクとすべき所）である。申すまでも無く間奏や伴奏は幾樣にも作曲出來べきなれど、必ずや小節の約束に合すべきを必要條件とする。又唄の「出」なるサ――は附けても宜く、或ひは附けずして本文を唄ひ出すも差支無し。終りに樂器の前奏（即ち又間奏でもあるが）其れは幾つ重ねても構はず、要するに次ぎなる歌詞が唄ひ出されるまで繰返すのである。

此の標準的なる唄ひ方の外に、なほ音頭の所々に種々なる變態的の節廻しを用ゆる唄ひ方が有つて、歌詞の意味に準じつゝ莊重、素朴、飄逸、優雅、哀傷等、色々の情調を唄ひ別けるのであるが、就中其の代表的なものとして、音頭の唄ひ出しがずつと低く、又其の終りの下げ方

に非常な特徴を示して居るものがあり、此の唄ひ出しの低きものはサ――は必ず附けずに、即ち直ちに本文から極めてしんみりと唄ひ出すのである。以上數々の變態譜は有れど一般の愛好者殊に初歩の人々には寧ろ必要無く、且つ複雜に亙る嫌ひも有れば本書に於ては之を說かず、只右樣の唄ひ方有る事だけを述べて置く。

茲に記し置きたきは、熟練の音頭取であれば、歌詞の意味の大衆に徹底するやう、語のアクセントを唄ひ別けて欲しい事である、即ち

たけ（竹）と たけ（岳）
はし（橋）と はし（箸）
あひ（間）と あひ（逢ひ）
さく（咲く）と さく（割く）

右の如く語の頭に係る一音だけを柔かなるもの（○）は低く、鋭きもの（△）は高く唄ふ。乃ち斯くして其處に生ずべき音の變化は音譜を以て明示し得る次第であるが複雜に亙るを以て記載致さず、讀者須らく先づ標準音譜に就き熟練の上、自ら工夫せられなば必ず得る所有らん。さて此のアクセントの唄ひ別けは歌詞の意味の徹底、のみならず又音の變化其れ自體により、異りたる情調を出し得る等、其の效果は彼の變態音譜に續くものであるが、安曇節に於ては專ら音頭のうち左の四箇所が其れに該當する。

◎サー白馬七月残りの雪の、間に咲き出す、間に咲き出す花の數

◎サー忘れまいぞや松川泊まり、月の好い頃、月の好い頃蕎麥の頃

◎牧の娘のきりやうに見惚れ、大根わすれて、大根わすれてから戻り

右見惚れの如く○でも△でも何れにても宜ろしきものも稀れには有り。又安曇にては雲

(○)蜘蛛(△)なれど關東又は東京にては此等は反對では無いかと思はれる。が要するに其

の地方にて平素口にする通りで好いのである。以上は熟練者への希望なれば、初學者及び樂器

等は右の區別無く總べて(○)を以て押通して差支無し。卽ち本書揭載の標準音譜は其の方針

により「白馬七月」の如き全部(○)のみなる歌詞を宛て、置いた次第である。

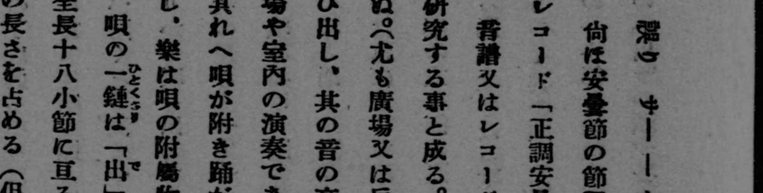
音譜により稽古される人々に對しては特に其の長短記號(就中上の句の部分)に注意せられ

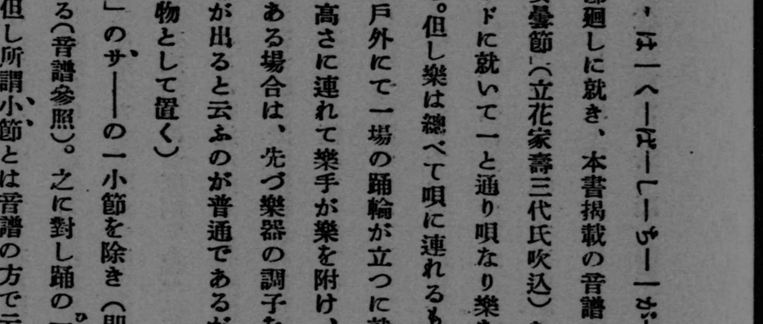
ん事を望む。此の長短記號を無視して只ノツペラ棒に唄ひ、卽ちバイオリンで申せば弓を鎗曳

きのやうに、押す、引く、悉く同じ長さにして行くならば、技術的には單調で容易で有らうけ

れど、其れにては折角の安曇節特有の節奏が成立せず、隨て固有の面白味が無くなつて仕舞ふ

のである。此の比較を左に示す。





尙ほ安曇節の節廻しに就き、本書揭載の音譜のみにて滿足を得られ難き人々は、コロンビア●

レコード「正調安曇節」(立花家喬三代氏吹込)を標準として具體的に稽古せらるべし。

音譜又はレコードに就いて一と通り唄なり樂なりが稽古出來たる上は、其れと踊との關係を

研究する事と成る。但し樂は總べて唄に連れるものとし、專ら唄と踊との關係を研究せねばなら

ぬ。(尤も廣場又は戶外にて一場の踊輪が立つに就いては、原則通り先づ唄ひ手卽ち音頭取が唄

ひ出し、其の音の高さに連れて樂手が樂を附け、續いて皆が踊り出す順序であるが、其れが劇

場や室內の演奏である場合は、先づ樂器の調子を拵らへ、頃合ひの高さにて前奏が始められ、

其れへ唄が附き踊が出ると云ふのが普通であるが、何づれにせよ此處では唄と踊の關係を主と

し、樂は唄の附屬物として置く)

唄の一節は「出」のサ——の一小節を除き(卽ち「出」は附けずとも差支の無いものである)

全長十八小節に亙る(音譜參照)。之に對し踊の一差は少しく短く、唄の三分の二卽ち十二小節

の長さを占める(但し所謂小節とは音譜の方で云ふ事で、踊の方では其れと同じ時間的長さを

單に節と云ふ)。故に若し唄と踊とを同時に始める時は、踊は既に一差を過ぎても唄はまだ一節

の途中であり、隨て愈々唄の一鏈の終りなるコラコイと云ふ所のコイの一小節は、踊の二差目の丁度眞ん中となるのである。尤も右は唄と踊との長さを比較せんが爲めに云ふので、安曇節に於ては唄と踊とは必ず同時に始めると固定したものでは無く、又唄の何ど の邊へ踊の何ど の振りが附くとも決まつては居らない。隨つて唄の何ど の邊から踊を始めても宜ろしく、又踊の何ど の振りから唄を出しても差支無いのが原則である（但し所謂せと合せの場合は後に述べる）。隨て間奏の長さも一定せざること前述の如く、其の間に音頭取が任意の歌詞を考へ出し乍ら次ぎ〳〵と唄ひ掛け、踊も幾差か限り無く連續されて行くのである。

唄と踊との關係は右の如く極めて自由ではあるが、唄の節奏（リズム）と踊の律動とがぴつたり呼吸が合はねばならぬ所に只一つの掟が生れて來る。之を簡單に云へば唄の「出」や各小節の頭は、必ず踊の或る節の頭と吻合すべきである。此の事は實際問題としては、音頭取が既に續きつつある踊へ次ぎなる歌詞を唄ひかけんとする時、最も注意を要するのである。抑も一つの節なるものゝ其の頭は曲でも振りでも總べて力の籠る所。其の尻は力を拔く所である。其れ故、曲の一小節と踊の一節とは、頭と頭、尻と尻とがぴつたり一致せねば呼吸が合はない。隨つて唄の「出」の頭や各小節の頭が、若し踊の節の中程や尻の所へ行くならば、甚だちぐはぐな感じ

が起る。就中間違ひ乍ら往々氣附かずに居るのは、唄が踊の或る節の丁度眞ん中で唄ひ出され、其のまゝ進行して居る場合である。其の際、若し踊を單なる機械的運動と見るならば、タンラン、クンラン、をあべこべにランタン、ラン、としても、全然合はぬ事は無いやうなものの、何にせよ頭の出るべき所へ尻が出、尻の出るべき所へ頭が出るので、力の拔き差しが反對となり呼吸が合はず、踊手自身も見物も妙なむづ痒いやうな不快を感じて來るのである。是れ殊に唄ひ出しは必ず踊の節の頭とぴつたり一致させねばならぬ所以である。右と同じ理由で唄ひ手即ち音頭取は間奏に對しても亦踊に對すると全然同一の注意を拂ふべきで、間奏の小節の途中などで唄ひ出せば踊手と共に樂手の方でもまごつくのである。尤も音頭取としては樂よりも踊を目標として唄ふべきものであるは勿論であるから、踊と呼吸を合はせんが爲めには樂とは時として喰ひ違つても止むを得ず、其の場合は樂は改めて唄に迎合すべきである。

なほ斷つて置きたい事は、既に一同で返しまで歌ひ終つた一歌詞の下の句だけを（上の句は除いて）又繰返して音頭取が唄ふ場合の有る事である（一同も又之に對して其の返しを附けるは勿論なり）。此れは音頭取が次ぎなる別の歌詞を直ぐに考へ出せぬ時の間塞ぎか、又は二度も繰返し度い程其の文句に特別の愛着を有つて居る場合である。斯かる場合の下の句の唄ひ出し

も、矢張り踊の或る節の頭と吻合すべきこと常の如し。但し斯く下の句だけ唄ひ出す事は業手無き場合は至極面白きも、業手有る時は、其れには多少喜ばれぬ傾向がある。何れにせよ一度踊が始まりたる上は、業は常に唄に伴れるやう心懸け、唄の調子の高さ、踊の速度等其の場の呼吸は專ら音頭取其の人の統制に任ずるものとす。

次ぎに業器は普通用ひられる物のうち、尺八、バイオリン、胡弓等音尾を曳くものは本譜即ち唄と同じき音譜により、又ピアノ、マンドリン、三味線等の彈奏器は、巻頭の音譜に併記せる杵屋佐吉師伴奏符を用ゆれば特に云ふに云はれぬ此の俚謡の妙味が發揮され得るのである。

三味線及び胡弓は絃の切れ易きもの故、他の業器との合奏には自ら一オクターブ低く調子を拵へ置かざるを得ぬ。又三味線やマンドリンは野外よりは屋内の方が餘韻が出て妙味有り。

さて胡弓は新來のバイオリン等に壓倒されて非常に廢れて來た樂器である。彼の大震災後は特に著しく、東都に於ては殆ど製作者が求められぬ程になつて仕舞つた。元來其の音量はバイオリンに比して稍や劣るが如きも特に其の音色の點に到つては吾等日本人には實に云ふべからざる懐し味の有るものである。又バイオリンが手を以て左肩に支へられ、頸部や胸部の自由運動を制限し、氣分や呼吸及び血行機能に影響を與ふるは見逃がすべからざる點であるが、之に

反して胡弓は演奏者の全身は殆ど自由で、實に氣持ちの朗かな樂器である。其の製作法、關東では往々第三の絃を二筋かけて其の音量を大ならしめて居る。其れは昔は第四の絃の有りたる事を物語るものらしいが、今日としては勿論三味線の如く總計三筋で敢て不足無く、隨てバイオリン等の調子と異り、三味線で謂ふ所の二上り、三下りが主として用ひられる。然かし、昔其れが四絃であつた頃は、全然バイオリンの調子と同樣であつたものと察せられる。と云ふのは、此の器は、其の形の似たる所から、三味線より變化した或ひは三味線と系統を一にするものとばかり考へられて居るが事實は然らず、田邊尚雄先生に據れば、アラビアの弓樂器レバブがモハメット帝國の西進と共に歐洲に入り、ポルトガルでは其れがラベカとなつた。此等は何れも四絃で、今日のヴアイオリンも此の系統から生れたものである。又ラベカを携へたポルトガル人の本邦渡來と共に、長崎あたりで此のラベカに模して作つたものが即ち胡弓である。其の容貌が三味線の妹のやうに見えるのは、製作材料や製作者が共通しで東洋的であつたからだと云ふのである。して見ると胡弓が、支那傳來の蛇皮線即ち三味線と異り、四絃であつた事も首肯され、同時に其れとバイオリンとは腹違ひの姉と妹、又三味線と其れとは同腹の姉妹と云ふやうな事に爲る。兎に角此の胡弓は東洋の血肉が加はつて居る謂はゞ混血兒であり、且つ數

世紀も昔に歸化したゞけあつて、吾等日本人には懐しみが深いと云へやう。特に其の音色は素朴なもの、吾等は此の樂器の盛行を望むのである。

終りに普通の樂器と同視するは如何なれど、昔用ひられた彼の拍板なども手拍子の音を賑はすものとして捨て難く、又踊子の履物や腰などに小鈴を附ける事も面白い趣向である。

安曇節の踊り方（安曇踊）

安曇踊は鄕土舞踊に、其の類最も多き圓舞に屬し、其して踊り手は一差（踊の一くさり）毎に輪（踊手の立並んだ圓線）の上にて右へ數歩づゝ移動する、所謂右廻りの踊である。さて其の振りは輪の中心へ進み入り、共して退き去るまでの六節と、此れに續いて、輪の線上に於て旋廻（自轉）し乍ら兩手を翳し踴躍する六節と、併せて十二節を以て一差とし、之を繰返すのである。右一節の時間の長さは唄の一小節と全く相同じく、且つ踊の一節と唄の一小節とは首尾吻合して全く同時に演ぜられねばならぬ事は唄ひ方の部に於て說きたるが如し。又踊の各節の振りには其れ〳〵に指す手引く手備はりて其の間聊かも無理の動作無きが故に次ぎ〳〵と滑かに演ぜらるべき事は勿論である。隨て若し動作に無理を感ずること有りとすれば、其れは何處かに振りを過つて居る所が有ると氣附かねばならぬのである。

今、振りの說明に便せんが爲、各節の前半に對つて順次一つ宛番號を附ける。但し先なる半差の六節も後に續く半差の六節も共に其の四つ目の一節には、前半に一つの番號を附けるのみ

ならず後半にも亦一つの番號を附ける。其は振りの形に鑑み特に其處だけ小刻みに番號を附するまでにて、時間の長さに於ては此等の節と他の節と別に相違は無いのである。以上を表示すれば

〔一〕＝〔二〕＝〔三〕＝〔四〕〔五〕〔六〕＝〔七〕＝…（前半差）

〔八〕＝〔九〕＝〔十〕＝〔十一〕〔十二〕＝〔十三〕＝〔十四〕＝…（後半差）

右の次第なれば一つの番號は踊の其の一節を代表すると見て大體差支無く、隨てたとへば〔一〕＝を呼ぶに第一番節、〔九〕＝を呼ぶに第九番節と云ふ。但し〔四〕〔五〕及び〔十一〕〔十二〕は二つの番號相寄りて漸く一節を表はし、隨て其の一つの番號にては半節を表はすに過ぎず。よつて〔四〕を呼ぶに第四番半節、〔十二〕を呼ぶに第十二番半節など云ふのである。斯くして此の踊の一差は時間的には十二節なるも、稽古上の番號の關係にて第十四番節まで節の名が附けられてあるのである。

さて又此の踊を稽古の際常例として、各半節毎に呼ぶ番號と、なほ懸聲なるものを列擧すれば左の如し。但し此等の聲は總べて各半節の初頭に懸かるものとす。

〔一〕ナヨン　〔二〕チョン　〔三〕引イテ　〔四〕〔五〕　〔六〕チョン　〔七〕ツナイデ

〔八〕ハア　〔九〕チョン　〔十〕ハア　〔十一〕〔十二〕　〔十三〕チョン　〔十四〕ツナイデ

なほ直接稽古に際しては、踊の一節をトン、トン、トツ、ンツの四つの拍子に分解して（隨て半節は二つの拍子に當る）細密なる振りの説明を爲す場合有りとす。

初めの部分即ち新しく出て來た姿（拵へた身振り）を出來と名附け、同じく終りの部分即ち其左に順次各節の振りを說明するに就ては、各半節毎に項を改むる事とし、且つ其等各半節の處に出來た一つの姿を流しやりて次ぎの出來に移らしめんとする所作をうつりと名附く。右の故に踊の各半節は出來とうつりとより成り、隨て一節は出來、うつり、出來、うつりの四部を有す。其の四部が前述のトン、トン、トツ、ンツ、の四つの拍子に當ると知るべし。なほ其等各振りの實際に就ては宜しく卷頭に出せる圖解及び足取表を參照せられよ。但し圖解は凡そ各半節の出來の部分を示し、然らざるものは特にうつりと附記したり。又足取表には右足を藍色左足を白色とし、且つ每度新しく踏み附くる足の位置と方向とを示すものとす。

第一番節

〔一〕【出來】踊手は輪の中心に對つて右足を一步踏み込み同時にお手を輕く一つ拍つ。

▲右足を地に踏み附けるとお手が鳴るとは同時である。稽古の場合ならば此處て【一】と番號を呼ぶ。但し此等番號や懸聲は稽古の場合に限る事で本格の踊には此等の事無きは勿論である。▲お手を拍つ事は此の後も度び〳〵有れど拍つ手の高さは例外の場合を除き常に吾が心窩のあたりとす。又何れの節を問はずお手を拍つには必ず左の掌を右の四本の指（拇指を除く）にて拍つのである。彼の神前にての柏手も亦然り。即ち柏手は一旦揃へて合せたる兩手を、前記の形まで滑らせ置きて謹で二回拍ち、拍ち終れば又滑らせて初め揃へたる位地まで戻すのである。決して兩の掌と掌にて假染めに拍つものと思ふべからず。▲なほ踊手の顏は【一】より【三】まで常に輪の中心に向ひ、踊り友だち誰彼の全部と相見てほゝ笑みかはすの表情有るべし。▲因みに斯く右足から踏み出す事は寧ろ日本國來の民族的習慣と思はれるが、能樂の足拍子などは反對に左足から踏むのである。

【うつり】 體の重心を全く右足に移すと共に拍ちたるお手は輕く離解し、且つ左足の踵は自然に上がるべし。

▲拍ちたるお手を輕く離開して置くは即ち次ぎなる出來（チョン）へ安らかに移らんが爲めである。

【出來】 殘りたる左足を右足の近くへ寄せ來り、其の足先をチョンを輕く地に下ろすと同時に、兩手を左に拂ひ、即ち右手は左股の前の邊に達するも、左手は遙かに吾が左後下方に及ぶ。

▲左足先がチョンと地に觸れると、兩手を左後方に拂ふとは同時にして、此の時チョンと醫擧する。又此の後にある何れのチョンも常に必ず足先が輕く地に觸れ。時の醫擧なりと知るべし。但し節九番節のチョンの振りだけは例外である。▲此のチョンの時左足は右足の直ぐ左に來り、踵は引續き上がり居るが故に、左膝自ら屈折し、其の膝頭は右足よりも前方に出る。▲又右手の掌は手を拍ちたる後に引續き左に向ひ、又背ろに拂はれたる左手の掌はお尻の左後方に在りて自然の結果として後且つ右に向ふ。▲因みに此の振りを、右足を踏み出し居る所にて右手を前に出すものと見れば、普通の自然的動作と相反し、舞樂などの舞ひ方に類して、所謂ナンバ又はナンバンであると云はれるかなれど、左膝頭が右よりも前方に出て來て居るので、動作として毫も不自然を感ぜざるのみならず頗る優美輕妙の振りである。

【うつり】 左足輕く地を離れると共に左後方に拂ひたる兩手を又前方に返す。

第二番節

（此の節は第一番節と均齊を保ち、左右相異るのみ、即ち左の如し）

【二】【出來】 今度は左足を輪の中心に向つて踏込み、同時にお手を拍つ。

▲左兄を踏むとお手が鳴るとは同時で此の際【二】と呼ぶ。

【うつり】 體重左足に移ると共に拍ちたるお手を輕く離開し且つ殘りたる右足の踵自ら上がる。

チョン【出來】 殘りたる右足を左足の近くへ寄せ來り、其の足先を地に下ろすと同時に、兩手を右へ拂ひ、左手は右股の前に達するも右手は遙か右後下方に到る。

【うつり】 右足地を離れると共に右後方のお手を又前方に返す。

▲第一番節と第二番節とは左右均齊の所作であるが、此の〔二〕チョンのうつりだけは次ぎなる出來に導くべく手足の振りに聊か注意を要す。次ぎを見るべし。

第三番節

〔三〕【出來】 右足を左足の前方に出し蹈み附けると同時に、兩手を顏の前より少しく左寄りまで上げ來つて輕く拍つ。

▲右足を蹈み附けると手を拍つとは同時にして此の際〔三〕と呼ぶ。▲此の出來を生まんが爲め前のうつりで右足を前方に移動する其の方法は、左足を避けるやうにして遠廻りの弧線を描き乍ら優しく出す。又右下方に拂ひ置きたる兩手を左上方まで持ち來すに就ても、直線的なる徑路を

取らず、大きなものを抱へ上げるやうに左右兩側にて大なる弧線を描かしむべし。此の事は〔一〕及び〔二〕の出來にて手を拍たんとして豫め兩手を運び上ぐる時（其の前の振りからのうつり）にも同樣であるが、〔三〕へのうつりは兩手を運ぶ徑路特に大なるが故に殊更に此の心得無ければ、振りは單なる體操的動作と化し去るのである。

【うつり】 體重を右足に移すと共に拍ちたるお手を離開し、同時に左足の踵上がる。

▲お手は例により左掌を右四本の指にて拍ち、其れがうつりにて離開されたる事なれば、自然の結果として左手は右手よりやゝ高く位置すべきである。▲此の振りにて踊輪は最も縮小し體て踊手全部は密集團として顏はれるのである。

引イテ【出來】 兩足はなほ〔三〕の位地にて、體重を左足に返し體て其の踵又地に附くと同時に兩手を左上方より引いて遙かの右後下方に拂ふ。

▲體重左足に返り其の踵地に附く時は其の膝もやゝ屈し（お尻も聊か落し氣味となる）體てなほ前方に在る右足は少し輕くなるべし。▲兩手を引拂ふ時は上げる時と異りて弧線を描かず直線にする。此れより後の何れの振●に於ても、總て兩手は、上げる時は弧線、下げる時は直線とす。

▲右後下方に流したる手は、左は右股の附け根の邊まで届き、右は遙かに右後下方に送る。▲此の引イテの出來にて今まで輪の中心に進み入りたる踊手は一樣に退出を始めんとし 先つ體勢を少し落しつゝ兩手を引拂ひたるものとす。此の時引イテ（又は退イテ）と讀解する。

【うつり】 今引拂ひたる兩手の餘勢を利用しつゝ、左足を軸とし兩手と右足とを働かして身體を約半廻り右後方に廻らしむ。

▲此れにて輪の中心に背を向け退出を始めたのである。

第四番半節

(四) 【出來】 移動し來りたる右足を左足の斜め外方（輪の中心に對して外方と云ふ）に踏み附けると同時に胸の前にてお手を拍つ。

▲お手の拍ち方は此の時に限り常と異り、卽ち其の位地も少しく高くして乳の高さにて拍ち、其の時（四）と呼ぶ。又拍つ形も、掌を水平とし、左は上向き右は下向きなり。右四指にて左掌を拍つ事は勿論常の如し。▲體重左足に殘る。▲此の時踏む右足の位置は足取表に示すが如く〔一〕〔二〕と進み入りたる線上に在らず、隨て進入線と退出線とは〔三〕の足の位置を頂點として角を成すものとす。

【うつり】 拍ちたるお手を離開し乍ら、右手は下向き水平のまゝ遠く右の方へ出し、左手も上向き水平のまゝ右手を追はしめ、同時に體重全く右足にかゝり殘りたる左足の踵上がる。

▲右手を追ふ左手の指先は右手の肘の邊りに向はしむべし。▲此のうつりの手附きは踊手を輪の內より外へ引き出す心持ちである。隨て右手は成るべく遠く右の方へ出すを良しとす。後述（五）のうつり亦然り。

第五番半節

(五) 【出來】 殘りたる左足を右足の前（輪の中心に對しては斜め外の方）に進め踏み附けると同時に又胸の前にてお手を拍つ。

▲同時に（五）と呼ぶ。▲此の振りは（四）の出來と足が左右異るのみ。▲此の出來にて踏む左足は輪より外にまで出る程に心懸けるべく、少くとも輪の線には達せねばならぬ。其の爲には以下の事を知り置く必要有り。卽ち彼の〔一〕〔二〕〔三〕と輪の中心へ進み入る長さに比すれば〔三〕の所から（四）（五）と斜めに出て來る此の長さの方が聊か長い事は幾何學的に證明し得る。おまけに彼れは三足であるのを、此れは二足で輪まで達せねばならぬ。以上の理由で此の斜めに出て來る際は餘程コンパスを開かねばならぬのである。彼の初步の人々が踊つて居る時には、踊輪が何時とは無しに小さくなつて行くのは（四）（五）と特に大足に出て來るべき事を知らず〔一〕〔二〕〔三〕の時と同じく小足に運んで居る結果なのである。右くれ〴〵も念頭に置き（四）（五）は特に大足に出て來る事なり。

【うつり】 お手を水平に右外方へ出すと同時に體重左足にかゝり殘りたる右足の踵上がる。

▲其の振り（四）のうつりと足が左右異るのみ、手は全く同じ。

第六番節

（此の節は第一番節と全く同じ振りで、只體の方向が異るのみ、即ち左の如し）

【六】【出來】 右足を左足の先に進めて輪の線を蹈み乍らお手を拍つ。

▲同時に「六」と呼ぶ。▲輪の線上にては中心に對って右の方を先と云ひ、左の方を後と云ふ。先と後は踊手が順次移動し行く方向の意で、後は此れと反對なり。▲此れにて兩足とも輪の線上に在り體は輪の中心に對しては全く横向き（右向き）となったのである。

【うつり】 體重を右足に移すと共にお手を離開し左足の踵上がる。

【チョン】【出來】 殘りたる左足を右足の近くへ寄せ、其の足先を地に下ろすと同時に右手は左股の前に止むるも左手は遙かの左後方に拂ふ。

其の時チョンの懸け聲。

【うつり】 左足を浮かすと同時に左後方のお手を前の方に戻す。

第七番節

【七】【出來】 左足を右足の先へすらりと蹈出すと共に兩手を大なる八の字を書くが如くし乍ら左右兩側の後下方へ拂ふ。

▲左足を蹈出すと八字を書くとは同時にして其の時【七】と呼ぶ。▲左右後下方に拂ひたる兩の掌は自ら後向きなるべし。▲左足を蹈出しても體重はなほ右足に殘るのみならず、右足の膝を少しく折りて左足の成る可くすらりと前方へ伸び出るやうにする。

【うつり】 八字を書いた兩手は固定せず流動的に、且つ左右兩側で大なる弧を描き乍ら胸の前方へ上げ來る。

▲體重なほ右足に在り。▲兩手が上がり來る時掌は自然にやゝ外向き。

ツナイデ【出來】 胸の前に上げて來た兩手のうち、右手は前方へ伸び、左手は少しく屈んで右手の腕の左の邊に達し（接觸せず）改めて兩手の位置を確定する。

▲兩手の掌は前のうつりの引續きとして此の時なほ外向き且つ今や前方に向ふ。隨て踊手は吾が手の甲を見ゐを得れども掌面を見ず。▲左右兩手の位置を確と定め乍らツナイデと聲擧するゝ即ち皆々揃つて右手を伸ばした刹那踊手は全部聲がつた一つの輪として顫はれるのである。▲若し

前の人が近か過ぎて接觸し合ふ恐れ有る時は右手は其の人の外の方へ出すべし。

【うつり】 兩手をくるりと飜へし兩掌を內方へ向ひ合はしめ、同時に體重を左足を移し右足の踵上がる。

▲兩手の位置は出來の時と變化無し。▲此の振りは右手を我が前なる友の背の右の邊（輪で云へば外側）にあてるが如くし、友も我も相促しつゝ左方即ち輪の內側へ轉向せんとするの表情である但し表情に重きを置くべく、實際に友に手は觸るべからず、其處に象徵の奧ゆかしさを味ひ得るのである。▲此れまでが踊の一差の半分である。

第八番節

〔八〕【出來】 右足を左足の先に進め、其の足先が輪の中心よりもなほ斜め左に向く程にして踏附け（隨て顏も身體も同じ方向に對ふこと足取表の矢印の如し）同時に兩手を遙かの左右後下方へ拂ふ。

▲右足を踏み附けるとお手を左右後下方へ拂ふとは同時にして其の際〔八〕と呼ぶ。▲體重は右足にかゝり且つ右膝少しく屈して左足をすらりと伸ばす。▲兩手はお尻の左右兩方に送られ、即ち左手は輪の斜め外、右手は斜め內ならざるべからず。足取表で云へば矢印に對し直角に兩手が

出るのである。若し兩手を斯くの如く輪の內外に出さずして輪の線上に伸ばしたりなどする時は、隣りの人の手とかち合ふ事あるべし。必ず注意を要す。なほ此の時、掌は我が後に向ふものとす。▲腰より上は前屈みとならぬやう、顏及び目も特に斜めの空を仰ぐべし。此の時なほ頭部及び上體をやゝ右（輪の內側）に傾くる氣味とすれば特に優しさを加へ得る。

【うつり】 左右後下方へ拂ひたる兩手は固定せず引續き左右に大なる弧を描きつゝ上がり行く。

▲手の上がり行く時兩掌は半ば外向き。▲體重はなほ右足に在り。

〔ハア〕【出來】 左手は目より額の高さにて、顏より一尺程離れ、顏の正面より左寄りへ、又右手は鼻口の高さにて、顏より七八寸離れ、顏の正面より聊か右寄りへ上げ來り、其處にて兩手の位地を確かと定む。兩手の距離は約一尺とす。

▲兩手の位置を確定し乍らハアと聲擧する。なほ一尺とか七八寸とか云ふのは成年男子の事であつて、小柄なる女子や少年は其れに應じて短縮する。但し興醒なるに到れば、此の兩手の高さなどは隨分則を踰ゆるも振りさへ面白ければ敢て差支無きものとす。▲左手高く右手低し。卽ち右手の指先が左手ノ掌の下部と同じ位の高さにする。▲兩掌は自然に我が前方に向ふ。隨て踊手は我が手の甲を見得るも掌面を見ず。▲體重なほ右足に在り。

【うつり】 兩手を內側へくるりと翻へして兩掌相對せしめると共に體重を左足に移し右足の踵上がる。

▲體重左足に移り右足の膝伸びるにより全身は少しく丈高くなる。▲此のハアの半節にては出來とうつりを通じて左手は右手より少しく高き故、左手の肘は右手より稍や伸びる。▲手首や肘等は總て無理の無きやうに成る可く自然らしさを保つべし。手の指等も自然に伸し置く。▲顏は引續き斜めの空に向ひ、且つ目も兩手の間より半空を仰ぐものとす。此の時も頸及び上體等な稍や右（輪の內）に傾け居れば表情に優しさを加ふ。▲抑も此の半節は高くして聖なるもの、卽ち神又は山岳等への讃仰恭慢を象徵す。但し其の際、顏を上げずして目のみな高きに注ぐ時は不自然なる尖り目となり、折角のきりやうを臺無しにする。▲要するに最も困難にして又最も美しきは此の邊の振りである。

第九番節

【九】【出來】 兩手を右後下方に拂ひ下ろすと共に體重また右足に返り其の踵地に附く。

▲此の時【九】と呼ぶ。▲兩手は弧を描かず直線に拂ひ下ろす。其の際右手先だち左手之を追ふべし、且つ後下方に下ろしたる後も右手は左手よりも先の距離に達す。▲右膝少しく屈して體重

を受け、左足は輕くなる。▲要するに此の出來は第三番飾引イテの出來に似たり。只左右兩足が其の位地を異にして居る。

【うつり】 出來にて右後下方に拂ひたるお手の餘勢を利用しつゝ、右足を軸とし左足と兩手とを働かせて體を右へ約半廻りせしめる。

▲此れにて踊手は又前の如く輪の先の方へ向き返ったのである。▲此のうつりでは左足はなほ移動しつゝあり。其のきまつた所が次ぎの出來である。

チョン 【出來】 移動して來た左足にて輪の線上なる右足の先を蹈みつゝお手を拍つ。

▲同時にチョンの態勢。但し此の時のチョンに限り足先だけが地に觸れると云ふにあらず卽ち左足にて完全に地を蹈み、且つ其れに體重かゝり、右足の踵は上がるのである。又他の場合のチョンと異り此の時はお手を拍つのである。

【うつり】 出來にて拍ちたる兩手を强く輪の外方（右）へ放かし出し其の餘勢と共に體をも其の方へ轉向せしめる。

▲體重續いて左足に在り。然り乍ら出來より引つゞき爪先立ちとなり居る右足と、體重をかけ居る左足とは何れも共に體を外方へ振り向けんとするが爲には其の場所に在り乍らも相當の自己廻轉を免れず。卽も足の自轉は此の外の振りにもぼつ〳〵見ゆれど一々細說に及ばず、此の一例な

以て總てを會得され度し。▲此の振りにて踵手は全部輪の中心に背を向け、全く外向きとなれり。

第十番節

（此の節に第八節と均齊を保ち、內外左右が異るのみ、左の如し）

〔十〕【出來】前のうつりにて輪の外へ強く放かしたる兩手を左右後下方へ十分に拂ひ下げる其の餘勢と共に體を輪の外（輪の中心に反對）のみならず尙ほ斜め右の方（輪の線で云へば後の方）へ向く程にまで廻轉せしめ（足取表の矢印を見よ）、體重を左足にかけ其の膝やゝ屈み、隨て右足は輕くすらりと蹈み伸ばし、顏は其の方向にて斜めの空を仰ぐ。

▲頭と上體とは稍や左、卽ち輪の外へ傾けて優しさを添へる。▲兩手を左右後下方へ拂ふと共に〔十〕と呼ぶべく、又其の時兩手は必ず輪の斜め內と外とへ出す事。

【うつり】左右後下方の兩手は兩側で大なる弧を描き乍ら上がり行く。兩掌は半ば外向き、體重なほ左足。

〔ハア〕【出來】前のうつりにて上げ來れるお手は右手高く左手低く、共に顏の前方の左右にて改めて其の位地を定める。

▲兩手の位置を定め乍らハアの聲發。▲兩掌は我が前方に向き、體重なほ左足。▲兩手の位置、顏の表情、目の附け處、頭の傾け方、總て〔八〕ハアの出來と均齊を保ち、只手足の左右、輪の內外等全部相反するのみ。彼此參照して其の振りの詳細を會得すべし。

【うつり】兩手をくるりと內飜して掌面相對せしむると共に體重を右足に移し左足の踵上がる。

▲兩掌相對するとは云へ、右手高く左手低く且つ約一尺の距離あること申すまでも無し。〔八〕ハアのうつりを參照の事。

第十一番半節

（此の半節は第九番の同半節と均齊て左右內外相異るのみ、左の如し）

〔十一〕【出來】兩手を左後下方に拂ひ下ろすと共に體重左足に返り其の膝少しく屈して踵地に附く。

▲同時に〔十一〕と呼ぶ。▲拂ひ下ろす手は直線を辿り且つ左手先だち右手之を追ふ。

【うつり】出來にて拂ひたるお手の餘勢と右足とを働かせつゝ體を左に廻らしめ、再び輪の先の方へ向き直る。

第十二番半節

【十二】【出來】働いて來た右足を左足の先に蹈附け同時にお手を拍つ。

▲其の際（十二）と呼ぶ。▲體重は左足に在り。

【うつり】拍ちたるお手を輕く右方へ拂ふ。體重矢張り左足に在り。

▲兩手を右方へ拂ふ形は凡そ第九番節チョンのうつり又は（四）や（五）のうつりに準ずるも、其の目的は只身體の安定に關する調節に在りとす。▲以上【八】より此の邊に至るまでは、蹈手は殆と同じ場所に在り乍ら、先づ左に旋廻し、續いて右に旋廻し、終りに又左に旋廻して漸く輪の線に返り、其の間兩手を屈げ又之を拂ひ下ろすこと內外二回なり。斯くの如きは振りとして蹈分大きなものと云はねばならぬ。抑も身體が斯く居所にて小廻り（輪を辿つて移動し行くを大廻りと云ひ、其れを地球が太陽に對するの公轉に比すれば、蹈手が自身の軸にて旋廻する小廻りは地球の自轉の如きもの）をする事は云ふまでも無く昂奮離我の表現であり、又普通の蹈に反して兩手を比較的高く上げる事も憧憬歸依の象徵なればこそである。たとへば琉球などにても男の蹈は手を肩以上に上げざれど、女は感情的なるものとして此の制限無しと云はれ又內地にても萬歲を唱和する時など必ず兩手を高く上げる事の如き、宜しく參考すべきである。

第十三番節

（此の節は其の振り第六番節と殆と同じ、左の如し）

【十三】【出來】先に出て居る右足を其の場所のまゝ今一度蹈み乍らお手を拍つ。

▲同時に【十三】と呼ぶ。▲體重なほ左足に在り。▲此の出來を彼の【六】の出來に比較すれば、彼れは右足を新しく蹈出したるも、此れは蹈出しある右足を其處にて一度蹈むの差である。

【うつり】體重を先に在る右足に移し乍ら拍ちたるお手を離開し左足の踵自ら上がる。

チョン【出來】殘りたる左足を右足の近くへ寄せ來り其の足先を輕く下ろし、同時に兩手を左後下方に拂ふ。

▲左足先を地に下ろす時チョン。

【うつり】左足を浮かすと同時に左後方のお手を前方に戻す。

第十四番節

（此の節の振りは全く第七番節に同じ、左の如し）

【十四】【出來】左足を右足の先にすらりと蹈出すと共に兩手は大なる八字を描き乍ら左右後下方に拂ふ。

▲同時に【十四】と呼ぶ。▲體重なほ右足に在り。

【うつり】兩手は左右にて大なる弧を描き乍ら胸の前に上がり來る。

▲體重なほ未だ右足に在り。

ツナイデ【出來】胸の前方に來たお手の、右のは伸び左のは少し屈み、兩掌は前及び半ば外方へ向ひつゝ位置を定む。

▲位置を確定し乍らツナイデと懸聲。▲前に居る踊手接近せる時は右手は其の外方へ出すやうにする。

【うつり】兩手をくるりと內翻して掌面相對せしむると同時に體重を左足に移し右足の踵上がる。

▲兩掌面相對すとは云へ右手は伸び左手は屈み、隨て左掌は右腕の邊に向ふ事。▲此れにて踊の一差を終りたれば又「一」に戻り（卽ち又右足より輪の中へ踊み込みつゝ）幾回にても繰返して踊る。

なほ此の踊は、其の始め方や其の他に就き、別に知り置かねばならぬ事少なからず、次ぎを看る可し。

安曇踊の始め方（せと合せ）

其の他注意すべき事ども

此の踊の場所としては野外、道の辻、お宮やお寺、公會堂又は個人邸宅の廣庭等最も望む所であるが屋內にても至極結構に踊り得る。殊に劇場の如く舞臺と觀客席と備はりあれば尙更ら申し分無し。以上何れの踊り場を問はず其の始め方、お手を三つ拍つを相圖に（實は此れは三つ拍つて四つ目の一つを拍たずに置くので其の時間の長さは四つ拍つに同じく、且つ其の時間は唄の一小節卽ち踊の一節と同じ長さである）唄と踊との第一節が同時に始まると云ふ行り方でも敢て差支無いが、安曇踊には別にせと合せと云ふ固有の始め方も有るのである。特に秩序を必要とする野外の大會や、劇場の晴れの踊などに於ける選手の出端には之が最も必要である。

以下順次に此等の事を說明する。

先づ唄ひ出す者が有り踊り出す者が有る。其して唄ふ人が矢張り唄ひ乍ら踊る、是れ當然の原則なれど、多數の踊手が集まつた場合は勢ひ專任の音頭取が必要となつて來る。今專任の音

頭取が有つて踊を始めやうとする場合を考へるに、先づ音頭取が唄ひ出し、續いて踊手が段々出て來れば、兎に角踊の輪に成り得るのであるが、成る可くは始から終まで秩序整然と進行させ度いので、其の爲め色々の習慣律が出來て居る。進行法、せと合せ、輪を八重にする事、踊を休ませる事などが其れで、就中せと合せが最も重要の事である。

◎進行法　今や音頭取が或る地點に立つて數名の樂手に圍まれ乍ら唄ひ出したのである。「寄れや寄つて來い安曇の踊田から畑から野山から」續いて又「安曇踊と三日月樣は次第〳〵に圓くなる」「槍と白馬あの峰續き踊や續けや輪の形に」等々、其れに伴れて踊手が其の周圍に輪を作るべく其處まで行かうとするのであるが、見物衆が澤山で道が開かない。其んな時には誰でも一人が先達となり外のものが其れに續くか、又は各人個々別々に、此の進行法の振りで踊り乍ら又唄の返しも附け乍ら見物の人垣を穿つて踊場へ侵入して行くのである。斯う云ふ連中が彼方からも此方からも出て來ると、踊るつもりのものは其の邊に居殘つて同じく此の振りをはじめ、又只の見物は氣を呑まれて道を開き乍ら後退するので、其處に自然と踊の廣場が打開されるのである。又踊手が音頭取の周圍へ寄つては見たが尙ほ其の踊り場所がうまく無いと思ふ時は、音頭取の方針に任かせ、別の場所まで唄と此の振りを續け乍ら引越しをする事もある。

斯くして相當の踊手を適當の場所に寄つて來させ、本式の踊に轉ずるまでの間行はれて居る振りが卽ち此の進行法であつて、畢竟するに其れは簡單な振りで音頭取の唄に合せて踊り乍ら適當な時期と適當な場所の定まるまでねつて行く方法である。隨て場合によつては此の方法で町内や部落中をねり廻り（所謂道行き）踊手や見物を誘ひ出す事も出來るのみならず、彼の劇場などで踊手が花道から舞臺へせり出して行くのも亦之れである。

さて此の進行法と云ふのは決して別な振りが有るわけでは無く、前述の〔一〕チョン〔二〕チョンを無限に繰返しつゝ、先達の後に續くなり又は自分自ら目指す場所へねつて行くなりすれば其れで好いのである。其處で愈々踊場に達した上は、斯うして集まつて來た踊手全部が一つの輪と爲り、なほ引續いて〔一〕チョン〔二〕チョンを繰返しつゝ右廻りに廻つて居る、其れが本式の踊の〔一〕チョン〔二〕チョンと異る所は、輪の中心へ蹈み入るにあらずして中心を軸として輪の線上を右へ〳〵と廻る事、及び其の〔一〕チョン〔二〕チョンは單に音頭取の唄の節奏に合へば好いので甲の踊手が〔一〕であるとか又はチョンである時に乙は〔二〕であるとかチョンであるとかでも決して差支無い事（但し特に劇場での出端などには踊手は「出」のサ——が唄ひ出されたら開始の合圖と心得、續いて文句の第一小節「寄れや寄つて」で〔一〕チョン、第二小

節「來い――あゞ」で〔二〕チョンと云ふやうに、右の時は右、左の時は左と、全員の右左が揃ふやうに徹底的に定めて置くも宜ろしく）なほ又進行法の〔一〕チョン〔二〕チョンは無限に繰返されて居て〔三〕に移らない事など、此等が本格踊と異る所である。其處で此の〔一〕チョン〔二〕チョンが遂に〔三〕に移り、隨て單なる進行法が愈々本格の踊に轉ずる方法、其れが次ぎに說明するせと合せである。

◎せと合せ　前述の如く〔一〕チョン〔二〕チョンを繰返しつゝ澤山の踊手が音頭取の唄の節奏に合せて輪に爲つて廻つて居る。舞臺上演の如き特別の場合の外、各人の振りの右左などは此の際必ずしも一致しては居ない、〔一〕も〔二〕もチョンも各人區々であるが只其れが唄の節奏に合つて居る事に於ては全部不思議に揃つて居る。さて節奏が熟し氣合ひが乘つた所で、之を愈々本格の踊にするには音頭取が「音頭取りましよ仰せとあれば西の山まで參くほど」と唄ふので、此の歌詞こそは即ち進行法で集まつて來て居る踊手の大群を忽然として本格踊に一轉せしめる呪文の如きものである。此の「サ――音頭取りましよ」の唄が出始めたならば、踊手はなほ進行法を續け乍らも、本格踊に爲るべき合圖であると心得つゝ、續いて「仰せとあれば」の「せと」の聲と共に〔三〕の振りと爲る（即ち右足を蹈込み兩手を顏の左寄りにて拍つ）の

である。其れより後は引イテ（四）（五）（六）と全く本格踊となり幾差にても繰返し踊る。斯くの如く進行法で行つて居る間は右足を出す人、左足を出す人、手を左へ拂ふ人、右へ拂ふ人、甲は足を跨附けるのに乙は足先きのチョンを行つて居る等々、全部が區々であつたとしても「せと」にて〔三〕に爲ると云ふ事だけ心得て居れば其れにて全員が一致して仕舞ふ。即ち〔二〕のチョンから〔三〕に爲る人は當り前であるが〔一〕の人でも〔一〕のチョンの人でも〔二〕の人でも其の振りから「せと」の聲と共に遽に無二〔三〕に合せて本格の踊に移つて仕舞ふ。因つて之をせと合せと云つて居る。されば前述の進行法は謂はゞ此のせと合せの前奏曲である。

◎輪を八重にする事　踊がなほ進行法の時期なると既に本格の時なるとを問はず、踊手多き際は一重の輪では用足らず。其處で誰でも先達と爲つて輪の內側に入り込み、或る人々之に續く時は、其處に新たなる內輪が一つ出來る。又後れ馳せに踊に參加せんとする誰れ彼れが、音頭取の聲を便りに進行法で行つて來ても、見物の人垣が遂に破り切れず、又は輪には近づいたが踊手帶集の爲め割り込むべき間隔が見出されぬ時は、自然其の輪の外側に添つて一つの輪が出來るの外は無い。斯くして輪は三重四重となりても、音頭取さへ實力が有れば立派な統制が

保たれて行くのであるが、若し非常に多數の踊手である時は、外輪の人々は別に音頭取を立て、やゝ離れた所で獨立した踊輪を一つ創立する方が好い。なほ又深更に及び踊のさびれる時は、漸次輪の數も減じ大きさも縮小さるべきこと勿論である。

◎踊を休ませる事　「踊や續いてちよつとくたびれた少し休んで又踊れ」或ひは「――皆くたびれた此れで休んで――」など此等は野外の大會に踊を休ませ又は止めさする爲めに用ひられる歌詞である。又劇場の上演などでは「まめで逢ひましよ又來る年の踊る輪の中月の夜に」などが同じ目的に好んで用ひられる。但し野外の大會では此等の歌が出ても容易に休まうとはせず、續いて踊り抜いて居る人も勿論少なくは無いのである。なほ舞臺での引込みに就いては、此等の歌が返しまで唄ひ終つたら、其處で幕にして仕舞ふ事もあつさりして居て面白く、或ひは殘りの振を〔十四〕まで行つて幕、又しは〔十四〕より再び進行法に戻り樂屋等へ引込んで行くも惡しからず。但し最後の場合は樂は是非附けて欲しい。樂無しの斯かる引込みは蛇の穴に入るが如く興醒めたるもの、隨一である。

◎舞臺上演に就いて　地方(ぢかた)即ち音頭取及び樂手は舞臺の一方適當の所に陣取る。音頭取だけは野外の時の如く踊輪の中心として舞臺の眞中に立つも好し。若し囃し方が三味線、笛、太鼓

の様な日本ものが多い場合ならば舞臺の奥へ長唄の時の繼段（清元や常盤津の山台）のやうなものを作るも好し。話が餘程仰山な事になつて來たが、茲に聊か注意すべき事は、踊が見物の眼に入るのは殆ど直ぐであるが、唄や樂が見物の耳に入るのは少しく時間が遲れる事である。小さな劇場などでは問題では無いが、大劇場や野外の廣場などでは此れは物理學的法則で免れない事である。彼の野外の大輪の踊で、音頭取から見て居ると、遠い外輪に居る人々の踊が兎角遲れて居る事を發見するのであるが、之も外輪の人々が、遲れて耳に入る唄の聲を便りに踊つて居るからで此の際には音頭取は此等の形勢に頓着せず、近い所に居る踊手に一致しつゝ唄つて居れば差支無い。此れと同じく大劇場の場合も、遠い見物席に居る人には、踊よりも唄や樂が遲れて聞えて行くのであるが、此等の事は地方(ぢかた)としてはたゞ念頭に置くの外別に致し方も有るまい。

さて野外と異り舞臺上演には多くは先づ前奏から始まる。が踊手はまだ姿を見せぬ。頃合ひを計つて音頭取が「サ――寄れや寄つて來い」を唄ひ出す、此の歌と共に踊手が進行法で花道へせり出して來る、此の出端(でばな)に就いては前にも聊か述べて有るが踊手の數が相當に多いならば成る可く兩花道から、又は更に舞臺の奥からも三方四方から出るが好い。只出て來た處で、左

廻りの輪と爲らぬやう必ず右廻りの事に注意すべし。或る場合の著者の經驗であつたが、出て來た踊手全部が一人の先達の失策に釣り込まれて、堂々たる左廻りの輪を作つて仕舞ひ、見て居てハラ〳〵したが、進行法から本格に移る際せと合せの有り難さで間違ひ無く立派な踊と相成り、漸く胸を撫で下ろした事が有つた。後で聞いたら、地方も立ち方も此の間違ひを一向に知らず、後見様も「成る程今考へて見れば本當に左廻りでしたわネエ」と云ふ次第であつた。況して見物衆は只々感に堪へて居たなどは誠に目出度し〳〵で、此の時ほどせと合せの有りがたさを感じた事は無かつたのである。其處で斯かる怪我の功名も悪くは無いが。怪我無しに右廻りの輪を作らんとするには、舞臺に向つて右から出る踊手は、舞臺へ達したる時、其の奥へ附いて廻り、反對に左から出た踊手は、舞臺の前へ附いて廻る事に呑み込んで居るが宜い。さて進行法で輪が出來て、振りの右左も徹底的に揃つて居る場合として、音頭取なる人が踊手をしてせと合せを最も圓滑に行らせやうとする、即ち丁度進行法の〔二〕のチョンから本格のチョンへ移らせやうとするならば、「音頭取り――」を進行法の〔一〕チョンへ、隨つて「ましよ――仰」を同じく〔一〕チョンへ唄ひ掛けるやうにすれば、嫌でも應でも「せと――――あれ」は〔三〕引イテへ係る事となる。茲に斷つて置く事は「出」のサ――である。之は

附けても附けなくとも好いのであるが、附けるとすれば當然進行法の〔二〕チョンへ唄ひ掛けるべきである。何れにしても「音頭取り――」が〔一〕チョンへ、「ましよ――仰」が〔二〕チョンへ行かねばならぬのである。左表の如し。

〔一〕―チョン―サ――おんど―取り―ましよ――おほせと―あれ――
〔二〕―チョン―〔一〕―チョン―〔二〕―チョン――〔三〕―引イテ――

なほ踊手のうち、若し右と左と違つて居ると云ふやうな人が有つても構はぬから、せとでは遮二無二〔三〕に合せる事、固く心得べしである。

◎音頭取の注意すべき事　音頭取は必ず其の唄ひ出しが踊の或る節の初頭と吻合せねばならぬこと既に述べたる如し。乃ち唄ひ掛けて宜い節の前半は左の通り

〔一〕〔二〕〔三〕（四）〔五〕〔六〕〔七〕
〔八〕〔九〕〔十〕〔十一〕〔十二〕〔十三〕〔十四〕　以上前半節の出來

之に反して節の後半即ち左に列擧する振りに對つて唄ひ出せば縮尻である。

チョン　チョン　引イテ　（五）　チョン　ツナイデ
ハア　チョン　ハア　（十二）　チョン　ツナイデ

若し右等半節にて、特に其の出來に對つて唄ひ出したとすれば、滿更ら踊れぬ事は無いが、呼吸があべこべで有るから、何と無く重つたるい忌やな感じのするは免れぬ事である。

◎間奏に就いて　間奏の長さは固より曲の小節の整數倍で無くてはならぬ。然るに半小節とか一小節半又は二小節半と云ふやうに、半端の附いた間奏で行つて居るのを時々見受けるが、之は誠に困るので、彼の音頭取が、踊の節の後半へ唄ひかけねばならなく爲るのも、一つには右の如き無理な間奏に禍ひされて居る結果と云ふ場合も往々有る。前奏や間奏は要するに伴奏的のものであるから色々の作曲が試みられ得るに就けても、如上の法則だけは確守され度く、各地三味線の御師匠さん方には、特に此の點お願ひ致して置く。

安曇節作詞法

安曇節は多數の俚謠と同じく二十六字で上の句が十四字、下の句が十二字、詳しく云へば上が七、七、下が七、五、になつて居る。其の上の七七も三四、四三、下の七五も三四、五、である。此の最後の五は二、三なることあり、三、二なることあり、二、一、二なることあり、全部一と固まりの五なることもあり一定せざるにより先づは五として置く。今「白馬七月」の歌を以て右を表示すれば、

七
三―四
七
四―三

◎白馬、七月　殘りの、雪の

七
三―四
五

間に、咲き出す　花の數

右字數の配列に就き稀れに「春は暮れてもまだ咲き殘るわたしやアルプス遲櫻」の「まだ、咲き殘る」の如く、普通の字數配列即ち四――三の如く見えて實は二――五であつたり「高瀨入りから時雨に追はれ追ひ越されたが笹平」で「高瀨入りから」が普通の三――四の如く見えて實

は五――二であり、「追ひ越されたが」の所が絶對に三――四で無く全部一と固まりの七で、或ひは寧ろ二――五とも見られると云ふやうな場合が有るが、謂ふ所の普通の字數配列の如く見える限りは、餘り唄ひ難くも無いが故に問題とは成らぬが「追ひ越されたが」などは普通の三――四の加くには絶對に見られないので頗る唄ひ難い。又言葉の都合により「都々逸ア下手でも」と云ふやうに上の句や下の句の初まりの三――四が四――四と成る事も有るが、此れも安蔓節では踊ひ難いから避けねばならぬ。

次ぎに音の性質に就いて、先づ母韻アイウエオは餘計に挿入されて居ても割合に苦に成らず其の上の音と同韻なる時など特に然り、和歌などで云ふ字餘りの理屈である。片足はかたしの如く、飛び石はとびしの如く、何れも四字が三字同樣に扱はれ得るのである。次ぎに促聲、即ち行ッた、買ッた等のッ及び鼻音ん等は唄ひ難い。ー印で現はされる延聲、即ち豆腐（とーふ）景氣（けーき）等の、ー、も聊か唄ひ難い場合が有る。共處で此等の、ッ、ん、ー、などは寧ろ其の前後の字數を殊更らに增した方が、却つて唄ひ易い場合有るは注意すべき事實である。有名なる彼の木曾節の代表歌詞で「木曾の御嶽さんは」と云ふ三――七にしても、んが二つある爲めに、三――四よりも寧ろ面白く唄へるが如きは好例である。次ぎに五十音圖でウ列の音即ちウクスツヌフムユル等は口中に籠る音であるから聞き取り兼ぬる事が多い。例へば、

◎烏帽子下れば葛の湯どまり、浮世離れた高瀨入り

右の歌で葛の（土地訛りはクゾと云つて居る）クだとかズだとか云ふ音は聞き取り難いから、其所だけ特にはつきり唄ふ必要有り。此の溫泉は其れだけ宣傳上餘分に骨が折れる事とも考へられる。

二十六字の最後の五字は、安蔓節では、意味からも唄ひ方からも最も力の籠るべき所であるから、成る可く明朗快活な音のみを要求する。ウ列音などなほ忍び得るとするも、促聲は絶對に避けねばならず、鼻音や延聲も稍や面白く無い、殊に五字の中央の一字を促聲や鼻音とされた場合は殆ど唄ひ得ない事となる。

語句の配列に就き注意すべき事は、大體に於て上の句と下の句とは截然として切り離されて居るやうでありたい。即ち上は上、下は下で纏まつて居るやうでありたい。凡そ唄が口から出て耳に入るや間髮を容れず頭の中で相當の感動を起すやうで無くてはならぬので、其の爲めには、上の句の言葉の尻が下の句へ粘ばり附いて居たり、下の句の頭が、其の意味から見て、上

の句の中程に始まつて居たりする事は誠に困るのである。彼の和歌などならば、美術的な文字で色紙や短冊に書いたのを讀み返し〳〵し乍ら、沈思默考して其の深遠な所を味つても好いが俗謠の類では其れは恐れ入る。換言すれば和歌や俳句は目から頭へ行き得るでもあらうが、俗謠の類は是非原則通り口から耳へ行くべきもの故其所に相違が有る。だから結局安臺節に於ても、上の句は其れ自體で纏つた意味を以て終り、次いで下の句の頭は名詞代名詞のやうな體言を以て口調明快に始められたいと云ふ事になる。下の句の頭が若し右注文通りの體言で無いとしても、せめて感動詞、副詞、形容詞などならば大した差支も無いが、其れが動詞である場合などは大概は上の句との粘り合ひとなり、其の主格又は目的格たる名詞等は、上の句又は下の句の途中へ轉居して仕舞ふので、隨て聞いて居る人が、歌詞の意味を諒解するに困難を感ずるのである。俗謠の類では無いが百人一首の定家卿の歌

◎來ぬ人をまつほの浦の夕凪に、燒くや藻汐の身も焦れつゝ

右の下の句の頭は「燒く」と云ふ動詞で、其の目的格の「藻汐」は下の句の中ほどへ追ひ下げられて居り、又此の「燒く」は、「夕凪ぎに燒く」と云ふ句が、上の句の尻から下の句の頭へ粘ばり垂れて居るとも見られる。凡そ和歌の場合としても、下の句の頭は誰しも原則的に體言を

置きたがる所で、隨て人様の歌を拜見するにも何と無く其所には體言が有るつもりで之に對するから、若し此のやうな動詞が有る場合には面喰つてハーテナと考へさせられる。歌聖と云はれた定家卿が御自分の選した本へ出してある、しかも御自分の歌であるから、固より我等凡夫の爭ふべきでは無く、特に和歌としては其う云ふ事は寧ろ技巧の妙を誇るべきであるかも知れぬが、實は吾等少年時代に此の歌を見て、やくやもしほを人名と思ひ込んで居たので、今以て罪な歌だと考へる。此れが和歌だから文句は無いが、子供や無學者にも聞いて貰ひたい俗謠殊に俚謠などであつたとしたら問題だ。尤も此の節の新派歌人などへ行くと、上の句下の句の境どころか、抑も律語か散文かさへ識別し兼ぬる名吟が少なく無い。まさかに和歌俳句などが絶對に口で歌ひ耳で聞くもので無く、理學や數學の問題の如く、文字や印刷の上で、見て冥想するものと改宗したでもあるまいが……。畑違ひのものは兎に角とし、少なくとも俚謠に於ては凡そ唄ひ得ぬもの、又唄つても聞いて直ちに意味の徹底出來ぬものなどは、要するに厄介な存在である。乃ち假りに左の如き文句が出來たとする。

◎越すに越されぬ年の瀨越して、仕舞や嗚呼の鬼や笑ふ。

下の句の頭なる「仕舞や」と云ふ動詞は、上の句の尻にぶら下つて「越して仕舞や」と一と繋

がりになつて居るので、隨つて「仕舞や」だけでは獨立の語とは受取りかねる。「越し終れば」の「終れば」に類し、又は「越しぬれば」の「ぬれば」に似たる、連結動詞か助動詞の如くにまで扱はれて居る動詞である。乞ふ見よ、「ぬれば、ぬれば、晦の鬼や笑ふ」「しまや晦の鬼や笑ふ」何の事か解らぬでは無いか。「濡れ羽晦の鬼」「島屋晦の鬼」其んな晦の鬼があるものか。だから下の句の頭は成る可く體言に致したい。隨つて右の歌も「年の瀬越せば、後ちや」とでもすべきであらう。

◎泣いて吳れるな土俵入りの前に、しめた廻しが解けかゝる（相撲甚句）

「土俵入りの前に泣いに吳れるな」の意味であるが、下の句の頭が動詞であるために「土俵入りの前にしめた廻し」の意味に聞かれ易い。只「廻し」と云ふ名詞が續いて居るので「しめた廻し」と云ふ一と同まりの體言の如く成つて漸く助かつて居る。

◎槍や穗高を吾が物顏に、唄ふ雲井の揚げ雲雀（安曇節）

「雲井に唄ふ」と致したい所であるが其うも成らぬのが此の歌の病である。「唄ふ雲井」とあるが、歌を唄ふ雲井などは珍らしいと理屈を云はれる。要するに下の句の頭へ止むを得ず動詞が來る時は、其の動詞の主格又は目的格たる名詞の類は、成るべく直ちに其の下へ續けて「しめた廻し」とか「唄ふ雲雀」とかせねば成佛しかねる。

二十六字の最終の五字は安曇節では踊手及び見物一同にて唄ひ返す所である。其れ故此處には前述の如く明朗の音のみを希望するは勿論「花の數」など云ふ如く特に此の五字だけ切り離しても完全なる意味を成して居る事が必要である。然るに次ぎの歌、

◎人目忍めば其の名も云はで、思ふあたりの事を聞く（都々逸）

「思ふあたりの事」と續いて意味を成して居るので、只「事を聞く」だけ切り離したのでは、何の事を聞くのか、又は琴でも聽くのか解らないから、此等の歌は安曇節としては採用出來ぬ。

◎病直（やまひなほ）しの山中なれど、病求める人も有る（山中節）

◎親は子と云ふて尋ねもするが、親を尋ねる子は稀れな（但馬地方）

◎今夜臼挽き遊びにござれ、臼の手てしよと云てござれ（島根縣邑智郡）

右等も安曇節として扱ふとすれば頗る變なもので、唄へぬでは無いが意味が立たぬのである。即ち「云てござれ——云てござれ——」など返し唄を附けて見ても、何を云ふてござるのか今一度全歌詞を聞き返さねば解かりかねる。稀れには又此の五字が言葉としては切り離れて居てもなほ意味に於て切り離れて居らぬ場合もある。即ち、

◎寺の門口蜂や巣をかけて、坊主出りや刺す戻りや刺す（中國、九州）

◎姉と妹に紫を着せて、どちが姉やら妹やら（諸國）

此等は「出りや刺す戻りや刺す」と續き「姉やら妹やら」と續く事に於て意味が立つので、之を假りに安曇節として「戻りや刺すー戻りや刺すー」と返したでは、戻る時ばかり刺すやうであり、「妹やらー妹やらー」では之も變なものである。「姉か妹か解りやせぬ」とか「解りやせぬぞえ姉妹」とか致したい所。終りに安曇節ならずとも此の最後の五字が切り離れて居なかつたり、上の句と下の句とが粘ばり附いたりして居る爲に、作詞者の考へと異つた意味に聞かれて居る歌が、近頃の民謠や新作小唄等に少なく無いやうに思はれる。が安曇節以外の事までは申すまい。

最後に、俗謠のみならず和歌等にも常に問題と成る所の漢語に就いて述べる。孝行、律義、率公、勉強、山門、參詣、大願成就、貧乏、借金、利息、返濟、公園、遊山、入湯、保養、など（漢音の外に吳音や唐音や宋音もあらう）の古來耳慣れたものは別とし、一般の漢語は元來が外國語である事とて、文句の上で調和を缺き、且つ字音其のもの丶性質として語呂がゴツ〳〵して居て唄ひ難く、なほ一層困つた事には、文字其のものを見なければ意味が徹底せず、場合

により他の意味にも受取られると云ふやうな大缺點が有る。たとへば或る交涉の終りに「總べては當方のカンコーに任せて置いて下さい」では勘考であるか慣行であるか解らないから、相手方でも餘程勘考した上で無ければ返事は出來まい。其處で「何れ當方でもジツコーして見ませう」と答へて置く。此れならば熟考して見ても慣行しても文句は云はれまいと云ふやうな次第。要するに文字を見なければ意味が定まらず、寧ろ口を鎖ぢて筆談するに限る位のものである。押賣商人「お廉く致しますからセツケン（石鹼）をお買ひ下さい」答「當家は昔からセッケン（節儉）を用ゐて居るからシヤボンは要らない」二次會係り曰く「クワイヒ（會費）を納め給へ」答「時節柄金を出す事はクワィヒ（回避）する」など詰らぬ洒落である。此の外、攝政と殺生、決鬪と結黨、問伐と旱魃、出荷と失火、此の類の漢語などで電報でも發したら飛んだ勘違ひをされる場合がある。凡そ前後の續き柄などを考へて辛うじて正しい意味を受取る、と云ふやうな漢語は、誠に厄介な存在と云ふの外無く、例の颱風吹いて小砂眼入する流儀に成れば何が何やら到底解りつこ無し。先づは漢語は古來慣用のものゝうち、語呂滑かにして意味明瞭の分のみを採用する事である。漢語に比較して、英語其の他は寧ろ採用し易く、但し如何なる場合にも不都合なものは促聲と承知せられ度し。

安曇節の作詞は大體右等の諸點を念頭に置かれたく、なほ又唄ひ方が概略出來て居る人なら
ば、自ら唄つて見乍ら作詞されゝば何も彼も自然會得されるであらう。なほ作詞せぬ前から色
々氣に懸けて居るのでは、一言半句も出來なくなるもの故、作詞は作詞でどし〳〵放膽に行つ
て置いて、出來た文句の推敲の際、此等の法則に鑑みられたいのである。

終りに附錄として。讀者諸氏が諸國の俚謡を見る時に作詞上參考と爲るべき事は、其等多く
の歌詞の間に自ら型の如きものゝ存する事實である。たとへば

琉球と鹿兒島(薩)續きたらば通ふて酒盛りして見たい（球琉節）
空を飛ぶ鳥物言ふならば便り聞きたや聞かせたや（諸國）
お茶師希頭さんが盲ならよかろお茶の小言が無うてよい（伊賀）

右等は有り得べからざる事を假想して其れだとしたらば其の結果は何うと云ふ事を纏めて一歌
詞としてあるので、假りに之を地續き型の歌詞として置く。次ぎには左の如きものもある。

馬が物言ふた鈴鹿の關で、娘女郎なら乘しよと云た（伊勢）
姐(ねえ)さん袂で蟬が鳴く何と云て白齒で身持ちはおいとしや（伊賀の上野）
お色子さんとな農島（山名）は何時見ても若さよ色の白さよ（甲州臼びき唄）

右等は動物や其の他のものに人間並みの言葉で情意を語らせたり、色々の仕草をさせたりする
所謂擬人法で馬が物云ふ型と名づける。

竹に成りたや佐原の竹に潮來通ひの舟棹に（潮來）
月に成りたや樣が住む閨の臥戸を照らしたや（紀伊）
一夜穗高のわさびとなりて京の小町を泣かせたや（安曇節）

右はなりたや型

まめで居るかの言づけよりも切れた椿(つ)緒(お)でもよこしや好い（安曇節）
品川三丁目で客取るよりも岡で田の草取るが增し（三崎節）
上茶こ茶より星野の茶より樣がわたしたさ湯がよい（筑後、八女郡茶山唄）

右はよりも型。

濱のしくてん坊（漁夫）と金びら牛蒡は色は黑くも味がよい（九十九里濱）
わしの思ひと前崎濱は小石〳〵で果てが無い（八丈島）
藝者する身と空飛ぶ鳥は何處のいづこで果てるやら（諸國）

右は金びら牛蒡の型とでもして置く。

お茶の茶の〳〵茶の木の下でお茶も摘まずに色ばなし（諸國茶つみ唄）

行かんせんかかんせんかかんか林の萱かりに（越後）

盆のお月様まんまるこで丸いまるこで角が無い（越後三國節）

右等は同音を重ねて戯れたもの、茶の〳〵型とす。こんな風にやつて行けば七十でも八十でも型は出來るが、先づは著明な型の二三十も見立て、置いて常に愛誦したならば作詞上なか〳〵に得る所があるであらう。

大正池に倒影する穂高岳

よ池正大は鏡すつう
岳高穂の粧化の雪

岩登り

山上のキヤンピング

登り降りで
一と夏暮らす
雪の穂高見
来傳ひ

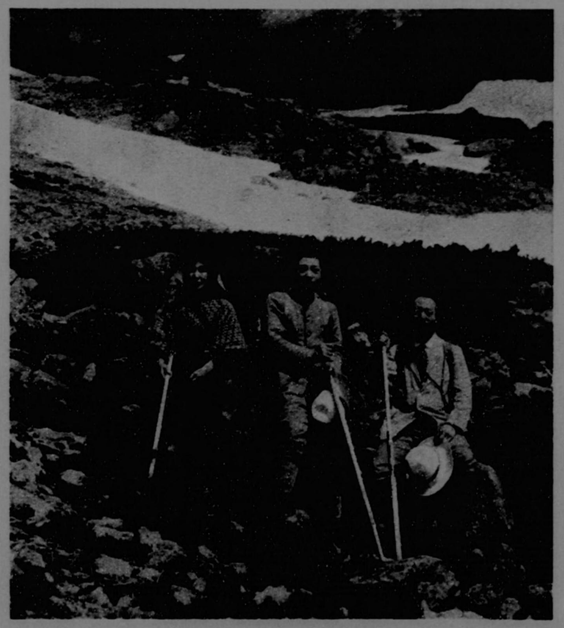
京の小町のキヤンプの夢を
のぞく深山のあのお月

有峯探險

（腰かけたるは中山喜一先生）

歌詞解說第百十五參照

又も行かぬか中山先生
小判堀り堀り有峯へ



槍ヶ岳に於ける著者の一家

安曇節歌詞

安曇節歌詞

歌詞凡例

（一）各歌詞に左の目標（めじるし）を附し其の新舊を明かにす。

◉印、安曇古來の盆踊唄を其のまゝ

◎印、古い歌の一部を改作

○印、安曇節新興により生れたる歌詞

（二）歌詞により必要の場合は解説を加へた。但し巻頭序文に代ふる一篇のうち既に述べたることも亦少なからず、併せて一讀せられたし。

（三）著者固より不學、隨て右解説等も學的詮索の見るべき無きこと遺憾の次第乍ら、史蹟名勝等の現在に就ては、成るべく現場踏査の上、其の有りの儘を記錄し、又自身踏査の機會を得る能はずして特に其の方面の識者に質し所謂聞き書きを爲したる分は、又其の由をも明記して置いた。其れでもなほ誤無きを保せず、只管諸賢の高教を待つ所以である。

(四) 歌詞と歌詞とは成るべく聯想を追つて配列し、以て相次いで唄ふに便ならしむ。又歌詞配列の間に縦線有るは概ね其の聯想關係の境目である。

(五) 全歌詞は其の順序として、先づ特殊の場合に限り用ゐらるゝもの數首を示し、次ぎに踊の場所柄に應じて音頭取が用意するを可しとする歌詞の控への如きもの、數例を出し、終りに其の餘の歌詞の悉くを部門別に掲載した。

▲特殊の場合に限り用ゆる歌詞

○寄れや寄つて來い安曇の踊、田から畑から野山から
○槍と白馬あの峯續き、踊や續けや輪の形に
○安曇踊と三日月様は、次第々々に丸るくなる
◎音頭取りましよ仰せとあれば、西の山まで響くほど

【解一】 此等の歌詞は踊り始めに用ゐられるもので、特に「寄れや寄つて來い」は踊り手を呼び集め、「音頭取りましよ」はせと合せに用ゆる文句である。須く踊り方の部を參照すべし。

○君が齢は千輪菊の、花に齢の數添へて

【解二】 此れは 御長くも皇室の榮えを壽ぎ奉る時に用ゆるのである。其の法はせと合せの後直ちに此の歌詞を用ゆるのであるが、特に敬虔の態度を以てし、且つ此の歌詞の前と後には業と踊、又は踊のみの一差を、歌詞無しにて附するものとす。其の後は一旦休息するも宜し。他の歌詞に移るも亦妨げず。

○守り給へや神代の昔、岩戸開いた踊り神

◎心引き締めきり〳〵と踊れ、踊り神様見て御座る

【解三】 右二首は松川村字神戸、有明山社にて踊る時、必ず先づ唄つて神に禮拜を捧げる事に定まつて居るもの、其前後の敬虔の態度は「君が齢」の歌に準ず。

○踊や續いて皆くたびれた、少し休んで又踊れ
○息災で逢ひましよ又來る年の、踊る輪の中月の夜に

【解四】 此等の歌は、踊の終り又は中休みの際に用ゐられること、踊り方の部を參照すべし。

附言 音頭取が上の句を唄ひ乍ら下の句を忘れたる時は、其の埋め合せとして「後の文句は汽車で來る」又は「其れに就けても金欲しや」など唄つて下の句に代へる。又音頭取の聲が聞き取れなかつたりして、踊手が返しの文句に困る時は「解らない——」など唄つて返しに代へるのである。

▲踊の場所柄に應じ音頭取が用意すべき
歌詞配列の數例

附言　總べて音頭を取らんとするものは、其の場合々々に適當するやうな歌詞を選び、之を順序よく列記したものを携帯して出場するを可とす。但し如何なる歌詞を如何やうに配列するかは、音頭取其の人の隨意で有るから、左に示すは單なる假設例に過ぎずと知るべし。

其一　宮城の花見に

【解五】南安有明村字宮城は、日本アルプスの中央なる燕岳及び有明山、中房温泉方面への登山口で、山峡の一方遙かに安曇、筑摩の平野を臨み、五龍山不動明王、有明山神社（此の宮は彼の北安松川村の通稱神戸の權現様と混同され易きを以て注意すべし、普通に宮城の有明神社と呼ばれ社殿莊麗なるを以て信濃日光の稱有り、且つ郷土第一の櫻の名所である）ギシキ八面大王の岩窟（序文參照、此の邊一帯に多數有る古墳が悉くツムルスと見るべきに係らず、此れの み側壁に石柱を交へ且つ蓋石の一枚岩なる等やゝドルメンの形式を具えたり）奇勝隱れ鼻（斷崖直ちに中房川の碧潭に迫り藤や躑躅の候特に好し）有明温泉（登山及び四時遊覽の人々に對し休泊の便に供す）等の名勝が有る。

○七重八重引く安曇の霞、奥の一重は山櫻
○花見什箱重そに提げて、轉ぶまいぞえ隱れ鼻
○轉び落ちそな岩抱き止めて、藤の花咲く隱れ鼻
○昔乍らのギシキの岩屋、花の宮城山蔭に
○岩に籠りしギシキでさへも、踊を見せれば出てござる
○今も昔の血潮に燃ゆる、ギシキ岩屋の鬼つゝじ

○娘十四五花なら蕾、咲くな咲いたりや散るばかり
◎わたしや奥山谷間の櫻、人に知られず咲いて散る
○安曇山家で咲いたる櫻、京の人まで迷はせる
○花はらんまん鈴年咲くが、人の盛りは五六年

○櫻散る〳〵あの子が踊りや、踊る手に散る肩に散る

○藐忘れて後振り返りや、禿げた頭に花が散る

其二　白馬山頂にて

○日本アルプス何の山見ても、冬の姿で夏となる
○白馬七月殘りの雪の、間に咲き出す花の數

【解六】初版當時は「……八月殘りの雪を、斜りて……」と歌ったが、其の後右の如く改めたのである。

○花に焦れて白馬のぼり、殘る白雪踐み わける
○結ぶ緣は幾山越して、蝶が尋ねる岳の花
◎岳の岩間に咲く花さへも、夜は白露抱いて寢る

◎ゆふべ四つ谷で今日白馬で、あすは朽子や鏈ケ岳
○黒部越え來て白馬どまり、明日は四つ谷で盆踊
○踊る四ケ庄の馬方娘、着古脫がずに草鞋ばき
○日本アルプスあの强力は、背中一つが飯の種

○來るよお孃さんが膝小僧出して、はかせやりたや雪袴
○主をたよりにわしや北安曇、ともにはきます雪袴

【解七】雪袴は男女とも概れ紺色で木綿、形は木曾のカルサンや東北のモンペに比し遙かに寬濶、卷頭插圖に見るが如し。尤もカルサンやモンペの如く特に細狹く作りたるも無きにあらず、其は猿袴と稱し山仕事や炭燒きなどの際男に限り穿つもので、雪袴よりも下品のものとしてある。近頃は又ダンプクロ袴と云はれる足首のダブ〳〵したものを買つて來て穿く。買つたものだから上品だと思はれるのか集會などにはポツ〳〵用ゐられるが其の形は雪袴の優雅なるには及ぶべくも無い。

其三　白船溫泉にて

【解八】白船（又は白檜、普通には白骨と書かれた）は昔から有名な溫泉であるが、登山熱の勃興以來全國的に宣傳される事となり、隨て中里介山氏の「大菩薩峠」にも書かれたのであらう眞に日本アルプス山間の仙境である。

○雪の乘鞍まともに仰ぐ、夏は凉しい番所
○一度ござれよ番所原へ、夏のさ中に布子着て
◎住めば都で山また山の、奥に花咲く蕎麥畑

○碓の目なりのだんだら畑、蕎麥の花咲く大野川

◎大野川衆は一と目で知れる、麻の小袋腰に下げ

【解九】大野川は秉鞍岳の麓、香所原に續く山村である。所謂麻の小袋は、牛の沓を穿き替へさする時の小道具一切を入れ之を腰に着けた牛方衆の風俗から始まつたもので、今では革袋も用ゐられると云ふ。

◎右は白船左は野麥、此處は奈川渡、袋谷

【解十】奈川渡は奈川が梓川へ合流する所で、右すれば白骨、上高地に至り、左すれば野麥峠（飛騨へ）境峠（奈川を溯つて木曾へ）等に至る。又奈川と相隣りして梓川に合流するものに大白川あり、其れを合流點より數町も溯れば、渓流は一大懸谷と成る。巾一間半乃至四間、奥行二十二間、高さ三十八間、仰いで一條の空を望むのみ、之を袋谷と云ひ其の奥に懸るを袋瀧と云ふ瀧の高さが又二十八間もある。蓋し天下の奇觀なり。

○こされ紅葉の色附く頃は、お湯を尋ねて白骨へ

○槍峠を往來の人は皆白骨湯のお客

○浮世しら骨よいとこなれど、雨の降る日は氣が沈む

○燃ゆる思ひはアルプス山の、烟り絶えせぬ燒ケ岳

○烟り絶えせぬ燒岳よりも、焦れ焦るゝ吾が思ひ

○わしの思ひにくらべて見れば、薄い烟の燒ケ岳

【解十一】燒岳は日本アルプス中唯一の活火山で、大正四年六月の噴火には熔岩流で梓川を堰き止め大正池を出現せしめた。其の後も時々小規模な鳴動噴烟と共に安曇筑摩へ灰を降らすのである。

其四　同窓會（又は青年會、處女會等）餘興

○里で菜種の花咲く頃は、雪に浮き出す螺ケ岳

○螺や燕、爺、代馬と、五月解け出す岳の雪

【解十二】何れも雪の解けた黒い部分に顯はれる物の形から來た山名である。但し燕だけは岩燕が棲息して居る山頂の燕岩から出來た名であるとの説も有る。

◎聞いて恐ろし見て美しや、五月野に咲く鬼つゝじ

【解十三】其の花眞紅にして大輪なるを鬼躑躅と云ふ。山野一面に自生し花時壯觀を呈する。

○春は暮れてもまだ咲き殘る、わたしやアルプス遲櫻

○安曇山々氣高い姿、雪の冠雲の帶
○土用の半ばにあの爺ヶ岳、雪の頭巾がまだ脫げぬ

○槍で別れた梓と高瀨、めぐり逢ふのが押野崎

【解十四】槍ヶ岳の北に落つるは天上澤及び千丈澤で高瀨川の水源、南に落つるは槍澤で梓川の水源、又松本平安曇野の總べての川は穗高町の東方で落合ひ犀川と成つて川中島に出るのであるが、押野崎と云ふのは其の落合ひへ北方から押出した岡丘の突端である。

○水は押野へ皆落ちて行く、安曇十五里川穗にして
○搖れる穗波に案山子が泳ぐ、安曇野を吹く秋の風

○山は時雨かあの炭燒きの、烟が這ふぞえたよ〳〵と
○叺背負ひ出す炭燒きさへも、揃ろや見事な山下り
○さても三百六十五日、切れる筈だよ雪椅
○切れりや又綴ぎ綴ぎや又切れる、苦勞盡きせぬ膝の綴片

其五　歌の取合せ

附言　如何なる場合を問はず同種類の歌を取合せて踊にかける事は興味がある。今其の一二例。

第一例　風流月並

○柚正月門松要らぬ、前の松の木注連懸ける
○二月末まで藁細工したが、花の三月ア畑打つ
○石の間へ子をすりしこる、花の三月陸鮫

【解十五】しこるは引籠るの方言。春の頃鮫が水淺き所の石の間へ隱れて產卵する際は、擧動も遲鈍なり水も淺ければ、之を漁獲する事なほ遺ちたるを拾ふが如し。陸鮫の名ある所以。

○穗高豊科梅咲く四月、此處は大町雪が降る
○五月馬市算盤要らぬ、袖と袖とで値が決まる

【解十六】美麻や八坂及び上水內方面の山間部に育つた馬が、五月になれば安曇平の耕作に使はれるべく出て來る。此の歌は大町に於ける其の借馬市場の情景で、袖と袖とを連ねた內にて互に指の數を觸れさせ値段を語り合ふなどは常に行つて居る事である。又右の馬の貸借には昔から證文等を用ゐず全く信用一つなる事、實に純朴なものである。

○安曇六月まだ風寒い、田植布子に雪袴

第二例「よりも」盡し

◎戀に焦れて泣く蟬よりも、なかぬ蛍が身を焦す

◎松川蕎麥より何より彼より、速く添ひたや主のそば

【解十七】松川蕎麥は古來名物で彼の更級蕎麥の如くお江戸まで進出したものであつたが、今日では其の生産云ふに足らず、畑地は殆ど開田し盡されて好評嘖々たる彼の松川米に名物のお株を引繼いだかの觀がある。

○ベコン〳〵と三味をひくよりも、わたしやゴロ〳〵ひきや（粗摺り）ひく

◎息災で居るかの言づけよりも、切れた紙幣でもよこしや好い

○よその土藏くら眺めるよりも、うちへ歸りて藁叩け一

○知らぬ商ひするよりや勝しだ、資金要らずの藁細工

▲安曇節歌詞部門別

（左に安曇節の全歌詞を部門に別ちて掲載する。但し前出のものは再錄せず）

一、山　岳

○雪のアルプス春日にやけて、黒い顔出す鍋かむり

【解十八】鍋冠山は南安曇烏川村に面起し、山頂純圓にして針葉樹の黒生立に蔽はれたれば此の名有り。早春雪解けと共に最も速く雪解出するは此の山頂である。

○花の霞の三尺帶を、締めて種播く爺ケ岳

○帶に締めたるあの春がすみ、爺ケ岳には派手過ぎる

【解十九】爺ケ岳は松本平安曇野の何れよりも望み得る南面の山で、種まき頃雪の解け間の一部に爺が雪袴を穿き箕を小脇に種をまくものゝ如く現はれる所あり、其の前に鶏の如きものも見ゆ。

○鹿の子まだらのあの白雪を、あやと織り出す岳の花

○白馬登れば越路は一と目、海に浮んだ佐渡ケ島

【解二十】雪が解けて黒い馬の形の出る代馬岳が一名白馬山と化つた如く、お天主（天守閣の意）

が大天井、常念坊（開山の僧の名であらうと云ふ）が常念岳、又山頂の燕岩（岩燕の棲息する岩の意）から燕岳、烏帽子岩から烏帽子岳の名が出來、岩小屋のある澤の頭と云つたのから岩小屋岳と云ふガッチリした名稱が生れた事など、其の來歷を調べると成功も失敗も有り、大天井から又一歩進んでダイテンジャウなどは眞に篦棒な失敗であるが、其處に巧まざる滑稽も見えるとは面白い。

○槍や穗高は霞んで見えぬ、見えぬあたりが槍穗高

○雲の上越すあの槍ケ岳、飛彈と信濃は西東

○晴れた日でさへ白雲かゝる、神のまします穗高岳

○雪の白幣神代のまゝの、姿崩さぬ穗高岳

【解二十一】 奇傑高島章貞、祖父政忠松本藩を去り穗高町に住して以來代々醫を業とす。章貞の父玄潤「卯の花や穗高は雪の白幣」の句有り、章貞も亦文政元年（十五六歳の頃か、後八年播隆槍ケ岳を窮む）上高地に入り穗高岳を讃へて曰く「魏然として天外に秀で盛夏と雖も積雪消えず、白雲漠々常に山巓を見ず晴天朗なる日偶然峻峯現る。極目之を望めば危峭峙立して白幣に似たり。嚴々たる神跡仰ぐべきかな」と 今明神池の上で、前穗高即ち明神岳の最前方なる尾根頭を御幣と云ふ由、又殘雪の形御幣に似たる御幣凹とは何れの事なるや聞きたる事無しと旅舍「五千尺」の丸山尙氏は語られた。著者思ふ、昔より云ひ傳へられ、章貞父子の文章に

も現はれたる所謂雪の白幣は、彼の岳澤の頭部に於ける殘雪を形容するものにあらざるか、記して識者の教へに待つ。因みに章貞、學和漢洋に通じ諸國を遍歷して交友頗る廣く、就中景樹象山等に師事し、著すところ寒鄕爐談、穗廟精考等有り。明治二年朝命に應じ大津に到れる時咯血して死す、六十六歳なり。一女敬子、才色有り詩歌を能くせしも十七歳にて沒す。他に嗣無し。明治の志士松澤求策は其の高弟であつた。

○又も燒岳やけ出しなさる、一度呉れたや虫藥

○春は裾から花咲く山も、秋は峯から紅葉する

○谷にのつしりと白雪ア殘る、登山嬉しや五六月

○登る常念豐科口の、一の澤邊は夏櫻

○小屋を目あてに尾根とぼ〳〵と、はかは行かない岳の道

○四つ谷出る時やばら〳〵雨で、白馬尻から晴れわたる

○お花畑で皆踏み迷ふ、どこを踏んでも花ばかり

○山はアルプス宮樣方も、雪を褥に岩枕

【解二十二】上の句「宮様方」と詠込み奉る事恐れ多ければとて又「日本アルプス假寝の床は」とも作る。

○雲の上行くアルプス銀座、喜作新道は尾根傳ひ

【解二十三】アルプス銀座とは赤沼千尋氏經營の燕山莊から南の方大天井岳に到る縱走路を云ふので、登山者の往來繁きことモボ、モガが漫歩する帝都の銀座を思はしむるものあるにより名附く。又喜作新道と云ふのは、右に讓き大天井より西岳に到る間を云ふ。此れを開鑿した牧の喜作こと故小林喜作君は南安西穗高村字牧の人、黒部の品右衞門や上高地の嘉門次の後に出で、其の登山界に殘した功績は、時代の然らしむる所とは云へ寧ろ前兩者に過ぐるものがあつた。

○徳本峠でちよと冷麥の、箸で指す穗高岳

○山へ〳〵と焦れて登る、東男や京小町

○登り降りで一と夏暮らす、雪の穗高見(日本アルプス山岳地帶の古代名稱)峯傳ひ

○夏の登山者又多くござれ、多はスキーを背負てござれ

○安曇野の末霞に浮ぶ、牛の背のよな山の數

○淋し原だよ赤芝原は、柳やほ〳〵けて飛ぶばかり

【解二十四】北安松川村の東、高瀨川沿岸の原野を赤芝原と云ふ。なほ「解百四十二」參照。

○狐こん〳〵鳴いたくまいまんど原で、今日も兵隊さんがボボンパチ〳〵豆を炒る。

【解二十五】南安有明村字富田のくまいまんど原、今陸軍演習地となる。因みに斯くの如く語數多き歌詞の唄ひ方は「解八十二」を參照すべし。

○話を聞いたら蚊帳賣りや逃げた、虹も蚊も居ぬ番所

○神戸原(ガーハラ)にて鈴虫捕りの、かざす松明(たいまつ)ア五里見ゆる

【解二十六】神戸原は松川村の西南に在り、海拔三千尺、鄕土唯一の鈴虫の名所である。初秋月明の夜曠野に逍遙して銀鈴を振るが如き其の聲を聽く、蓋し狹斜の巷に鄙衞の業を愛づると自ら異る趣味無くんばあらず。

○神戸原行きや芝圖栗(しばどんぐり)が、秋の西日に頬冠り

○爺が萱刈る枯野の果ては、お日の入らしやる山の裾

スキー

○日本アルプス、スキーで越して、下る所は飛彈の國

○此所は番所(ばんどこ)スキーの名所、雪の素肌のきめの好(よ)さ

○雪をかぶりて寢て居る笹を、來てはスキーで搖り起す
○雪のお平（南安 烏川村）はスキーに暮れて、里に夕餉の灯がともる

キャンプ

○塵のうき世の苦は白樺の、木蔭涼しやキャンピング
○お花畑の雫を汲んで、お米とぎますキャンピング
○お月や照る〳〵白樺林、キャンプ出て來て皆踊れ
○京の小町のキャンプの夢を、のぞく深山のあのお月

二　河　川

河川

○奥は春雨雪解けもやう、梓高瀬の水が増す
○日本アルプス落ち來る水は、淵で踊りて瀬で囃す
○水の流れに散る花浮べ、春のたよりを越後まで

【解二十七】 安曇筑摩の水は犀川となり、四ヶ庄小谷の水は姫川となり何れも越後の海に注ぐ。

○山と海との縁を繋ぐ、水は儚い片だより

○やさし美し名も姫川の、もとは白馬の花の露
○里へ出たさにあの笹原を、わけて落ち來る葦間川（馬羅尾谷から出る川）
○乳川渡らば橋を架け渡れ、夏の土用でも足や切れる
○餓鬼の乳岩落ち來る水に、旱魃知らずの田が並ぶ

【解二十八】 餓鬼岳の半腹に乳岩あり、大岩壁に自らなる乳房の如き突起より滴り落つる水を源とするもの即ち乳川であると云はれる。乳川沿岸なる常盤村松川村は古來松川組の地で、所謂松川米の産地である。昔都の高貴なる御方が病重きに就け、信濃國安曇の里なる乳川の水を所望なされた。孝心深い公達は夜を日に繼で安曇に下り、其を求め得て參らせたる所、惜むべし此はなほ純粹の乳川の水にあらずと仰せられた。再び馳せ下つて、乳川に高瀬の水の入り交る事實を明かにせられ、乃ち更に深く餓鬼の谷に分け入りたる所にて汲み取り大急ぎ歸洛せられたが、時既に去り、父君はもう此の世には在まさなかつたと云ふ悲しい傳說が有る。信鐵池田松川驛は餓鬼岳登山口であるが、所謂餓鬼の乳岩なるものは今の登山路と稍や距たる所に在り、乳川水源を溯りつゝ乳岩探險など又一興ではあるまいか。

溪谷

○雪の中から芽を出す蕗坊、五月取り行く清水谷（馬羅尾谷の奥）

○五月谷間の雪むら消えて、蕗が芽を出す高瀬入り
○うき世離れた高瀬の入りよ、湯俣芽水葛の温泉
○夜明け遅さよ日暮れの速さ、雨の降る日の高瀬入り

○須砂渡上れば烏川谷よ、涼し山風さは〳〵と
○槍を下れば梓の谷に、宮居涼しき上高地
○谷の紅葉夕日に映えて、水も染まるよ梓川
○うき世離れた黒部の谷の、奥で日ねもす岩魚釣り

○末を松尾の雄丸の瀧と、深い中谷の雌丸瀧
○めまる瀧だよひげ釣り瀧は、のぞく瀧壺目がまはる

【解二十九】姫川の支流中谷川の奥に小谷温泉あり、弘治二年岡田甚一郎なるもの之を発見・明暦元年開湯と云ふ。背に天狗原山を負ひ前は中谷川の渓谷に臨み近く尾丸瀧(雄丸瀧)ひげすり瀧(雌丸瀧)の壮観あり、又少しく山に入れば鎌池蛇池の幽邃境に到る。泉質佳秀にして設備亦完全を極むるも交通に憩まれざるは惜むべし。但し俗塵を避け静養を欲する人士には又と無き佳境ならん。

○瀧の白糸若葉に染まる、色も青具の峠みち
○八坂出て來る金熊川も、岩に堰かれりや夫婦瀧

【解三十】名勝山清路附近にて犀川に注ぐ金熊川の、廣津八坂兩村境附近、八坂村分にて川中に大岩あり、川水堰かれて二つに岐れ落つるもの、古來之を夫婦瀧と云ふと（廣津村帶刀三枝一氏報）

○清音(此の瀧大町の東方にあり)涼しや森蔭暗く、袖が濡れます瀧しぶき
○八十餘尺のあの水烟、音も高瀬の不動瀧
○銚子口行きや青葉を縫ふて、落ちる大水澤どうの瀧(鳥川の奥)
○晴れた日でさへ常念瀧の、岸の石南花濡れて咲く
○三十三尋の彌助ヶ瀧も、秋は落葉に埋もれる(中房温泉道に在り)

○青木中綱木崎で湧いた、赤魚はね出す農具川
○夏も涼しや木崎湖行けば、岳の白雪舟で蔽す

○小谷山奥きこりに聞けば、名さへ鎌池鉈の池
○うつす鏡は大正池よ、雪の化粧の穂高岳

○八十八夜の雪解け待ちて、のぼる中房お湯開き
○谷間〳〵の石南花つゝじ、登ぼる中房科野坂
○此處は中房お湯から見れば、八重の青山窓のうち
○配る笹飯わらびののしを、添へて中房湯のみやげ

【解三十一】米を笹の葉に器用な形に畳み込み、熱泉に浸せば暫時にして飯となる。之を湯みやげの笹飯と號し里へ歸つて近隣へ配る。笹の葉を解いて之を食するに香味頗る愛すべし。

○夏の中房宮様御座れ、冬は吹雪が戸を叩く
○天氣かはるか牧山越して、來るよ中房湯のかほり
◎主さ行くかえわしをも連れて、五月あがりに葛の湯へ
○烏帽子降れば葛の湯どまり、浮世離れた高瀬入り
○信州白船お湯から上がりや、夏の土用でもどてら着る
○中谷川奥小谷のお湯が、せめて在りやよい川尻〈中谷川の姫川へ合流の所〉に

○此處は蒲原湯の元問へば、姫川々原の砂の中

【解三十二】越後國西頸城郡の信州堺に蒲原温泉がある。姫川の川原に湧出して居て二十餘年前までは其處に原始的な浴槽を設け餌く星を仰ぎ乍ら入浴した愉快な所であつたが、今は電力で上の平地まで上げ其處に堂々たる温泉旅館が經營されて居る。館主は又越後信州兩方面へ所謂温泉自動車を出して旅客の便を圖りつゝあるので、現在では交通に憲まれざる彼の小谷温泉の繁榮の一部をも寄ひたるかの觀がある。なほ地理關係から浴客は安曇七分に頸城三分と云ふ所。

三交通

地理

○一丈二丈有る小谷の雪も春は解け行く姫川へ

【解三十三】佐野坂以北は風物すべて北越に似たり、降雪量の多き事など共の一例である。

○池田たんぼの雪解け見れば、群れ鳥が螺を堀る
○奉公するなら押野がよかろ、山を屏風の日向ごで
○山を背にして押野は名所、梅のはやいが安曇一
○俺等も行きたや田澤へ墅に、日の出知らずに朝寢する

【解三十四】東筑田澤は東方に岡丘連り日の出が遅い。

○里は春來て鶯鳴くに、小室、中塔は雪に泣く

【解三十五】 小室、中塔は南安室山の西南なる山間の地、其處の中塔城址に就ては記すべき事がある。天文十九年三月小笠原長時は武田信玄の大軍を三溝野々宮に破つたが、孤軍援無きを慨し自害せんとした。支族二木豊後守重高（其の子重吉、亦豊後守となる。父重高は嘗て怨敵を討つに際し一眼を傷け片目張り豊後の綽名を得たり、後世之を以て親子の豊後を區別するに便す）苦諫して吾が居城中塔に籠らしめ、天文二十一年十二月長時越後の上杉氏に投ずるまで、信玄數度の來襲を撃退したのであつた。降つて天正十年七月、長時五男貞慶深志城を復する前後も、重高父子忠節並ぶもの無く、隨て其の後も代々小笠原の執權たり。慶長十六年君命により重吉編む所の小笠原武田合戰記錄は、所謂二木壽齊（最？）記である。小笠原は松本より下總の栗橋、古河、伊那の飯田、再び舊領松本、其れより播州明石、豊前小倉等、明治までには隨分轉々移封したが二木氏は到る所に隨從して世々忠節を變へなかつた。又其の族の鄕里安曇に殘り止まるものも少なからず、明盛、梓、倭諸村の間に繁榮して居る。

◉何か思案の有明山に、小首かしげて出たわらび

【解三十六】 有明山（歌に詠まれる時有明山である）は南北安曇の境上に立ち、標高に於てはアルプス本系の諸峯に比すべくも無けれど、鄕土の何れよりも富士型の山として群山を拔いて仰がれ、一名信濃富士とあり、後鳥羽上皇「かたしきの衣手寒しぐれつゝ有明山にかゝる白雲

（一說むら雲）」の御歌をはじめ古來の歌枕である。又山の名も昔は戸放嶽と云ひ、且つ天鈿女命降臨の靈峯とせられ、其の裾野の眞東なる神戸原、字トリヤツコと云ふ所に大昔は齋場があつた。彼の穗高宮文書に見ゆる船方の鄕なる有明權現社や、寛永十四年松川村豪農白澤想兵衛正重（想兵衛また惣兵衛、今神戸權現宮棟札により想兵衛とす）發起にて創建された現在の通稱神戸權現樣即ち有明山社も、皆此のトリヤツコの齋場に基くものであつた事は肯かれる。明治になつて敬神家岡村阜一氏、此の神戸社を莊嚴ならしむべく勸說せられたれども不幸氏子の疑惑を買ひ、去つて南安宮城に別に有明山神社を興したのである。又近頃は松川村細野におかめ樣なる祠顯はれ、此れ亦天鈿女命を祀り奉ると申す事にて參詣の諸人雜沓する。さて有明山が天鈿女命降臨の靈峯として此の里より仰がれ、古來信仰の對象たりしのみならず、實際に其の頂上に人の足跡の印せられたのは、記錄に徵し得る限りに於ては、實に享保六年閏七月八日麓なる板取村にて行者寶重院宥快を先達として計十七名（內、一名鼠穴村、又二名は松川村か）登山したるを以て開山とせねばなるまい。當時十七名の主腦者格であつた高橋太兵衛（見笑と號す、時に六十一歲）手記に曰く『＝つら〳〵思ふに如此神明不思議の靈山と雖も今に到りて登山なせるもの一人も無く、依之所の群民是を歎き願誓を發し＝八日の早天に板取の里を立て＝岸けはしく谷深く羊腸きもを冷やし＝木の枝に猿猴みち〳〵たり＝馬羅尾山の麓、瀧の澤口に着き四方のけしきを見渡すになか〳〵本山に登るべき路無し、岩石屛風を立てたるが如く人倫の及ぶ所にあらず、各々一つ所に集り觀念し、木の根に取り附き足を爪立て六字の名

號を覺悟し＝樹枝左右に伏してしがらみの如く古木に身を寄せ枝に移るさながら猿猴に似たり＝彼方此方と上り下りて嶮岨を凌ぎ＝」云々。漸く日の有る内に頂上に達しては「皆々目と目を見合せ汗押拭ひ掌を合せて南無有明戸放大權現本地大日覺王慈民之垂、國土永久、乍恐　天子　將軍御武運千代萬歳並に國主御繁榮＝東方を眺むれば淺間山＝」云々。其の夜は頂上に露宿、「五更の天もしら〳〵と己が友呼ぶ群烏遙か麓を告げ渡る聲もろともに山を下りつゝ＝社殿（著者曰、神戸宮なり）に奉幣を捧げ＝多年登山の願望此の時成就して＝」云々。終りに十七名の姓名を列記してある。是れ實に今を溯ること二百二十五年であつた。其の後正しく百年を經て漸く文政年間に到り善光寺行者音界なるもの、又此の馬羅尾口を辿りて屢々登山、松本和泉町講中にて右音界の石像を其の上り口に立てたるは文政八年六月で、彼の槍ケ岳へはじめて行者播隆の登りたる年に先つ事一年であつた。兎に角今普通には右音界を以て有明山開祖と考へ、更らに百年を溯る享保六年の史實は全く忘られて居るのみならず、近頃は又外に宮城口の登山道も出來、又中房温泉より所謂裏山をかければ半日にして往き返り得る事にもなつたが、古來鄕土人に第一の親みを以て仰がれ、又平安朝以來歌人の憧憬する所でもあつた此の名山の歴史を問へば大略右の如しとす。なほ有明山を禮拜する現存社として最古のものは、既記の如く神戸有明山社であるか、特に此の社の秋祭に行はるゝ相撲は昔から近鄕に知られ、相撲年寄浦風林右衛門直政より永代四本柱免許を得て居る（因みに浦風の墓は大町彈誓寺に在り、壽山院良泰日壯信士、弘化二年六月五日と刻す）。さて又右神戸宮の奥社は有明山頂なる中の岳

（山頂は北の岳、中の岳、南の岳に別る）の中央、東への下り際に、里よりも其れと氣附き得る程なるクロベの巨木有り。其の根方なる大岩石の懐に風雨を除けつゝ東面して三尺程の祠在します。祠の前また二段ほど自然に石段の形を成せり。更らに下る事十數間のお山懐に、同じく東面の大岩窟あり、優に十餘人を宿らしむべく、且つ窟中水自ら滴り出でゝ渇を醫せしむ。凡そ昔は諸事素朴にして今日の如く堅固なる工事を成し得ざりし爲、右の如き祠も山頂露出の所に奉建すれば、强風に吹き飛び積雪に押潰される恐れ有り。よつて右の如き安全の場所を選びたるもの、且つ參拜諸民避難休息のため右の如き岩屋をも見立てた事であつたらう。又右奥社の少し北に天狗の寢床と云ふ奇岩あり、北岳には鐘岩あり、更に松川村馬羅尾登山路には瀧の澤の劍摺鉢など云ふ不思議の瀧壺もあつて、其の昔は行者が垢離を取つた場所であるが、今は宮城登山路が開けて、馬羅尾口は登るもの多からず。其れでも右奥社及岩窟一帶の地は今なほ松川村に屬し、神戸宮と馬羅尾登山路の古き歴史を語りつゝあり。恨むらくは現今登山の人々、山頂に羅列せる宮城社の奥社をはじめ、數多の講社が奉建せる立派な諸祠に額けども、最古の奉建に成る此の松川村神戸宮の奥社は山頂よりいさゝか東への下り際、岩懐に隱くり在しますを以て知り奉るもの甚だ少し。彼の講を結び又其の講祖を靈神と祀る等信仰登山の益々盛んなること嬉しき限りなると共に、昔の昔、元のまた元を尋ね出して古人敬神の意をも汲むべきではあるまいか。

○青む冠着霞める四阿、清き流れの坂井川

【解三十七】 東筑坂井村字松場の廢寺を超脫した山村風景である。

○鼠穴見りや繪のよなけしき、山を屏風に梅櫻

【解三十八】 鼠穴は北安松川村の西南、山麓に據った一部落、其處の丘陵の出先なる一間ほどの岩に子供の拳の入る位の穴有るを鼠の穴と云ひ、例の勝椀傳說を有つて居る。思ふに鼠は不寢見て寢ずの番など置かれた地名、卽ち根津、念珠ケ關、鼠宿等多くは其れで中古には要害や烽火臺など有つた事もあるだらう。又勝椀傳說は土器片等の出土する古墳地方に關係有り。記して參考とする。

○岳の屏風に青田の疊、安曇平は千疊敷

○たんぼ田の中涼しいけれど、夜は蚊攻めで泣かされる

○昔や狐の出た御殿場も、今ちや青田で螢飛ぶ

○池田大町もとより都次ぎの都は綠町

【解三十九】 右は北安での歌、南安では之を替へて「穗高豊科もとより都次ぎの都は柏矢町」と唄ふ。綠町柏矢町ともに街道筋でちよつと町がかつた所、小意氣なお茶屋もあつて客を呼ぶと知るべし。此の外に北安四ツ谷、南安有明驛附近が登山口の關係から近年特に發展して來た事は見逃せない。

○たんぼ(烏川村字下堰) 好いとこ豊科さかひ、三味や太鼓を寢しな聞く

○八坂、廣津は大麥小麥、大豆小豆や桑畑

○八坂大字、大塚中に、西は切久保、大平

○舟場、野平犀川のほとり、北に離れた左右の里

○松川板取細野に神戸、神戸原越しや鼠穴

◎此處は住吉、溫な村よ、末を長尾に暮したい

◎穗高、等々力、白金、矢原、續く村々仲の好さ

【備四十】 昔の盆唄では下の句を「能くも續いた重柳」と唄った。

○高瀨入りなら山また山よ、平村とはなぜ云ふた

○平村とは其りや誰が云ふた、木崎出ぬけりや山ばかり

○扇町とは其りや誰が云ふた、町の事ア指け只の村

◎米の飯を見て腰を拔かしたと、小室中塔は山の中